

平成 27 年 3 月授与  
関西大学審査学位論文

日常生活場面において生起するソース・モニタリング・エラーを  
規定する要因に関する検討

関西大学大学院 文学研究科  
教育学専攻 教育心理学専修 博士課程後期課程  
02D2081 中田英利子

# 目 次

第Ⅰ部 研究背景・方法論.....	1
第1章 序論.....	2
第1節 ソース・モニタリングの定義とその種類.....	2
第2節 本論文の発展.....	6
第3節 本論文の目的と構成.....	10
第2章 ソース・モニタリング・エラーに関する従来の知見.....	12
第1節 ソース・モニタリングを理解するための基礎的な考え方.....	12
第2節 ソース・モニタリング・エラーの規定因に関する実験室的記憶研究.....	17
第3節 ソース・モニタリング・エラー経験に関する日常記憶研究.....	22
第3章 ソース・モニタリング・エラーに関する従来の知見に対する批判的検討.....	23
第1節 従来の実験的記憶研究法によるソース・モニタリング・エラー測定の限界.....	23
第2節 従来の日常記憶研究法によるソース・モニタリング・エラー測定の限界.....	29
第3節 日常生活場面におけるソース・モニタリング・エラーを予測するための研究方法.....	31
第Ⅱ部 実証的研究.....	32
第4章 ソース・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と妥当性・信頼性に関する研究.....	33
第1節 日常生活場面におけるソース・モニタリング・エラー経験の実態を捉えるための日誌法的研究.....	33
第2節 日常生活場面におけるソース・モニタリング・エラー経験質問紙の作成.....	38
第3節 ソース・モニタリング・エラー経験質問紙の基準関連妥当性に関する検討.....	43
第4節 ソース・モニタリング・エラー経験質問紙の再検査信頼性に関する検討.....	45
第5節 ソース・モニタリング・エラー経験と社会的望ましさ.....	47
第6節 ソース・モニタリング・エラー経験と認知的失敗傾向.....	50
第7節 本章のまとめ.....	55
第5章 ソース・モニタリング・エラー経験を規定する認知特性・性格特性に関する日常記憶研究.....	56
第1節 ソース・モニタリング・エラー経験と抑うつ傾向.....	56
第2節 ソース・モニタリング・エラー経験と没入傾向.....	60

第3章 ソース・モニタリング・エラー経験と解離性体験	63
第4章 ソース・モニタリング・エラー経験と鮮明な視覚イメージ体験	65
第5章 ソース・モニタリング・エラー経験と視覚イメージスタイル	69
第6章 ソース・モニタリング・エラー経験と無意図的想起経験	73
第7章 ソース・モニタリング・エラー経験と強迫神経症傾向	77
第8章 本章のまとめ	82
第6章 実際のソース・モニタリング・エラーを規定する要因に関する実験室的記憶研究	84
第1節 記録時に自発的に処理される視覚イメージが与える影響	84
第2節 記録からテストまでの保持期間が与える影響	93
第3節 テスト刺激が与える影響	98
第4節 本章のまとめ	105
第7章 ソース・モニタリング・エラー経験と実際のソース・モニタリング・エラーとの関連性に関する日常記憶研究と実験室的記憶研究	106
第1節 ソース・モニタリング・エラー経験と実際のソース・モニタリング・エラーとの関連性	106
第2節 本章のまとめ	117
第III部 総括	118
第8章 総括	119
第1節 日常生活場面において経験されるソース・モニタリング・エラーを防止するための方法	119
第2節 今後の展望	123
第3節 本論文のまとめ	125
引用文献	127
謝辞	141
付録	142

## 第 I 部 研究背景・方法論

## 第1章 序論

### 第1節 ソース・モニタリングの定義とその種類<sup>1</sup>

日々、我々は現実の出来事を見聞きしたり、自らの思考や想像によって情報を産出している。こうした複数の情報源に由来する経験を保持し、再経験するための認知機能は記憶と呼ばれている。記憶は記録、保持、想起の3段階から構成される。記録とは最初の経験を覚えることであり、記録された経験を覚え続けることは保持、保持されている経験について思い出し再経験することは想起と呼ばれている。そして、記録された経験は、その内容によってエピソード記憶と意味記憶とに大きく分類することができる。エピソード記憶とは、特定の時空間的文脈に位置づけることができるような経験に関する記憶である。意味記憶とは一般的な知識に関する記憶を指す。日常生活場面において経験される多様なエピソードは、まずエピソード記憶として記録される。そのうち、経験に関する焦点的な意味情報が既存知識と統合され、記憶される。一方、経験を特定の時空間的文脈に位置づけるような詳細情報は既存知識に合致するように変容されて保持されるか、思い出しにくくなる。このように、経験内容に関わる中心的な意味情報はある程度正確に保存されるが、経験を特定の時空間的文脈に位置づけているような詳細情報に関しては変容されながら記録される働きが記憶には備わっている。このような働きは記憶の構成・再構成と呼ばれている。構成・再構成的な記憶の働きによって、個々の経験に関するエピソード記憶から、特定の時空間的文脈を超越した汎用性の高い意味記憶が生成されるのである。時々刻々と変化してゆく外的環境へ適応してゆくためには、個々の経験を特徴づけている詳細情報が思い出しにくくなりながらも、汎用性の高い意味記憶が生成されてゆく働きが不可欠であると考えられる。

また、こうした自らの記憶活動をコントロールし、その結果についてモニタリングすることに関わる認知機能はメタ記憶と呼ばれている。メタ記憶によって、ある予定についての記憶がすでに実行されたものなのかどうか、現実の出来事を知覚したことによるものであるのか、それとも、夢で見たことや想像したことによるものであるのか等の様々な情報源に由来する記憶とを弁別することができる。そのため、様々な情報源により記録されたとしても、外界と内界、自己と他者との識別することができ、自らの記憶をある程度客観的事実に基づいて捉えることもできるのである。

いずれの働きも我々の適応にとって不可欠なものであるが、Ebbinghaus(1885/1964)以来蓄積してきた記憶に関する心理学的知見の殆どが、経験の内容に関する記憶をその検討対象としてきた。そのため、エピソードを特定の時空間的文脈に位置づける詳細情報がどのように記録され、また、記録されたエピソードをどのように特定しているのかといつ

---

<sup>1</sup>第1節は次の発表資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2005). ソース・モニタリング・パラダイムに関する批判的検討 教育科学セミナー, 36, 57-69.

た問題については明らかにされてこなかった。ある情報がどのようにして獲得されたのか(たとえば、出来事の空間的、時間的、社会的文脈や、情報を入手した媒体やモダリティなど)を特定するためのさまざまな特徴はソースと呼ばれ(Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993) (source monitoring : 以下、SMとする), 対象となる情報の由来するソースを区別する認知過程はソース・モニタリングと呼ばれている(Johnson, 1998, 2006)。例えば、ある話についてAさんから聞いたのか、それとも、Bさんから聞いたのかというような判断過程や、実際に家賃を振り込んだのか、それとも振り込もうと考えていただけなのかといったことについての判断過程がSMに当たる。日常生活場面において、SMは常に正確になされるわけではない。すでに心臓病の薬を服用したにも関わらず服用していないと思い込んでしまう場合のようにソースを勘違いしてしまうこともしばしば経験される。このように、ある記憶と別の記憶を取り違えてしまう記憶現象はソース・モニタリング・エラー(source monitoring error : 以下、SMエラーとする)と呼ばれている。SMが正常になされることは、我々が周囲との信頼関係を保ちながら健康的で豊かな生活を送ることにとって非常に重要なものであり、SMエラーは我々に大きな損失をもたらす。そこで本研究では、SMエラーを取り上げ、SMエラーの防止に資する知見を得るために、SMエラーを規定している要因について検討を加えてゆく。

SMという用語は3つの意味で使用されている(金城, 2001)。それは、ソース・メモリを弁別し判断する認知プロセス、ソース・メモリを弁別し判断する能力、ソース・メモリを研究する際に使用される課題の3つである。そのため、金城(2001)では混乱を避けるために、ソース・メモリを弁別し判断する認知過程をSM、ソース・メモリを弁別し判断する能力をソース・モニタリング能力、ソース・メモリを研究する際に使用される課題をソース・モニタリング課題と呼んでいる。本研究においても混乱を避けるために、金城(2001)の呼称に従うこととする。

SMは、その対象となる記憶が実際に知覚したり、行為を実行することによって外的に獲得されたものに由来するのか、あるいは、自らの思考や想像により内的に生成されたことに由来するのかによって3種類のものに分類することができると考えられている(Johnson et al., 1993)。まず、内的に生成されたことに由来する記憶と、外的な対象を知覚したことに由来する記憶とを区別する認知過程については、特にリアリティ・モニタリング(reality monitoring : 以下、RMと呼ぶ)と呼ばれている。オープンのスイッチを切ったことを確認したのか、あるいは、オープンのスイッチを切ろうと考えていただけなのかについて判断する過程や、大家さんに家賃を支払おうと考えていただけなのか、それとも、実際に家賃を支払ったのか等について判断する過程がRMに当たる。また、重要な業務内容についてA氏とB氏のどちらから聞いたのかを判断する過程や、近隣で発生した事故に関するニュースはでラジオで聞いたものであったのか、それとも、新聞で読んだものであったのかについて判断する過程のように、外界を知覚したことに由来する複数の記憶を区別する認知過程については外部情報のソース・モニタリング(external-external monitoring : 以下、外部情報のSM)と呼ばれている。最後に、業務内容に関するメール

を送信したという記憶は夢に由来するものであるのか、あるいは、まだ実行していないが送信しなければならないという自らの思考に由来するものであるのかを区別する認知過程のように、思考や想像したことによって内的に生成されたことに由来する複数の記憶を区別する認知過程は内部情報のソース・モニタリング(internal-internal monitoring: 以下、内部情報のSM)と呼ばれている。

SMの種類については、上述したように、対象となる記憶が知覚や実行された行為によって外的に獲得されたものであるのか、あるいは、思考や想像によって内的に生成されたものであるのかという分類基準によって3つに分けることができる。しかしながら、RMと内部情報のSMの定義に関しては研究者によって齟齬が生じている。Smeets, Jelicic, Merkelbach, Peters, Fett, Taverniers, Henquet, & Dautzenberg(2006)は自らの思考に由来する記憶と実際の経験に由来する記憶とを区別する認知過程を内部情報のSMと定義している。一方、Hashtroodi, Johnson, & Chrosniak(1989)は自ら生成したことに由来する記憶と実際に言及したことに由来する記憶とを区別する認知過程をRMと定義している。このような、SMの分類基準について齟齬が生じているのは、Johnson et al.(1993)においてRMを2種類の方法で定義することができると述べているものの、Johnson et al.(1993)ではその2つの定義が混在しており、特に使い分けられていないことに起因すると考えられる。

Johnson et al.(1993)では、RMとは内的に生成された情報についての記憶と外的に獲得された情報についての記憶とを弁別することであると定義された場合には、自ら声に出したことに由来する記憶と実際に聞いたことに由来する記憶とを区別することが例示されている。一方、RMとは他者からも観察可能なうちに由来する記憶とそうでないものに由来する記憶とを区別することであると定義された場合には、未だ実行されていない行為を想像したことに由来する記憶なのか、すでに実行された行為に由来する記憶なのかを区別することがRMに該当するとJohnson et al.(1993)では述べられている。さらに、内部情報のSMについては、発言したことに由来する記憶と思考に由来する記憶のように、内的に獲得された複数のソースを弁別することであるとJohnson et al.(1993)では述べられている。つまり、RMに関する前者の定義に従えば、実行された行為についての記憶は外的に獲得された記憶に該当するが、他者からも観察可能か否かという定義に従うと、それは内部情報のSMの1種であるとも捉えることができるため、実行したことについての記憶が、内的に獲得されたものであると解釈することもできる。

実行された行為についての記憶が外的に獲得されたものであるのか、内的に獲得されたものであるのかを判断するためには、実行された行為に由来する記憶と未だ実行されていない行為について想像したことに由来する記憶を対象としたSM研究(Garry, Manning, Loftus, & Sherman, 1996; Goff & Roediger, 1998; Lampinen, Odegard, & Bullington, 2003; Thomas, Bulevich, & Loftus, 2003)が参考になるだろう。Lampinen et al.(2003)は、ある行為を実行させるか想像させた後、それぞれの質的特徴について評定するよう求めた。行為についての想像を繰り返したことによって、想像したことに由来する記憶には

感情や思考や運動といった詳細情報が多く伴っていると評定された。それに伴って、行為を想像したことに由来する記憶と行為を実行したことに由来するものであると勘違いするSMエラーが増大した。これらの研究から得られた知見は、行為を想像したことに由来する記憶と実行された行為についての記憶との違いは知覚的詳細情報の量であるということ、知覚的詳細情報を多く伴う記憶は外的に獲得されたものであるということが示唆されたと言えるだろう。したがって、実行された行為は外的に獲得されたものであり、自ら言及したことに由来するものであるのか、あるいは、自ら思考したことに由来するものであるのかを区別する過程はRMに該当するものであると判断するのが妥当であると言える。

以上のことから、本研究では想像や思考に由来する記憶と知覚したことや実行された行為に由来する記憶とを区別する認知過程をRMと呼び、想像や思考したことに由来する複数の記憶を区別する認知過程を内部情報のSMと分類する。

本節ではSMの定義、SMの分類と分類基準について言及した。次節では、本研究の目的、心理学的記憶研究におけるSMの位置づけ、本研究の意義について述べる。

## 第2節 本論文の発展<sup>2</sup>

記憶に関する科学的心理学研究の礎を築いたのはEbbinghaus(1885/1964)である。それまで記憶や思考のような高次精神過程について実験的に検討することは不可能であると考えられていたが、Ebbinghausは無意味綴りを集めた系列リストを刺激としたこと、実験時の環境や精神状態を一定に維持することなどにより、二次変数が統制された実験事態を設定した。さらに、再学習法という記憶の測定法を開発し、意識的な想起に依存することがない記憶をも含めて数量化することに成功した。このような工夫によって、より客観的で組織的に記憶研究を行うことができる可能性を示したのである。

Ebbinghaus以降の記憶研究では、無意味刺激を用いられることが多かったが、文章や絵刺激のような有意味な材料を用いて、構成・再構成的記憶についての実験的研究を行い、現在の記憶研究に大きな影響を与えたにはBartlett(1932)である。Bartlettは文章や絵刺激を記憶させた後に再生させると、文章の中心的な意味となる情報の想起は実際に呈示された情報に基づいていたが、話の細部に関しては対象者自身が自らの知識やスキーマに合致するように作り出した情報を混同して報告された。このような結果から、Bartlettは、記憶とは想起者の先行知識やスキーマに基づいて、過去の出来事を再構成したものであると考えるようになった。しかしながら、Ebbinghausの研究の伝統を受け継ぎ、刺激と客観的に観察可能な反応との結合関係を対象とした行動主義的心理学が興隆する最中ににおいては、記憶に対するその鋭い洞察にも関わらず、Bartlett(1932)のような、有意味刺激により生体の内的過程の解明を試みた研究が注目されることはあまりなかった。

情報処理科学が発展した1960年代により、記憶を人間の情報処理の一過程として捉え、生体の内的な処理過程に関する知見が蓄積されていった(Mandler, 1967; Pavio, 1969)。記憶を構成する記録・保持・想起の3段階を、情報処理用語である符号化(encoding)・貯蔵(store)・検索(retrieval)といった用語に置き換えて、人間の記憶過程について論じられるようになった。また、自由再生法を採用した実験事態において観察される系列位置効果(serial position effect)を説明するために、感覚貯蔵庫、短期貯蔵庫、長期貯蔵庫から構成される記憶に関する多段階貯蔵モデル(Atkinson & Shiffrin, 1968)も提唱された。

1970年代に入り、生体が外界について能動的に処理する過程について明らかにする試みがなされるようになった。まず、処理水準モデル(Craik & Lockhart, 1972)が提唱された。このモデルによると、人間の情報処理の過程には、単語を構成する情報のうち音韻や形態といった浅い水準の処理から、単語の意味情報といった深い水準の処理まであり、より深い処理を行うことにより忘却が生じにくくなるというものであった。同時期に、自ら既存知識を用いて内的に生成された単語は、呈示された単語を読まれただけよりも想起さ

---

<sup>2</sup>第2節は次の発表資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2005). ソース・モニタリング・パラダイムに関する批判的検討 教育科学セミナー, 36, 57-69.

れやすくなるといった生成効果(generation effect)(Slamecka & Graf, 1978)についても検討されるようになった。また、文章を実験刺激として採用した文章記憶に関する研究によって、人間は経験したことについてそのまま記録しているというよりは、経験内容に関わる焦点的な意味情報を記憶し、想起時には意味情報に基づいて経験の詳細情報が構成・再構成されているということが示唆された(Bransford & Johnson, 1973)。こうした文章記憶の研究によって、これまでの記憶研究においてあまり注目されることがなかったBartlett(1932)の構成・再構成的記憶研究が脚光を浴びることとなったのである。

また、二次変数の統制された実験室内で無意味綴りや単語のリストを刺激とした記憶現象をその検討対象としてきた多くの実験室的記憶研究に対して、日常生活場面における多様な刺激に対する記憶現象を検討対象とした日常記憶研究を行うべきであるという認識が記憶研究者に広く受け入れられるようになり、日常記憶研究も盛んに行われるようになってきた(Cohen, 1996 ; Neisser, 1982)。また、我々の日常生活場面においては、これまでの記憶研究において検討対象となってきた過去に経験した出来事についての記憶だけでなく、未来に予定された出来事に備えるための行動計画を記憶する展望的記憶(prospective memory)も日常記憶研究において検討されることとなった。

これまでの多くの実験室的記憶研究は、多様な記憶過程の中の特定の過程に焦点を絞り、そこでどのようなメカニズムが働いているのかを解明しようとする試みがなされてきた。しかしながら、日常生活場面においては記憶が単独で機能するわけではなく、記憶を含めた認知活動を円滑に遂行するためのメタ認知やメタ記憶といった高次の認知能力が重要な役割を果たしている。現在のメタ記憶研究の源流の1つ(清水, 2009)であるFlavell(1971)は、子どもの記憶発達に関する研究の中から自らの記憶活動や記憶状態についての認識に関する重要な知見を報告した。Flavell(1971)以降、メタ記憶研究は、子どもの記憶発達のみだけでなく成人や高齢者や精神疾患有する者を検討対象として盛んに行われるようになった。

1970年代後半に、自らの夢に由来する情報と実際に知覚したことに由来する情報とを区別する認知過程に関する研究がJohnsonとその共同研究者によって報告された(Johnson, Taylor, & Raye, 1977)。その後、Johnson & Raye(1981)が、自らの想像や思考したことに由来する記憶と実際に知覚したことに由来する記憶とを区別する認知過程をRMと命名し、さらに RMの過程を説明するためのワーキングモデルも提唱した。同時期にRMを測定するための標準的な実験手続きがJohnson, Raye, Foley, & Foley(1981)によって確立されている。Johnson et al.(1993)によってRMの概念やそのワーキングモデルを拡張したSMやSMを理解するためのフレームワーク(source monitoring framework : 以下、SMFとする)が提唱されて以降、SM課題を用いたSM研究やソース・メモリ研究は飛躍的に増加したのである。

SM課題における錯誤、すなわちSMエラーはこれまでの様々な記憶研究と重ねてみることができる。Bartlett(1932)や文章記憶に関する心理学的研究から、我々の記憶が自らの既有知識を用いて外部からの情報を記憶するという構成・再構成的側面を有しており、

構成・再構成的記憶によって外的に獲得された情報と自ら思考や想像したこととが混同されてしまうというSMエラーが生起しているとも捉えることができる。ただし、Bartlett(1932)や文章記憶に関する心理学的研究においては、呈示された情報に関する記憶のうち、その意味情報を想起するよう求めていたのに対して、SMでは呈示された情報についての記憶が何に由来するものであるのかを同定させることを通して、記憶を特徴づけている詳細情報がどのように記憶されているのかについて明らかにすることができると考えられる。

SMは記憶の構成・再構成的側面のみならず、メタ認知の1種であるとも考えることができる。メタ認知とは、認知活動全般にかかる認識や知識を指し(Brown, 1978)，メタ認知にはメタ認知的知識とメタ認知的活動とが含まれる(Flavell, 1987)。特に、メタ認知的活動には、現在、何かを記録しなければいけない状況にあるという認識をもつことや、将来の想起の必要性を自覚すること、刺激材料や記憶課題の性質にあわせて適切な記憶方略を実行すること、自己の記憶活動の諸状態を監視すること、自己の既有知識のなかに当該の情報があるかどうかを点検することなどが含まれる(清水, 2009)。SMは記憶を特徴づけている記憶痕跡の特徴が直接検索されるのではなく、記憶痕跡の特徴から対象となる記憶の由来を帰属させるという推論のプロセスであると考えられており(Johnson et al., 1993)，自らの記憶に伴う記憶痕跡の特徴についてモニタリングを行うという点においてメタ認知的活動の1つであると言うことができる。したがって、SMについて検討することは、我々の適応に不可欠であるメタ記憶的活動の一端を明らかにできるという点において有意義なものであると考えられる。

SM課題における錯誤、すなわちSMエラーは日常生活場面においてたびたび生起する。図書館で貸し出した書籍を期限内に返却していないにも関わらず、既に返却したと思い込んでいたり、Aさんにミーティングの日時を連絡しようと考えただけなのに、実際に連絡したと思い込んでいたり、医師に指示された通りに食前に薬を服用したにも関わらず服用していないのかもしれないと思い込んでしまう等が経験されることがあるだろう。このように、日常生活場面においてしばしばSMエラーは経験される、身近なものであると言えるだろう。しかし、SMエラーの中には解離性障害<sup>3</sup>や強迫神経症<sup>4</sup>の主たる症状として体験されるものも存在するということが指摘されている(Hyman & Pentland, 1996； Hermans, Engelen, Grouwels, Joos, Lemmens, & Pieters, 2008)。そのため、SMの障害を有する者は大変な苦痛を味わっている(Hout, Merckelbach, & Pool, 1996； Rachman, 1997)。しかしながら、従来のSMエラー研究のうち、実験室的記憶研究法によってのみ

<sup>3</sup>解離性障害とは、同一性、記憶、意識の統合機能における障害である(Putnum, Helmers, & Trickett, 1993)。解離性障害とSMエラーとの関連性についての詳しい議論は、第5章・第3節を参照されたい。

<sup>4</sup>強迫神経症(obsessional compulsive disorder)とは、自らの意志や理性に反して侵入的で繰り返し浮かんでくる不合理で不快な強迫観念(obsession)と、そのような強迫観念を減衰させたり、脅威事態を避けるために行われる強迫行為(compulsion)により悩まされる状態を指す(細羽・内田・生和, 1992)。強迫神経症とSMエラーとの関連性についての詳しい議論は、第5節・第7節を参照されたい。

測定されたSMエラーをその検討対象とした研究が大半を占めており、日常生活場面において経験されるSMエラーについての詳細な検討は殆ど認められない。日常生活場面におけるSMエラーについて把握し、その規定因について検討を加えてゆくことは、SMエラー経験を理解し、エラー経験やそれに伴う苦痛を軽減するための方策を開発する手がかりを得るために重要な研究課題であると考えられる。

本節では、本論文の目的、心理学的記憶研究におけるSMの位置づけ、本論文の意義について述べた。次節では、本論文の構成について述べる。

### 第3節 本論文の目的と構成

本論文の目的是、日常生活場面において生起するSMエラーを規定する要因について検討を加えることを通して、SMエラーと関わりのある精神疾患への理解を深め、その改善方策を開発する手がかりを得ることである。具体的な研究課題は、以下の4つである。

第1の研究課題は、日常生活場面において生起するSMエラーの実態把握し、SMエラー経験を網羅的に測定することができる研究方法を整備することである。この課題を達成するため、これまでなされてきたSMエラー研究に関する研究の展望を行い、その研究方法について批判的検討を加える。次いで、従来の研究方法の難点を克服することができる研究方法の提案を行い、日常生活場面において経験されるSMエラーを測定するための質問紙を開発し、その妥当性と信頼性について検討してゆく。

第2の研究課題は、日常生活場面において経験されるSMエラーを規定する要因について調査的検討を行うことである。これまで蓄積してきたSMエラーの規定因に関する心理学的知見を概観し、SMエラー経験の個人差を規定しうる認知特性や性格特定について調査的検討を加える。

第3の研究課題は、日常生活場面において生起するSMエラーを規定する要因について実験的検討を行うことである。日常生活場面において生起するSMエラーを規定する要因に関する心理学的知見について概観した上で、規定因の検証を図るために実験的検討を行う。

第4の研究課題は、日常生活場面において生起するSMエラーのうち、調査的研究によって測定されるようなSMエラー経験と、実験室的研究によって客観的に測定される実際のSMエラーとの関連性について検討を行うことである。

以上、4つの研究課題を完遂するために、本研究は以下のような構成をとる。

まず第1章では、本研究の目的と意義、そして、それを達成するために本論文の構成について述べた。

第2章では、実験室的研究法によって測定されたSMエラーに関する従来の知見を概観し、現時点において得られている主要な知見と、SMの過程を理解するために提唱されたSMF (Johnson et al., 1993)について紹介する。

第3章では、第2章で紹介された知見に対して批判的検討を加え、従来の研究法の難点を克服するために日常生活場面において発生するSMエラーを検討対象とする目的とした研究法について提案してゆく。

第4章では、日常生活場面において経験されるSMエラーを測定することを目的とした調査的研究を実現するために、日常生活場面において経験されるSMエラーを網羅的に測定することができる質問紙を開発し、その妥当性と信頼性に関する検討を加える。

第5章では、第4章で開発されたSMエラー経験質問紙を用いて、日常生活場面におけるSMエラー経験の個人差について検討するために、SMエラー経験と様々な認知特性・性格特性との関連性について検討を加える。

第6章では、第5章における調査的研究において未検討であったSMエラーを生起させる要因について実験室的研究法を用いて検討を加えてゆく。

第7章では、日常生活場面において経験されるSMエラーと実験室的研究法により測定された実際のSMエラーとの関連について検討を加える。

第8章では、総括として、本書全体を総括するとともに、今後の展望について論じる。

## 第2章 ソース・モニタリング・エラーに関する従来の知見

### 第1節 ソース・モニタリングを理解するための基礎的な考え方<sup>5</sup>

本節では、SMエラーを測定し、理解するために提唱された基礎的な考え方について述べる。具体的にはSMを測定するためにJohnsonとその共同研究者によって考案された標準的なSM課題を用いた実験、SMを理解するソース・モニタリング・フレームワーク、ソース・モニタリング含めた記憶システム全体を説明するためのMEM記憶システムについて概観する。

#### 概要

Johnson et al.(1993)によると、SMは記憶に伴って想起される記憶の特徴に基づいて行われると考えられている。記憶の特徴とは、記憶が形成されるときに成立する情報であり、知覚的詳細(perceptual details)情報や認知操作(cognitive operations)情報がこれに含まれる。知覚的詳細情報とは、知覚・想像した出来事の色・形・音色などに関する情報のことを指す。認知操作情報とは、知覚・想像した出来事に対して体制化・精緻化・検索・識別といった処理を行うことにより生じる情報を指す。一般に、知覚や実行された行為に由来する記憶には知覚的詳細情報が多く伴い、自らの思考や想像に由来する記憶には認知操作情報が多く伴う。そのため、想起される記憶の特徴に多くの知覚的詳細情報が伴う場合には、その記憶は知覚に由来するものであると判断される。一方、多くの認知操作情報が伴う場合には、その記憶は自らの想像に由来するものであると判断される。したがって、知覚に由来する記憶であっても認知操作情報が多く伴う場合や、思考や想像に由来する記憶であっても知覚的詳細情報が多く伴う場合には、SMエラーが生じると考えられている。

#### ソース・モニタリングを理解するための枠組み

記憶には、思考や想像によって内的に獲得されたものであるとか、知覚や行為を実行したことによって外的に獲得されたものであるといったソースを意味するラベルが記されているわけではない。想起時に行われる複雑な推論過程の結果としてソースが特定されると

<sup>5</sup>第1節は次の発表資料に基づく。

中田英利子 (2003). ソース・モニタリング課題における視覚的詳細の質に関する検討—視覚的特徴の共通する対象と、概念カテゴリーの共通する対象の比較— 日本心理学会第67回大会発表論文集, 870.

中田英利子 (2004). ソース・モニタリング課題における判断手がかりに関する検討 日本心理学会第68回大会発表論文集, 829.

中田英利子・森田泰介 (2005). ソース・モニタリング・パラダイムに関する批判的検討 教育科学セミナー, 36, 57-69.

考えられている(Johnson et al., 1993)。まず、出来事を経験する際、我々は既存知識やスキーマを用いて出来事を理解し、記録する。そして、SMを行うよう要求されると、知覚的詳細、時間や空間に関する情報、意味情報、感情情報、過去経験について想起した際の心的経験、そして、記録時の認知操作などの情報に基づいて、過去経験が構成・再構成される(Johnson et al., 1993)。いかなる物が構成・再構成されるかは、記憶痕跡の特徴、保持期間、他の記憶、既存知識やスキーマ、記憶についての信念、テスト刺激との相互作用によって異なる。そして、構成・再構成物を評価するための基準もまた、評価するための時間や動機などの諸条件によって変動しながら、SMは行われる(Johnson et al., 1993)。

SMの方略にはヒューリスティック(heuristic)なものと、システムティック(systematic)なものとがあると考えられている(Johnson, 2006)。ヒューリスティックなSMとは、想起された記憶痕跡の特徴(知覚的詳細情報、時空間情報、意味情報、感情情報、記録時や想起時の心的動作など)と、内的・外的なソースに対する考え方とを比較し、推論される過程を通して、迅速に自動的に行われるものである。その判断過程には意図や意識が伴わない(Johnson et al., 1993)。我々は、線画が実験刺激として視覚呈示されたとしたら、その記憶には知覚的詳細情報が伴うはずであるという記憶に対する信念を持っている。もし、SMを行う際に知覚的詳細情報が想起されたとすれば、その記憶は線画を見たことに由来するものであると判断するのである。また、自己生成されたことに由来する記憶には、心的動作を行ったことにより苦労して産出したという認知操作情報が多く伴うはずであるという信念を持っている。そのため、自己生成されたものであったのか、あるいは、実験者によって呈示されたものであったのかといった判断を要求された場合、認知操作情報が多く想起されれば、自ら生成されたものであると判断されるのである。

これに対して、記憶痕跡の特徴に基づいた判断というよりかは、既存知識や記憶についての信念に基づいて、ソースが適切なものであるかについて意識的あるいは意図的に判断される、これをシステムティックなSMと呼ぶ(Johnson et al., 1993)。あるパーティ会場に友人が居たという鮮明な記憶が想起されたと想定する(Johnson et al., 1993)。しかし、その記憶は間違ったものであると判断される。なぜなら、そのパーティが開催されている日時に、その友人は入院していたということを知っているからである。この場合、パーティが開催されている日時に友人は入院していたという既存知識に基づいて、パーティ会場に友人が居るという記憶が間違ったものであるという判断がなされたということになる。

正常なSMは、記憶痕跡の特徴が鮮明で詳しい場合、独自性の高いものである場合、適切な判断基準が適用されている場合に成立する。したがって、SMが正常になされない、すなわち、SMエラーが発生してしまうのは、記録、保持・想起のいずれかの段階において、こうした条件が充足されていなかったことを意味する。

### 標準的なソース・モニタリング課題

SMやSMエラーを測定することを目的とした実験事態は、記録セッションとテストセッ

ションから構成されている。記録セッションでは、たとえば、項目を視覚表示するか、あるいは、視覚的なイメージを生成させる。この際、後にソースについてたずねるテストが行われることは告げず、研究目的に応じた方向付け課題を遂行させることにより、刺激への注意を払っていることを補償している。記録セッション終了後、旧項目と新項目とを混ぜた言語ラベルのリストを視覚表示し、視覚表示されたものであったか、視覚的なイメージを生成したものであったのか、記録セッションでは表示されたなかつたものであったかを判断するよう求める。視覚イメージを生成したものに認知操作情報が多く伴ったため、視覚イメージを生成したものであったと回答した場合にはSMが正常になされたことになるが、視覚イメージを生成したものであるのに知覚的詳細情報が多く伴ったため、視覚表示されたものであったと回答した場合や、記憶痕跡の特徴が想起されなかつたため記録時に表示されていないものであったと回答した場合にはSMエラーとなる。

SMの判断手がかりとなる情報は、ソースや刺激の種類に大きく依存するため、様々なソースや刺激とSMとの関連性が検討されてきた。例えば、単語(Johnson et al., 1981; Marsh & Hicks, 1998; Raye, Johnson, & Taylor, 1980)、言語ラベルと線画(Henkel & Franklin, 1998; Hoffmann, 1997; Lyle & Johnson, 2006)、写真と文章(Intraub & Hoffman, 1992)、映像や音声(Henkel, Franklin, & Johnson, 2000)、実演された行為と想像しただけの行為(Garry et al., 1996; Goff & Roediger, 1998; Lampinen et al., 2003; Thomas et al., 2003)、声の持ち主(Dodson & Shimamura, 2000; Johnson, Nolde, & De Leonardis, 1996)などである。

### 記憶痕跡の特徴に関する主観的な経験

いかなる記憶痕跡の特徴に基づいてSMが行われているのかを検討するために、記憶の質に関する質問紙(Memory Characteristics Questionnaire：以下、MCQとする)(Johnson, Foley, Suengas, & Raye, 1988b)を用いて、記憶痕跡の質的特徴について自己評定するよう求めることがある(Arbuthnott, Geelen, & Kealy, 2002; McGinnis & Roberts, 1996; Suengas & Johnson, 1988)。MCQとは記憶痕跡に伴う質的特徴を主観的に報告させる質問紙で、記憶の鮮明さ、記憶情報に関する時空間情報、感覚情報などに関する質問項目により構成されるものである。

Suengas & Johnson(1988)は、複雑な記憶に関わる記憶痕跡の特徴が時間経過に伴ってどのように変化するのかを明らかにするために、様々な自伝的な出来事をシミュレートした実験を行った。台本によってミニイベント(包装する、他者と面会する等、コーヒーとクッキーを飲食する等)を実際に体験させるか、想像させるかした後、それぞれの出来事についての記憶痕跡の特徴についてMCQにより評定するよう求めた。その結果、視覚的な明瞭さや文脈的詳細については、想像に由来する記憶よりも実際の体験に由来する記憶の方が上回っていることが示された。さらに、実際に体験したことによる記憶については、時間経過に伴って視覚的詳細情報や他の特徴へのアクセス可能性が減少するが、想像に

由来する記憶については視覚的詳細情報やその他の詳細情報について保持されているということが見出された。

また、Johnson et al.(1988b)は自伝的記憶に伴う質的特徴について調べるために、最近経験した出来事についての記憶と幼少期の出来事についての記憶とを想起させ、それぞれの記憶に伴う質的特徴についてMCQにより自己評定するよう求めた。その結果、自伝的記憶を対象としたSMであっても、知覚に由来する記憶と自らの想像や思考に由来する記憶とを区別するために、知覚的詳細情報や認知操作情報を使用するということが示された。Johnson et al.(1988b)が得た知見は、実験室的記憶研究法によってSuengas & Johnson(1988)が得た知見とほぼ同様のものである。これらの知見から、実験場面であっても日常生活場面であっても、記憶のソースを弁別するためには、時空間に関する明瞭性、知覚的詳細情報、心的な操作に関わる情報が必要であるということが示唆されたと言えるだろう(Johnson, 2006)。

MCQ以外に、Remember/Know(R/K)手続き(Gardiner, 1988)を用いて記憶痕跡の質的特徴を評定させるといったアプローチが採用されることもある。Remembering (“思い出せる”)とは、既に実行された行為であると判断されたもののうち、その行為を実行した詳しい状況や実行する際に考えていたことなどの記憶経験の詳細が意識的に回想できる状態を指し、Knowing (“知っている”)とは、既に実行された行為であると確信が持てるほど熟知しているが、行為を実行した際のいかなる記憶経験の詳細も回想できない状態を指す(藤田, 1999)。得られたRemember反応は記憶経験の回想(recollection)の指標として、Know反応は記憶経験を伴わない熟知性(familiarity)の指標としてみなされている(藤田・堀内, 2004)。

MCQとR/K手続きを用いた場合とで、それらの記憶痕跡の特徴がどのように評価されるのかが比較された(Mather, Henkel, & Johnson, 1997 ; Henkel et al., 2000)。その結果、MCQを用いた場合には、記憶痕跡の特徴を注意深く吟味するため、記憶の錯誤が減少した。一方、R/Kは互いに異なる質的経験であることが報告されているもの(Qin, Raye, Johnson, & Mitchell, 2001)、記憶痕跡の特徴の細かなニュアンスを捉えることができないため、R/Kの手続きによって、SMエラーを減少させることができないという知見が得られている。

### 記憶やソースに関する知識の利用

SMは、上記したような記憶痕跡の特徴にのみ基づいて行われるものではない。対象者自身が有する記憶やソースについての知識も利用しながらSMは遂行されることもある(Bayen, Nakamura, Dupuis, & Yang, 2000 ; Johnson et al., 1988b ; Spaniol & Bayen, 2002)。Johnson et al.(1988b)は、自伝的記憶に関する記憶や知識や信念について検討するために、社会的な状況において実際に知覚されたことに関する記憶と、空想したことのような想像によって内的に獲得された記憶を想起するよう求めた。実際に知覚したことによ

由来する記憶については、日時などの時間や場所や知覚的詳細情報が参照される傾向にあった。カレンダーに記録していたため、その出来事を実際に経験したと分かる、実際に実行したことについての記憶に買い物に行く予定であったという記憶が伴っていた等である。また、想像したことによって内的に獲得された記憶については、一般的な知識に基づいて推論されるという反応が最も頻度が高いものであった。空想の中で私が医者であったが、実際には年齢が若すぎるために医者にはなれない、そのためその記憶は想像に由来するものであったと考えられる等である。

また、Mather, Johnson, & De Leonardis(1999)はステレオタイプがSMに及ぼす影響について実験的に検討した。若齢群と高齢群のどちらにおいても、ステレオタイプと一致する情報についてはSMを正常になすことができた。しかし、特に高齢者においては、ステレオタイプと不一致である情報を想起することができなかつたためSMエラーが生起した。こうした知見は、記憶やソースに関する正しい知識を利用することで、正常にSMを行うことができるが、自らの知識と不一致である情報を想起することは困難であるため、SMエラーを犯してしまう可能性もあることを示唆するものである。

本節では、SMを理解するための基礎的な考え方について述べた。次節では、SMエラーを規定因に関する実験室的記憶研究について概観してゆく。

## 第2節 ソース・モニタリング・エラーの規定因に関する実験室的記憶研究

### 記録時の感情喚起度

上述したように、SMを行う際には知覚的詳細情報や認知操作情報といった記憶痕跡の特徴が主に採用される。そのため、記憶痕跡の特徴が適切に記録されないことによってSMエラーが生じることがある。例えば、強い感情が喚起されたことによって詳細情報が記録不全に陥ってしまうためにSMエラーが生じるという報告がなされている(Hashtroodi, Johnson, Vnek, & Ferguson, 1994 ; Johnson et al., 1996 ; Mather, Mitchell, Raye, Novak, Greene, & Johnson, 2006)。

Johnson et al.(1996)は、感情喚起度の統制されたトピックをA氏あるいはB氏のどちらかの声により聴覚呈示し、実験対象者にトピックの感想を考えるよう求める自己注目条件と、話し手がトピックをどのように感じていたかを実験対象者に推測させる他者注目条件とを設定した。テストセッションでは、A氏あるいはB氏のどちらの声で呈示されたものであったか、あるいは、記録セッションでは呈示されていないトピックであったのかについて判断するよう求めるSM課題を課した。その結果、感情喚起度の強いトピックについて、他者注目条件よりも自己注目条件におけるSMエラーが上回っていた。この結果は、記録時に話し手の声質などの知覚的詳細情報よりも自らの思考や感情に注意していたことに起因する記録不全によってSMエラーが生じたと解釈された。

刺激の感情喚起度と個人特性がSMエラーに与える影響についても報告されている。Mather et al.(2006)は、感情喚起度の統制された写真をPCのモニターの異なる場所に瞬間に呈示した後、写真が呈示された場所を想起するよう求めた。その結果、感情喚起度の高い写真ほどその呈示位置についての判断を求めるSMの成績は低下した。さらに、抑うつ傾向が高いものほど、写真の呈示場所を同定することに失敗する傾向が見出された。この結果は、対象者の感情が強く喚起されるほど、写真の内容についての記憶と呈示場所についての記憶とが適切に記録されなかつたことに依るものであると解釈された。これらの知見は、記録時に出来事の詳細情報よりも自らの感情や思考へ注意していたために起こる記録不全によってSMエラーが生じることを示唆するものである。

### 記憶痕跡の特徴の類似度が高いことによる影響<sup>6</sup>

一般に、知覚に由来する記憶には知覚的詳細が多く伴い、思考や想像に由来する記憶には認知操作情報が多く伴う。そのため、知覚に由来する記憶であるのに認知操作が多く想

---

<sup>6</sup>第2項は次の発表資料に基づく。

中田英利子 (2003). ソース・モニタリング課題における視覚的詳細の質に関する検討—視覚的特徴の共通する対象と、概念カテゴリーの共通する対象の比較— 日本心理学会第67回大会発表論文集, 870.

起されたり、思考や想像に由来する記憶であるのに知覚的詳細が多く想起された場合にSMの錯誤は生じる。

### 認知操作の顕在性が低いこと

記録時に意識的な認知操作があまり要求されなかった場合、思考や想像に由来する記憶であっても、認知操作が多く伴わないと、知覚に由来するものであると勘違いしてしまうSMエラーが生起するというit-had-to-be-you効果<sup>7</sup>が見出されている(Arbuthnott et al., 2002 ; Johnson, Kahan, & Raye, 1984 ; Johnson, Raye, Wang, & Taylor, 1979)。

Johnson et al.(1981)は、認知操作情報が少ない記憶には、その記憶が想像や思考に由来する記憶であっても知覚に由来する記憶であると誤って判断されるという仮説を検討するために、カテゴリ一名のみからターゲットを生成させるか(頭文字なし条件)、あるいは、カテゴリ一名と単語の頭文字によりターゲットを生成させ(頭文字あり条件)という方向付け課題を課した。意味情報を生成するための認知操作があまり要求されない頭文字なし条件のSMエラーが、頭文字あり条件よりも上回っていた。Johnsonらが見出した知見は、意味情報を生成させるような方向付け課題を課した場合、生成されたものであったか否かの判断が要求された際に認知操作情報が判断手がかりとなることを示唆するものであり、記録時に認知操作を行うことにより後の記憶成績が向上するという自己生成効果に関する知見(Slamecka & Graf, 1978)とも一致するものであった。

これらの研究は、自発的なイメージに伴う認知操作情報も顕在性が低いため、意図的に生成されたイメージとの識別が困難になるという知見とも一致するものである(Durso & Johnson, 1980)。

### 類似度の高い複数の記憶の統合

想像や思考に由来する記憶であっても、知覚に由来する他の記憶と統合されることによって(Henkel & Franklin, 1998 ; Henkel et al., 2000 ; Johnson, Foley, & Leach, 1988a ; Lyle & Johnson, 2006)，鮮明性の高い視覚イメージが体験されてしまったために、知覚に由来するものであると勘違いされるSMエラーについて報告されている。

Henkel & Franklin(1998)は、複数の実験刺激の類似度の高さがSMエラーに及ぼす影響を検討している。彼らは、視覚呈示した線画と視覚イメージを生成させた線画が知覚的に

---

<sup>7</sup> it-had-to-be-you効果とは、SMの対象となる記憶について、知覚されたものであったのか、自ら生成したものであったのかというソースに関する2つの選択が求められた際に、実験者によって呈示されたものを知覚したことにより外的に獲得された記憶であるという判断をしやすいという帰属のバイアスを指す(Johnson et al., 1981)。実験対象者は、自ら生成したものに由来する記憶には鮮やかな認知操作情報が伴うはずであると期待しているが、当該の記憶にはそうした期待と合致する記憶痕跡の特徴が伴わないと、実験者に呈示されたものを知覚したことによる記憶に違いないと推論されるのである。

似ている条件(眼鏡とロリポップキャンディ), 視覚表示した線画と視覚イメージを生成させた線画が意味的に似ている条件(ワイシャツとズボン)とを比較した。さらに, それぞれの条件において知覚的詳細に注意を払わせるために線画の描写に要した時間を評定させる方向付け課題や, 概念カテゴリーに注意させるために対象物の使用法を判断させる方向付け課題を課した。その結果, 意味が似ている条件よりも知覚的に似ている条件のSMエラー率が上回っていた。この他にも, 知覚された声と想像された声とが似ている場合や(Johnson et al., 1988a), 知覚的には異なるが意味情報が同じである複数の記憶を混乱してしまう場合(Henkel et al., 2000; Lyle & Johnson, 2006)にもSMエラーが生起する。これらの知見は, 想像や思考に由来する記憶であっても, 意味・知覚的詳細などの類似度が高い知覚に関する記憶と統合されてしまったために, 鮮明な知覚的詳細を伴うイメージが体験されることによってSMエラーが発生してしまうことを示唆するものである。

### 時間経過による情報の減衰<sup>8</sup>

保持期間中に記憶痕跡の特徴が減衰してしまうことによってSMエラーが生起するという報告がなされている。Suengas & Johnson(1988)は, 複雑な記憶に関する内容と保持期間を統制し, 様々な自伝的な出来事をシミュレートした実験を行った。台本によってミニイベント(包装する, 他者と面会する等, コーヒーとクッキーを飲食する等)を実際に体験させるか, 想像させるかした。その後にMCQを用いて, 記憶痕跡の質的特徴について評定するよう求めた。その結果, 視覚的な明瞭さや文脈的詳細については想像に由来する記憶よりも実際の体験に由来する記憶の方が上回っていることが示された。さらに, 実際に体験したことによる記憶の場合には, 時間経過に伴って知覚的詳細情報や他の特徴へのアクセス可能性が低減するが, 想像に由来する記憶であれば, 視覚的な詳細情報や他の詳細情報についても保持されるという知見が見出された。Suengas & Johnson(1988)の知見は, 時間が経過したとしても, 想像や思考に由来する記憶には知覚的詳細が多く伴うため, 知覚されたものであると勘違いされるSMエラーが生起するという可能性を示唆するものである。

---

<sup>8</sup>第5項は次の発表資料に基づく。

中田英利子 (2002). 現実とイメージを混乱させる要因の検討—ソース・モニタリング・パラダイムを用いて—日本心理学会第66回大会発表論文集, 662.

中田英利子 (2008a). ソース・モニタリング課題における誤判断に関する検討 哲学論集, 54, 学会活動報告大谷大学哲学会秋季研究会, 102.

中田英利子 (2008e). ソース・モニタリング課題における誤判断に関する検討—知覚とイメージにより記録した事象間のクロスモーダルな誤判断について— 基礎心理学研究, 27, 21-25.

## 記憶痕跡の特徴への評価が変化すること<sup>9</sup>

適切に保持された情報であっても、SMは想起時の判断過程を通じて遂行されるため、想起時の様々な要因によってSMエラーが生起すると考えられている(Johnson et al., 1993)。Raye et al.(1980)は、項目を2, 5, あるいは8回のいずれかでイメージさせ、そして、同じ項目を2, 5, あるいは8回のいずれかで視覚表示することにより記録させた。テストセッションでは、イメージを生成した回数あるいは視覚表示された回数についての判断を求めたところ、イメージの生成回数が増えるほど当該の項目は視覚表示されたものであると判断された。しかしながら、テストセッションにおいて頻度判断の回数に制限が設けられると、生成項目を視覚表示に帰属させると傾向は減少した。いかなる判断が遂行されるかはテスト時の認知的要求に依存していて、イメージを生成する際に成立した認知操作情報が視覚的詳細情報の代わりに判断手がかりとして利用されたためであると考えられた。この結果は、テスト時にイメージの生成回数や視覚表示された頻度についての判断に回数制限が設けられることによって、想起された記憶痕跡に対する評価が変化するということを示唆するものである。このように、実験室のSM課題により測定されているエラーは想起時の要因との関連性も強調されていると言えるだろう。

## テスト時の刺激や呈示方法の影響

テスト時の刺激や呈示方法と一致する情報が想起されやすいため正常にSMを行うことができるが、不一致である情報は想起されにくいためSMが干渉されてしまうという報告がなされている(Dodson & Shimamura, 2000 ; 畠中・藤田, 2004 ; Leynes, Bink, Marsh, Allen, & May, 2003 ; Senkfor & Van Petten, 1998)。Dodson & Shimamura(2000)は、テスト刺激がSMに与える効果を検討するために、記録セッションでは男声あるいは女声から名詞を聴覚表示した。テストセッションでは、その2種類のどちらかの声で刺激を呈示し、記録セッションでは女声で呈示されたものであったか、男声で呈示されたものであったかを同定するよう求めた。その結果、テスト時の声と一致する場合にSMが促進され、テスト時の声と不一致である場合にSMは干渉されるということを見出した。こうした知見は、適切に記録や保持がなされた情報であっても、テスト時の刺激や呈示方法によって

<sup>9</sup>第6項は次の発表資料に基づく。

- 中田英利子 (2007a). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵の効果(1) 日本認知心理学会 第5回大会発表論文集, 201.
- 中田英利子 (2007b). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵の効果(2) 日本心理学会第71回大会発表論文集, 804.
- 中田英利子 (2008c). 記録時とソース・モニタリング課題時の処理の一貫・不一致の効果 日本認知心理学会第6回大会発表論文集, 49.
- 中田英利子 (2008d). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵刺激の効果(3) 日本心理学会第72回大会発表論文集, 861.

はSMが干渉されてしまったり、SMエラーが生起してしまう可能性を示唆するものである。

### 判断基準

知覚的詳細情報と認知操作情報の量は、記録させたリスト内で相対的に判断されるため、SMを行う際にその判断基準は変動しやすいという知見が報告されている(Dodson & Johnson, 1993 ; Lindsay & Johnson, 1989 ; Multhaup, 1995)。

テスト形式によってSMの判断基準が変動することはDodson & Johnson(1993)によって検討されている。Dodson & Johnson(1993)は、風景の写真を視覚呈示するか、文章を読ませるかした。ただし、写真のうち数枚が文章の内容と一致するものであった。その後、文章で読んだだけなのに写真で見たものであると勘違いするSMエラーが生起した。この結果は、熟知性に基づいて旧項目であったか否かの判断を要求する再認テストよりもSMテストを課した方が、より詳細に想起し、厳しい判断基準を採用するため、エラー率は少なくなると考えられた。

自らの記憶について自己評価する際に、厳しい判断基準を採用するよう訓練することによって、高齢者のSMエラーを克服することができるといった報告もなされている(Multhaup, 1995)。これらの知見は、想起時に採用される基準が寛容なものである場合にはSMエラーが生起しやすく、判断基準が厳密なものである場合にはSMエラーがあまり生起しないことを示唆するものであった。

本節では、SMエラーの規定因に関する実験室的記憶研究について言及した。次節では、日常生活場面において経験されるSMエラーに関する調査的研究について概観してゆく。

### 第3節 ソース・モニタリング・エラー経験に関する日常記憶研究

日常生活場面におけるSMエラーに関するこれまでの研究は、その数が極めて限られているものの、日常生活場面において経験されるSMエラーの頻度や規定因について解明しようとする試みがなされている(Johnson et al., 1988b; Johnson et al., 1984; Kemp, Burt, & Sheen, 2003; Suengas & Johnson, 1988)。

Johnson et al.(1984)は、対象者自身が見た夢を記録させた後、2人1組のペアを組ませて、記録した夢を互いに報告させた。その後、自分自身が見た夢であったのか、パートナーから報告されたものであったのかというSMを行うよう求めた。その結果、対象者自身の夢と、相手から報告されたものとを混同するSMエラーが生起した。夢に由来する記憶は、内的に獲得されたものであるものの、意図的に生成された記憶ではない。そのため、認知操作の顕在性は低く、自分自身の夢に由来する記憶と知覚に由来する記憶との識別に失敗してしまったと考えられた。Johnson et al.(1984)の知見は、認知操作の顕在性が低いことに起因するSMエラーは、二次変数の統制された単語を刺激とした実験室実験においてだけでなく、日常生活場面においても生起するということを示唆するものであった。

また、Kemp et al.(2003, 研究2)は夢の中の出来事を現実の出来事であると誤って認識してしまうというSMエラーの経験について検討した。その結果、3ヵ月以内に誤認識を経験したことがあると回想的に報告した調査対象者の割合は61%であり、経験数の中央値は2件であったことが報告されている。彼らが見いだした結果は、SMエラーが1日に1度というような高頻度で経験されないことを示すものであった。

本節では、日常生活場面において経験されるSMエラーについて言及した。次章では、本章で言及してきた従来のSMエラー研究を批判的に検討することを通して、日常生活場面において発生するSMエラーを規定する要因を検討する方法について提案してゆく。

## 第3章 ソース・モニタリング・エラーに関する従来の知見に対する批判的検討

### 第1節 従来の実験室的記憶研究法によるソース・モニタリング・エラー測定の限界<sup>10</sup>

第2章では、従来のSM研究により得られた知見について概観した。第3章では、従来のSM研究により得られた知見に対する批判的検討を行うことを目的とする。第1節の目的は、実験室的記憶研究法によってのみSMエラーを測定することの限界点について述べることである。

#### 生態学的妥当性の欠如

我々の日常生活場面において、SMを遂行することが求められる状況は決して少なくない。例えば、自宅の鍵をかけたかどうか、ガスのスイッチを切ったかどうか、医師からの指示通りに薬を服用したかどうか、家賃の支払を実行したかどうか、自分を罵ったのはA氏であったのかB氏であったのか等についての判断過程にSMは関わっており、我々にとって非常に身近なものであると言えるだろう。日常生活場面におけるSMエラーを規定する要因を解明することは、我々が円滑で安心できる日常生活を送るために不可欠なものであると考えられる。

しかしながら、従来のSM研究では、二次変数の統制された刺激を実験室内で呈示することにより測定されたSMエラーをその検討対象としたものが大半を占めていた。そうした実験室的記憶研究法によって測定されたSMエラー研究は、特定の条件下におけるSMエラー発生のメカニズムについて明らかにしてきたという点において有意義なものであった。ただし、従来のSM研究において採用された研究方法は、剩余変数の統制されない多様な情報が刺激となる日常生活場面を想定したものはあまり認められないため、従来のSM研究により得られた知見は生態学的妥当性が欠如していた可能性があると考えられる。日常生活場面において発生するSMエラーの全体像を把握するためには、従来のSM研究から得

---

<sup>10</sup>第1節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子 (2004). ソース・モニタリング課題における判断手がかりに関する検討 日本心理学会第68回大会発表論文集, 829.

中田英利子・森田泰介 (2005). ソース・モニタリング・パラダイムに関する批判的検討 教育科学セミナー, 36, 57-69.

中田英利子 (2007a). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵の効果(1) 日本認知心理学会 第5回大会発表論文集, 201.

中田英利子 (2007b). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵の効果(2) 日本心理学会第71回大会発表論文集, 804.

中田英利子・森田泰介 (2014a). リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 85, 168-177.

られた知見のうち、どのような点において生態学的妥当性が欠如していたのか、そして、従来のSM研究において解明されてこなかった問題点について考慮しておくことが求められると考えられる。第3章では実験的状況と日常生活場面との違いについて考察することを通して、従来のSM研究のいかなる点において生態学的妥当性が欠如していたのかを示してゆく。

**予めソースが操作的に定義されていることの影響** 従来の実験室的記憶研究法によるSM研究では、特定のソースによりターゲットを記録させた後、ターゲットのソースについて同定するよう求めている。記録セッションにおいて、男声あるいは女声のどちらか一方により単語を聴覚呈示したとする。そして、テストセッションにおいて、単語を視覚呈示して、女声で呈示されたものであったのか、男声で呈示されたものであったのかに関する判断を求める。こうした実験事態におけるソースとは、男声あるいは女声を指す。声以外に様々なものがソースとして採用されている。例えば、視覚呈示されたものであったか、生成されたものであったか(Marsh & Hicks, 1998)、実験者の声により聴覚呈示されたものであったか、参加者自身の声で聴覚イメージされたものであったか(Johnson et al., 1988a)、参加者が実演した行為であったか、想像しただけの行為であったか(Goff & Roediger, 1998)、線画が呈示されたのはPCモニターの右であったか左であったか(Lyle & Johnson, 2006)などがある。

ここで注意したいのは、テストセッションにおいて想起することが求められるソースは、実験者によって予め操作的に決定されたものであり、基本的に1つのソースに対して1つの項目が割り当てられているという点である。こうした事態は、日常生活場面において頻繁に認められるものであろうか。むしろ、ある出来事について視覚や聴覚といった複数のモダリティに由来する情報を記録し、時間が経過することにより統合された後、SMを行う際に、複数のモダリティのうちターゲットやソースとが定義されるといった状況の方が多いと想定される。例えば、男声によりミーティングに関する重要事項を聞き、そして、女声からミーティングの日時について聞いたとする。こうした出来事についての記憶には声質などの聴覚情報のみならず、相手の顔などの視覚情報や、周囲の状況などの多様な記憶痕跡の特徴が伴うはずである。また、この時点においてソースは定義されていない。そして、記録してから時間が経過した後、男性からの連絡を聞いたかどうかを尋ねられたとしたら、男声がターゲットとして定義されることになる。ミーティングの日時を教えてくれたのは、男声であったか女声であったかを尋ねられたとしたら、男声・女声がソースとして定義されたということになる。

いかなる情報がソースとして定義されるかによって、SM課題での成績が異なるとすれば(McDounough & Gallo, 2010)、実験室的研究法によって測定されたSMエラーの認知メカニズムと日常生活場面において発生するSMエラーのそれとは異なるものである可能性が考えらえる。したがって、1つの項目に対して1つのソースが予め操作的に定義されている実験室的研究法によって得られた知見から、日常生活場面において発生するSMエラーを予測し、満足のゆく予防法を提案できるとは言い難いのである。

**方向づけ課題の採用による影響** 実験室的記憶研究法を用いた従来のSM研究の殆どが、記録セッションにおいて方向付け課題を遂行するよう求めることにより、実験参加者が刺激に対して注意を払っているということを補償している。Johnson et al.(1981)は、認知操作情報が少ない記憶には、その記憶が想像や思考に由来する記憶であっても知覚に由来する記憶であると誤って判断されるという仮説を検証した。カテゴリー名からターゲットを生成させる条件(以下、頭文字なし条件)と、カテゴリー名とターゲットの頭文字から単語を生成させる条件(以降、頭文字あり条件)を比較した。その結果、頭文字なし条件と比較して、頭文字あり条件におけるRMエラー率が上回っていた。頭文字なし条件と比較して、頭文字あり条件の方が自動的に反応しやすいため、認知操作をあまり行う必要がないため、頭文字あり条件の方がSMエラーを犯しやすいと考えられた。

Henkel & Franklin(1998)は、複数の実験刺激の類似度の高さがSMエラーに及ぼす影響を検討している。彼らは、視覚呈示した線画と視覚イメージを生成させた線画が知覚的に似ている条件(眼鏡とロリポップキャンディー)、視覚呈示した線画と視覚イメージを生成させた線画が意味的に似ている条件(ワイシャツとズボン)を比較した。さらに、それぞれの条件に知覚的詳細に注意を払わせるために線画の描写に要した時間を評定させる方向付け課題や、概念カテゴリーに注意させるために対象物の使用法を判断させる方向付け課題を課した。その結果、意味が似ている条件よりも知覚的に似ている条件のSMエラー率が上回っていた。この結果は、SMを行う際に知覚的詳細情報が重要な手がかりになりうることを示唆するものであった。

これらの研究では、記録時に方向付け課題を遂行させることにより後のSMの手がかりとなる情報へ注意を払っているということを補償したうえで、どのようにして記憶痕跡の特徴が想起されるのかという構成・再構成される記憶のメカニズムを検討対象としてきたという点について有意義なものであったと言えるだろう。ただし、日常生活場面においては常に刺激に注意が払われているとは限らない。例えば、自宅の戸締まりをする際に他の用事も行っていた、体調が悪くぼんやりしていた、目の前の課題とは別の考え方をしていた等である。日常生活場面では、常に刺激にのみ注意を払っている状況ばかりではなく、刺激に注意しながらも他の課題を遂行するための処理を同時にしているといった状況も想定することができる。したがって、方向付け課題により刺激にのみ注意が払われていることが補償された事態において得られたデータから、日常生活場面において発生するSMエラーを予測し、エラーを防止することができるとは言い難いのが現状である。

**テスト刺激が言語ラベルであることの影響** 従来のSM研究では、様々な実験刺激を採用してきた。例えば、言語刺激(Johnson et al., 1981 ; Marsh & Hicks, 1998 ; Raye et al., 1980), 線画(Henkel & Franklin, 1998 ; Lyle & Johnson, 2006), 写真と文章(Intraub & Hoffman, 1992), 動作(Garry et al., 1996 ; Goff & Roediger, 1998 ; Lampinen et al., 2003 ; Thomas et al., 2003), 映像や音声(Henkel et al., 2000)などである。刺激によって認知操作情報や知覚的詳細情報の量や質が異なることがSMに影響すると考えられているからである。Johnson et al.(1981)は、単語を刺激として採用し、認知操作情報の量が少ないことが

SMエラーを生起させるという知見を報告している。Lampinen et al.(2003)は、行為についてのイメージを繰り返すことによって、知覚的詳細が増大するため、実行されたものであると勘違いするSMエラーが生起すると報告している。Lampinen et al.(2003)の実験結果は、想像された行為と実行された行為とを区別する際には、知覚的詳細情報が重要であることが示唆するものである。

ただし、これらの研究の大半がテストセッションにおいて言語ラベルのみを呈示して、SMを行うよう求めているという点に注意が必要である。刺激によって何が重要な手がかりとなるかを解明してきたという点において有意義なものであるが、その数は限定されているものの、テスト時の刺激や呈示方法と記録材料との一致・不一致がSMに及ぼすということが報告されているからである(Dodson & Shimamura, 2000; 畑中・藤田, 2004; Kelly, Jacoby, & Hollingshead, 1989 ; Leynes et al., 2003 ; Senkfor & Van Petten, 1998 ; Wilding, Doyle, & Rugg, 1995)。Dodson & Shimamura(2000)は、テスト刺激がSMに与える効果を検討するために、記録セッションでは男声あるいは女声から名詞を聴覚呈示した。テストセッションでは、その2種類のどちらかの声で刺激を呈示し、記録セッションでは女声で呈示されたものであったか、男声で呈示されたものであったかを同定するよう求めた。その結果、テスト時の声と一致する場合にSMが促進され、テスト時の声と不一致である場合にSMは干渉されるということを見出した。このような効果はソース一致効果(source-match effect)と呼ばれた。彼らは、テスト刺激と一致する記録刺激は活性化されるため、SMが正しく行われるが、テスト刺激と不一致である記録刺激は不適切な活性化が行われるため、SMが干渉されると解釈した。

日常生活場面においてもテスト刺激が常に言語ラベルであるとは限らないであろう。具体的には、書店にてある本を見つけた際に、この本はすでに購入したものか否か、すでに購入したものであるとすれば自宅の何処に保管していたかと考える場合や、自宅の鍵をかけたか否かについて考える場合が挙げられるだろう。日常生活場面においては言語ラベル以外にも対象物、行為、線画などの様々なものがテスト刺激となりうるのである。しかしながら、テスト刺激がSMに及ぼす影響についてのデータの蓄積が満足できるものであるとは言い難いのが現状である。

### 日常生活場面におけるソース・モニタリング・エラーの個人差に関するデータ不足

これまでのSMエラーに関する研究は、実験室実験によりSMエラーの個人差を測定し、その個人差と様々な認知特性や精神疾患との関連性を明らかにしてきた(e.g., Aleman & de Haan, 2004 ; Divilbiss, McCleery, Aakre, Seghers, Schumann, & Docherty, 2011 ; Dobson & Markham, 1993 ; Hecker & Meiser, 2005 ; Hout & Kindt, 2003 ; Hyman & Billings, 1998 ; Reese, McNally, & Wilhelm, 2001)。例えば、Hecker & Meiser(2005)は、抑うつ傾向に起因する注意散漫とSMエラーとの関連性について調べるために、抑うつ傾向が高い者と低い者とのSM成績を比較した。その結果、抑うつ傾向が高い者は、低い者と比較し

て、SMを行う際に必要な手がかり情報とは無関係なものへ注意していたということが示されたものの、両群のSMエラーに有意差は認められなかった。Hecker & Meiser(2005)の結果は、抑うつ傾向とSMとの関連性をうかがわせるものであるものの、抑うつ傾向の者が示す注意傾向に起因するSMエラーについては更なる検討を要するものであることも示唆されたと言えるだろう。

また、Hyman & Billings(1998)は、どのような特性を持つ個人がSMエラーを犯しやすいのかを明らかにするために、解離性体験尺度(Dissociative Experiences Scale：以下、DESとする)(Bernstein & Putnam, 1986)や創造的イメージ尺度(Creative Imagination Scale)の得点と、SMエラーの傾向との関連について検討している。その結果、DES得点や創造的イメージ尺度得点と、SMエラー傾向との間には有意な相関が見られるが、社会的望ましさ尺度や、没入性尺度とエラー傾向との間には有意な相関が見られないことを報告している。解離性体験とSMエラー傾向との間に相関が見られるとの結果は、解離性体験傾向が高い者は、外的な情報を自己概念に統合しやすく、さらにSMを行う際の基準が寛容である可能性を示唆するものである(Hyman & Billings, 1998)。また、Aleman & de Haan(2004)は空想傾向が高い者と低い者との間でSMエラーの傾向に相違が見られるのかを検討し、両者の間に相違が見られないことを報告している。一般に、空想傾向が高い者は鮮明なイメージを保持することができ、そのことが現実の出来事の記憶とイメージされた出来事の記憶の識別を難しくすると考えられるが(Johnson & Raye, 1981)，彼らの結果はJohnson & Raye(1981)の知見が常に支持されるわけではないことを示唆するものである。

強迫神経症の主たる症状の1つである確認行為<sup>11</sup>がSMやSMに対する確信度に起因するものである可能性について検討するために、例えば、Hout & Kindt(2003)は、コンピューター上のストーブのスイッチや電球のスイッチを繰り返し確認させた。そして、それぞれの記憶に伴う詳細情報や記憶に対する確信度を比較した。その結果、ストーブのスイッチを繰り返し確認した群は、そうでない場合よりも、最後に行われた確認行為に対する確信度、鮮明さ、詳細情報が減少するということが見出された。その他に確認行為とSMに対する確信度との関連性について検討した研究は行われているものの、採用される刺激によってはSMに対する確信度と繰り返し行われる確認行為との関連性が認められないという報告もなされている(e.g., Brown, Kosslyn, Breiter, Baer, & Jenike, 1994)。そのため、確認行為を繰り返してしまうことがSMに対する確信度の低さに起因する可能性があるというHout & Kindt(2003)の知見が必ずしも支持されるものではないことも示唆されている。

しかしながら、これらの研究のほとんどがいわゆる実験室研究であり、二次変数の統制された実験室内で実験者が呈示した単純な言葉や画像を刺激とした実験により計測されたSMエラーが検討の対象となっている点に注意が必要である。現状では実験室研究のみによってSMエラーの個人差が測定されており、日常生活場面におけるSMエラーの個人差に

---

<sup>11</sup>強迫神経症の症状の1つである。火の元や戸締まりを繰り返し確認してしまうもので、そのために時間が費やされてしまうため日常生活に支障をきたすことがある(APA, 2000)。詳しくは第5章・第7節を参照されたい。

に関する基礎的データが十分に蓄積されているとは言い難いのが現状である。

第1節では、従来の実験室的記憶研究法により測定されたSMエラーを検討対象としたことの限界点について述べた。第2節においては、従来の日常記憶研究法により測定されたSMエラーを検討することの限界点について言及する。

## 第2節 従来の日常記憶研究法によるソース・モニタリング・エラー測定の限界<sup>12</sup>

日常記憶研究法により計測されたSMエラーを検討対象とした研究は、その数が極めて限られており(Johnson et al., 1988b; Johnson et al., 1984; Kemp et al., 2003; Suengas & Johnson, 1988), かつ、日常生活場面において経験されるSMエラーの種類やエラーを規定する要因に関する検討がなされていないと考えられる。

Johnson et al.(1988b)は、自伝的記憶に関連する記憶や知識について検討するために、社会的な状況における記憶が、知覚したことによるものであるのか、想像によるものであるかを弁別するよう求めた。その結果、知覚による記憶であると判断された際、時間や場所や知覚的詳細情報が参照される傾向にあった。例えば、カレンダーに記録していたためその出来事を実際に経験したことが分かる、実行したことについての記憶には買い物に行く予定に関する記憶が伴って想起された等である。また、想像による記憶であると判断された際には、一般的な知識に基づいて推論されるという反応が最頻度であった。例えば、空想の中で私は医者になっていたが、実際には年齢が若すぎるために医者にはなれるはずがないため、その記憶は想像によるものであったと判断されたのである。Johnson et al.(1988b)の知見は、自伝的記憶が由来するソースを判断する際、記憶痕跡の特徴や一般的な知識が利用されることを示唆するものであった。

また、Kemp et al.(2003, 研究2)は夢の中の出来事を現実の出来事であると誤って認識してしまうというSMエラーの経験について検討した。その結果、3ヶ月以内に誤認識を経験したことがあると回想的に報告した調査対象者の割合は61%であり、経験数の中央値は2件であったことが報告されている。彼らが見いだした結果は、SMエラーが1日に1度というような高頻度で経験されないことを示すものであった。

これらの研究では、日常生活場面において経験されるSMエラーの頻度や自伝的記憶が由来するソースを判断する際に利用される情報について明らかにしようと試みたという点において有意義なものである。ただし、これらの研究においては、SMの手がかり情報を検討対象とするための質的研究法や、夢の出来事と現実の出来事との識別についてのSMエラーを回想的に報告させるといった日常記憶研究法を採用している点に注意が必要である。日常生活場面において発生するSMエラーを防止するためには、SMエラーの全体像やエラーの種類を把握し、それぞれのエラーを規定する要因が明らかにされることが不可欠であると考えられる。しかしながら、従来の日常記憶研究法ではSMエラーの全体像や種類、エラーの規定因に関するデータを計測できるとは言い難いのが現状である。

第2節では、従来の日常記憶研究法によりSMエラーを測定することの限界点を言及した。第3節で、第1節と第2節の述べた従来のSMエラー研究の限界点を克服し、日常生活場面において発生するSMエラーを予測し、防止に資する知見を得るための研究法について提案

---

<sup>12</sup>第2節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2014a). リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 85, 168-177.

してゆく。

### 第3節 日常生活場面におけるソース・モニタリング・エラーを予測するための研究方法<sup>13</sup>

記憶の研究には、大きく分けて実験室的記憶研究法と日常記憶研究法という2つのアプローチがある。かつてはどちらのアプローチがよりすぐれているかという論争もあった(e.g, Banaji & Crowder, 1989 ; Cohen, 1996)が、現在では両方のアプローチが相互的に補完しあうことが実り多い研究のためには重要であると考えられており(森, 2001), そのような研究が活発になされている。例えばメタ記憶研究では、二次変数が厳密に統制された実験室研究が行われる一方で、質問紙などを用いて日常生活場面における記憶行動を検討する研究も盛んに行われており、両方のアプローチによって得られた研究成果を包括的に説明できる理論の構築や修正が進んでいる(清水, 2009)。したがって、SMエラー研究においても両方のアプローチから研究を進めることにより、それぞれ得られた知見に基づいた包括的な理論が構築できると考えられる。しかし現状では実験室的記憶研究法のみによってSMエラーが測定されており、日常生活場面におけるSMエラーの個人差を予測するための基礎的データが十分に蓄積されているとは言い難いのが現状である。

従来の研究のほとんどが日常生活場面におけるSMエラーの個人差を検討対象とすることができなかつた理由は、測定方法の欠如にあると考えられる。例えば、展望的記憶研究においてはSmith, Della Sala, Logie, & Maylor(2000)が展望的記憶のエラーを測定するための質問紙(展望的・回想的記憶質問紙)を開発しており、日常生活場面における展望的記憶のエラーと様々な認知特性や精神疾患との関連性を検討する際に盛んに用いられている。一方、SM研究においてはこれまでそのような質問紙が開発されていない。そのため、日常生活場面におけるSMエラーの個人差を計測できないのが現状である。SMエラーの個人差が測定可能な質問紙があれば、日常生活場面におけるSMエラーの個人差を理解できるため、SMエラー防止に資する知見を得るための一助となるだろう。そこで第4章では、日誌法を用いて日常生活場面において経験されるSMエラーを把握し、その結果に基づいてSMエラー経験の個人差を測定できる質問紙を作成し、その信頼性・妥当性を検討する。そして、第5章では第4章で開発された質問紙を用いて、日常生活場面において経験されるSMエラーを規定する認知特性・性格特性との関連性について探ってゆくことを目的とする。さらに、第5章において検討対象とすることができなかつたSMエラーの規定因について、第6章において実験室的記憶研究法により検討する。これら、質問紙法・実験法を併用することにより、日常生活場面において発生するSMエラーを規定する要因についての全体像を把握することができると考えられる。

---

<sup>13</sup>第3節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2014a). リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 85, 168-177.

## 第Ⅱ部 実証的研究

## 第4章 ソース・モニタリング・エラー経験の質問紙の開発と妥当性・信頼性に関する研究

### 第1節 日常生活場面におけるソース・モニタリング・エラー経験の実態を捉えるための日誌法的研究<sup>14</sup>

前章では、実験室実験のみにより測定されたSMエラー、SMの認知過程について明らかにすることの限界点について述べた。本章では、日誌法を用いて日常生活場面におけるSMエラーの実態を把握し、エラーを測定することができる質問紙の開発とその信頼性・妥当性について検討することを目的とする。第1節では、日誌法を用いて日常生活場面において経験されるSMエラーを収集し、分類することにより、日常生活場面でのSMエラー経験の実態について明らかにする。

日常生活場面におけるRMエラーに関するこれまでの研究は、その数が極めて限られており、その実態に関する知見の蓄積は不十分な状態にある(Johnson et al., 1988b; Johnson et al., 1984; Kemp et al., 2003; Suengas & Johnson, 1988)。Kemp et al.(2003, 研究2)は夢の中の出来事を現実の出来事であると誤って認識してしまうというRMエラーの経験について検討した。その結果、3ヵ月以内に誤認識を経験したことがあると回想的に報告した調査対象者の割合は61%であり、経験数の中央値は2件であったことが報告されている。彼らが見いだした結果は、RMエラーが1日に1度というような高頻度で経験されないことを示すものであった。また、Hyman & Billings(1998)は、どのような特性を持つ個人がSMエラーを犯しやすいのかを明らかにするために、2回にわたる面接を実施し、調査対象者が幼少期に経験したことについてのRMエラー傾向と、DESや社会的望ましさ尺度(Marlow-Crowne Social Desirability Scale: 以下、SDSとする)(Crowne & Marlowe, 1960)との関連について検討した。その結果、DES得点や創造的イメージ尺度得点と、SMエラー傾向との間には有意な相関が認められたが、社会的望ましさ尺度や、没入尺度とエラー傾向との間には有意な相関が認められないことを報告した。これらの研究では、日常生活場面において経験されるSMエラーの頻度や、SMエラー経験と関連する認知特性や性格特性について明らかにしたという点において有意義なものであるが、日常生活場面において経験されるSMエラーの種類やその発生原因を検討対象としたものは殆ど認められない。それは、日常生活場面において経験されるSMエラーの種類や原因を測定するための方法が整備されていないためであると考えられる。

---

<sup>14</sup>第1節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2009). 日常場面におけるソース・モニタリング・エラーに関する日誌法による検討  
日本認知心理学会第7回大会発表論文集, 128.  
中田英利子・森田泰介 (2014a). リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と信頼性・妥当性の  
検討 心理学研究, 85, 168-177.

日常生活場面において経験される、その実態がほとんど明らかになっていない記憶の失敗の原因やその種類を検討対象とするためには、しばしば日誌法が採用されることがある。例えば、小谷津・鈴木・大村(1992)は、展望的記憶課題のし忘れに対する気づきが、いかなる契機によって生起するのかについて日誌法を用いて検討を加えた。18名の対象者は3ヶ月間日誌を携行することが求められた。そして、し忘れなどの失敗に気づいた場合には、し忘れた行為の種類と特徴、保持期間の長さ、予定の記憶方法とそれが役に立たなかつた理由、し忘れ時の自己の状態、し忘れに気づいた契機について記録するよう求めた。その結果、し忘れの無意図的想起のうち内発的な想起と比較して外的事象や外的状況が契機となって開始される外発的な想起のほうが多いということが示された。し忘れの生起がいかなる契機により開始されるかは、無意図的想起の生起メカニズムを考える上で重要な問題であると考えられるため、小谷津ら(1992)において得られた知見は有意義なものであると言えるだろう。小谷津ら(1992)以外にも、日常生活場面における無意図的想起については、これまでごく少数の検討がなされているのみであるが、日誌法を用いた研究によりその実態のほとんど明らかになっていない無意図的想起に関する貴重な知見が報告されてきている(Ellis & Nimmo-Smith, 1993 ; 森田, 2004)。

そこで、本節においても、実態がほとんど明らかになっていない、日常生活場面において経験されるSMエラーの種類やその発生原因について検討を加えるために、日誌法を採用する。日常生活場面においてSMエラーは1日に1度というような高頻度で経験されるものではないというKemp et al.(2003)により得られた知見に基づいて、本研究では調査を3週間実施し、対象者には調査期間中に経験したSMエラーと、そして、調査期間前に経験されたSMエラーであっても調査期間中に想起されたエラーについては日誌に記録するよう求ることにした。

## 方法

**調査対象者** 大学生、大学院生、専門学校生の計35名が調査対象者であった。このうち男性は20名で平均年齢は26歳( $SD = 5$ , 範囲: 20-37), 女性は15名で平均年齢は32歳( $SD = 13$ , 範囲: 21-60)であった。

**日誌の構成** 日常生活場面におけるRMエラー経験について記録することができるA4判の冊子を作成した。冊子には、RMとそのエラーに関する説明を以下のように記載した。RMとは現実に起こった出来事を知覚したことに由来する記憶と、自分の想像やイメージに由来する記憶とを区別することである。RMエラーには2種類のエラーが存在し、それは、自分の想像やイメージに由来する記憶であっても、知覚に由来する記憶であると判断するエラーと、知覚に由来する記憶であっても、自分の想像やイメージに由来する記憶であると判断するエラーである。つぎに、RMエラーの事例と、9つの調査項目も記載した。調査項目は、エラーの内容、エラーに気づいたきっかけ、エラーを経験した時の心的状態、エラーに気づいた時の自分の状況、エラーを経験したおおよその年月日、エラーに気づいた

おおよその年月日、日誌に記入した月日、エラーの理由として想定されるもの、その他に何か気づいたことであった。冊子は10事例まで記述できるように作成され、それ以上の事例があった場合には新たに冊子を手渡しすることになっていた。

**手続き** 調査者が知人に個別に調査を依頼した。調査対象者に冊子を手渡し、冊子に印刷した事柄について口頭で説明した。次に、調査期間中に冊子を可能な限り携帯し、調査期間中に経験したRMエラーを冊子に記入するよう求めた。また、調査期間以前に経験したRMエラーの事例を想起した場合にも、その事例を冊子に記入するよう求めた。全てのエラー経験について9項目の調査項目全てに回答するよう指示した。冊子を手渡ししてから3週間後、全ての冊子を調査者が直接回収した。

## 結果と考察

冊子の回収数は35冊であり、回収率は100%であった。

収集された事例の総数は75件であった。1人当たりの平均報告数は2.14件、最多報告数は6件、最少報告数は1件であった。

この報告数の妥当性について判断する際に、Kemp et al.(2003, 研究2)が見いだした結果が参考になるだろう。Kempらが見いだした結果は、RMエラーが1日に1度というような高頻度で経験されないというものであった。したがって、本研究で収集された事例の数が調査期間や調査対象者の人数に対して少なすぎるとは言いがたいと考えられる。

75件の事例について筆者2名が独立にKJ法によりカテゴリ分類を行った。その際にはエラー内容に関する記述だけでなく、そのエラーを経験したときの心的状態やエラーを犯した理由に関する記述についても分類判断の材料とした。その結果、RMエラーの原因として想定されるものに基づく6カテゴリに事例が分類された。分類の信頼性を検討するためにカッパ係数を求めた結果、 $k = 1.00$ という高いカッパ係数が得られた。

表1に6カテゴリごとの事例数と、実際に報告されたエラー内容を示す。6カテゴリとは、(a)元のソースとは異なる記憶の特徴が想起されたために起こる混乱(想起: e.g., Garry et al., 1996; Henkel & Franklin, 1998; Johnson et al., 1979), (b)記録時に出来事の詳細情報よりも自分の感情や思考へ注意が向いていたために起こる混乱(記録: Hashtroudi et al., 1994; Johnson et al., 1996), (c)時間経過によって記憶の特徴が減衰したために起こる混乱(保持: 中田, 2008e), (d)焦り、寝ぼけ、疲労、他の課題への集中などからくる注意不足による確認・記録不全のために起こる混乱(記録: Jacoby, Woloshyn, & Kelley, 1989), (e)想起時に適切な判断基準で記憶の特徴を吟味しなかったために起こる混乱(想起: Dodson & Johnson, 1993; Lindsay & Johnson, 1989), (f)その他、であった。RMエラーの原因が不明なものについては(f)その他に分類した。6カテゴリのうち、最も多くの事例が分類されたのは(d)であった。この結果から、日常生活場面におけるRMエラー経験の多くが、記録時の要因に起因するものであると示唆された。

表1 ソース・モニタリング・エラー起因ごとの事例

ソース・モニタリング・エラーのカテゴリ	事例数	実際に報告されたエラーの内容 エラーが生起した時の心的状態 エラーを犯した理由
(a)元のソースとは異なる記憶の特徴が想起されたために起こる混乱(想起)	24	<ul style="list-style-type: none"> <li>夢の中でレポートをやっていた。実際にデータを見てやっていないことに気づいた。リアルな夢だったから。</li> <li>もう着なくなった服を友人に譲る話をしていて、実際に渡したと思っていた。友人がその服をとても気に入ってくれていたので、譲つたらさぞ喜んでくれるだろう、と空想していた。ふとクローゼットにあるのを見つけて、びっくりした。友人の喜ぶ顔がありありとイメージできていたから。</li> </ul>
(b)記録時に出来事の詳細情報よりも自分の感情や思考へ注意が向いていたために起こる混乱(記録)	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>頭を洗うときにシャンプーを使ったと思いこんでいたが、実際には使っていなかった。翌日髪に触れたときにシャンプーを使っていないことに気づいた。風呂に入っている時にはたいてい何かとりとめのないことを空想していたから。</li> </ul>
(c)時間経過によって記憶の特徴が減衰したために起こる混乱(保持)	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>生後2-5ヶ月ぐらいの時に食卓の上でオシッコをしたことを覚えていると思っていた。そのことを家族に話した時に、兄から“それは写真で見たからおぼえているだけやろ”と言われて、それもそうやなと思った。</li> </ul>
(d)焦り、寝ぼけ、疲労、他の課題への集中などからくる注意不足による確認・記録不全であったために起こる混乱(記録)	30	<ul style="list-style-type: none"> <li>パソコンのACアダプターを持ち帰ったつもりが、研究室に忘れていた。アダプターをコンパクトにまとめた感じとまとめられたアダプターを見たことは覚えており、それでたきりカバンにしまったと思い込んでしまった。資料の選別に気をとられていた。コンパクトにまとめた時点でカバンに入れたと勘違いしたため。</li> <li>友人にある用事の詳細を伝えていたつもりだったのに、実際は伝わっていなかった。友人が予定時刻になつてもあらわれなかつた。同時に3-4件の事務作業(段取り調整)をしていた。</li> </ul>
(e)想起時に適切な判断基準で記憶の特徴を吟味しなかったために起こる混乱(想起)	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>TVを見ていて、すでに見たことのあるCMを、はじめて見るCMと思い込んだ。同じCMを見ていた妻に指摘されて気づいた。CMが似ていることもあるが、自分は常に新しいCMをチェックしているという、変な自負心があつたから。</li> </ul>
(f)その他	13	<ul style="list-style-type: none"> <li>おさいふをかばんに入れたと思ったが、実際には入っていないかった。切符を買おうとサインを探した時。その時の持ち物を確認していく、手にとったのでそのままかばんに入れたと思い込んでいた。</li> </ul>

なお、カテゴリ(c)及びカテゴリ(e)では、それぞれに分類された事例の数が1件のみであった。これらのカテゴリに含まれる事例は、KJ法による分類を行う際に他のカテゴリに含められないものであった。また、これらの事例はSMエラーの主要な規定因(時間経過、想起時に記憶の特徴を慎重に吟味しなかったこと)によって起こるエラーであると考えられるも

のであった。そのため、これらの事例を分類から除外することは日常生活場面におけるRMエラー経験の実態を把握するという目的に合致しないと判断し、最終的なカテゴリとして採用した。

本節では、日誌法を用いて日常生活場面において経験されるRMエラーを収集し、分類した。その結果、実験室実験においてだけでなく、日常生活場面においてもRMエラーが経験されるということが示された。また、日常生活場面におけるRMエラー経験は、その原因として想定されるものに基づいて6カテゴリに分類可能であるということと、日常生活場面において経験されるRMエラーの多くが、記録時の要因に起因するものであるということが示唆された。

## 第2節 日常生活場面におけるソース・モニタリング・エラー経験質問紙の作成<sup>15</sup>

第4章・第1節では、日常生活場面におけるSMエラーの実態を把握するために、日誌法を用いてSMエラー経験の事例を収集し、エラー経験の原因として想定されるものに基づいて事例を分類した。その結果、SMエラーの原因は6カテゴリに分類されるということが示された。

本節では、第1節で得られた知見に基づいて、日常生活場面において経験されるSMエラーを測定することができる質問紙を作成することを目的とする。第1節において得られた6カテゴリのうち、「(f)その他」を除いた5カテゴリのエラーが均等に含まれよう留意しながら、予備質問紙を作成し、調査的検討により日常生活場面において経験されるRMエラーを網羅的に測定できる質問紙(Reality Monitoring Error Experience Questionnaire：以下、RMEEQとする)を構成する。

### 方法

**調査対象者** 316名の大学生が調査対象者であった。316名のうち男性は201名で平均年齢は21歳( $SD = 4$ , 範囲：18-54), 女性は115名で平均年齢は20歳( $SD = 1$ , 範囲：18-28)であった。

**項目の作成** 第1節で得られた6カテゴリのうち、(f)その他を除く5カテゴリのエラーについて同一の信頼性で測定するため、各カテゴリのエラーが均等に含まれるよう留意しながら50項目からなる質問紙を作成した。作成の際には、知覚に由来する記憶を自己の思考や想像に由来する記憶とを取り違えるエラーと、自己の思考や想像に由来する記憶を知覚に由来する記憶と取り違えるエラーの両者がほぼ均等に含まれるようにも留意した。

**質問紙** 質問紙はリアリティ・モニタリング・エラー経験に関する予備的な質問紙(50項目)から構成されていた。この他、基準関連妥当性について検討するために日本版解離性体験尺度(Dissociative Experiences Scale：以下、DESとする)(田辺, 1994)も同時に実施したが、これについては本節とは無関係であるため、本節では以後詳述しない。

**手続き** 調査は心理学の講義中に集団で実施された。調査のはじめに、本調査が人の認知特性を調べるものであること、調査に要する時間は40分弱であること、調査データは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。その後、調査用紙を配布し、RMEEQの各項目を読んで、ふだんの自分にその内容が

<sup>15</sup>第2節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2010). リアリティ・モニタリング・エラー傾向質問紙の作成および信頼性・妥当性の検討 日本心理学会第74回大会発表論文集, 834.

中田英利子・森田泰介 (2014a). リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 85, 168-177.

どの程度該当するかを5件法(4：“非常によくある” -0：“まったくない”)で回答するよう求めた。調査終了後、調査者が全ての調査用紙を回収した。

## 結果

床効果を示した項目(平均と標準偏差の差が0未満の項目)を削除した上で、探索的因子分析(最尤法)を行った。その結果、初期の固有値のうち1以上のものは高い順に、19.01, 2.79, 1.80, 1.42, 1.31, 1.22, 1.14, 1.03であった。スクリープロットおよび解釈可能性に基づいて1因子解を採用し、因子負荷量0.4未満の項目がなくなるまで因子分析を繰り返した。その結果、32項目からなるRMEEQが得られた。

表2に各項目の因子負荷量、共通性、平均と標準偏差を示す。RMEEQのI-T相関係数は0.49から0.73の範囲に分布しており、全てが有意であった。

また、RMEEQについてCronbachの $\alpha$ 信頼性係数を算出したところ、 $\alpha = 0.95$ であったことから、本質問紙は高い内的整合性を有することが示された。

なおRMEEQの合計得点の平均及び標準偏差は、男性で $M = 43.08 (SD = 21.06)$ 、女性で $M = 40.82 (SD = 21.06)$ であった。

## 考察

まず、日常生活場面において経験される可能性が高い、あるいは、低いRMエラーについて考察する。

RMEEQの項目のうち平均値が高かったものは、質問項目29, 22, 28, 25, 24であり、それぞれのカテゴリは(b), (e), (d), (d), (b)であった。RMEEQを用いた調査の結果から、カテゴリ(b)、あるいは、(d)に該当するRMエラーが日常生活場面において多く経験されるということが示された。また、日誌法を採用した第1節の結果から、カテゴリ(d)に該当するRMエラーが最も多く経験され、次いで(a)、そして、(b)に該当するエラーが多く経験されるということが示された。日常生活場面においてカテゴリ(d)に該当するRMエラーが多く経験されるという結果は、本節と前節とで共通するものであった。したがって、日常生活場面においては、カテゴリ(d)に該当するRMエラーが多く経験されると考えられる。

また、RMEEQの項目のうち研究1において平均値が低かったものは、質問項目3, 12, 14, 4, 1であり、それぞれのカテゴリは(e), (c), (d), (e), (e)であった。RMEEQを用いた調査の結果から、カテゴリ(e)に該当するRMエラーは日常生活場面において経験されにくいということが示された。また、日誌法を採用した第1節では(e)と(c)に該当するRMエラー経験の報告数が少なかった。したがって、(e)に該当するRMエラー経験が少ないという結果は、研究1と日誌法とで共通するものであり、日常生活場面においてカテゴリ(e)に該当するRMエラーはあまり経験されないということが示された。

表2 RMEEQの各項目の因子負荷量、共通性、平均及び標準偏差

番号	項目	因子負荷量	共通性	平均	標準偏差
1	得意な分野の事柄について、実際には見たこと・聞いたことがないのに、既に見たこと・聞いたことがあると思いこんだことがある。	.75	.57	0.99	0.93
2	置いてあると思った場所に物を取りに行ってみたが、実際には見つからなかったことがある。	.74	.55	1.37	0.96
3	得意な分野の事柄について、実際には見たこと・聞いたことがあるのに、まだ見たこと・聞いたことがないと思いこんだことがある。	.73	.54	0.92	0.85
4	昔の事柄について、実際にはなかったことを現実のことだと思い込んでいたことがある。	.73	.53	0.96	0.96
5	他人から聞いたと思っていた事柄を、実際には聞いていなかったことがある。	.70	.49	1.43	1.02
6	昔ある場所に来たと思っていたが、実際には来たと思い込んでいただけだったことがある。	.69	.47	1.25	1.06
7	何かに焦っていたり集中したりしていて、見たり・聞いたりしたことをしっかりと覚えていなかったために、まだ聞いたり・見たりしていないと思いこんだことがある。	.69	.47	1.42	1.03
8	疲労や寝ぼけのために、他人から話しかけられたと思ったが、実際には勘違いであったことがある。	.69	.48	1.31	1.06
9	何かをぼんやり考えていたせいで、まだやっていないことを、既にやったことと思いこんだことがある。	.68	.47	1.15	0.94
10	他の課題へ集中していたため、携帯のバイブが鳴っていないのに、鳴ったと勘違いしたことがある。	.67	.45	1.20	0.93
11	疲れたり寝ぼけていたために、実行したことをしっかりと確認しておらず、まだ実行していないと思いこんだことがある。	.67	.45	1.35	0.96
12	出来事が起こってから時間が経過したために、実際には起こっていたことを、まだ起こっていないと思いこんでいたことがある。	.67	.44	0.94	0.84
13	疲労や寝ぼけのために、まだ見たこと・聞いたことがないことを、既に見た・聞いたと思いこんだことがある。	.64	.40	1.22	0.99
14	他の課題に集中していたり焦ったりしていたために、まだ実行していないことを、既に実行したと思いこんだことがある。	.64	.41	0.96	0.94
15	見たこと・聞いたことがある事柄を、体験していない感じがしたので、まだ見たこと・聞いたことがないと思いこんだことがある。	.62	.38	1.29	0.93
16	時間が経過したために、実際には実行していないことを、実行したと思いこんでいたことがある。	.62	.39	1.16	0.94
17	写真などを見たり似たものを体験したりしたせいで、実際には行ったことがないのに、行ったことがあると思いこんだことがある。	.62	.38	1.02	0.99
18	古い出来事について、実際にはなかったことだと思いこんでいたことがある。	.62	.38	1.16	0.90
19	緊張していたために、自分が想像したことを、他人から聞いたことと勘違いしたことがある。	.61	.37	1.21	1.01
20	実際には実行したことなのに、実行しなかったイメージが浮かんできたために、まだ実行していないと思いこんだことがある。	.61	.38	1.27	1.02

表2(続き) RMEEQの各項目の因子負荷量、共通性、平均及び標準偏差

番号	項目	因子負荷量	共通性	平均	標準偏差
21	ある物についての説明を繰り返し読んでイメージしていたため、それを見たことがないのに見たことがあると勘違いしたことがある。	.61	.37	1.11	1.00
22	家にあると思い込んでいた物が、実際には家にはなかったことがある。	.57	.32	1.86	1.05
23	疲れていたり寝ぼけたりしたために、予定していた時間や場所を勘違いしていたことがある。	.57	.32	1.35	1.04
24	何かをぼんやりと考えていたために、以前に聞いたことがあるはずの用件を、まだ聞いていないと思いこんでいたことがある。	.55	.31	1.73	1.06
25	他の用事を同時にやっていたために、送信したと思い込んでいたメールを実際には送信していなかったことがある。	.55	.30	1.77	1.22
26	約束の時間や場所を間違って思い込んでいたことがある。	.55	.30	1.42	1.04
27	夢で見た出来事を、実際に起こった出来事だと勘違いしたことがある。	.55	.30	1.47	1.14
28	他の何かに熱中していたため、声をかけられたのは気のせいだと思っていたが、実際には声をかけられていたことがある。	.54	.30	1.86	1.12
29	自分の考えに注意が向いていたために、ある物をまだ鞄に入れていないと思いこんでいたが、実際には入れていたことがある。	.52	.27	1.07	0.95
30	忙しくしていたため、返却したと思っていた本やノートなどを、返却していなかったことがある。	.52	.27	1.96	1.01
31	自分の考えに集中していたため、読み直したい情報が思っていた本とは別の本に書かれていたことがある。	.51	.26	1.29	1.04
32	子どもの頃の空想だと思っていた出来事が、実際に起こったことだと分かったことがある。	.50	.25	1.12	1.03
因子寄与		12.57			
因子寄与率		39.30%			

因子分析の結果から、RMEEQが1因子構造を有するということが示された。RMEEQを構成する項目は、そこで言及の対象となっている出来事の内容(e.g., 行為の実行、携帯バイブルの鳴動、物の置き場所)やエラーの原因(e.g., 疲労、時間経過、不適切な注意)においてかなりの多様性を持つものである。にもかかわらず、全体的な1因子が得られたという結果は、RMEEQが特定の内容の出来事を記憶する際のエラーや、特定の原因から生じるエラーのみを測定しているのではなく、それら全てに共通するRMエラー経験の個人差を測定していることを示唆するものであると考えられる。

それでは、多様なRMエラー経験の全てに関与する個人差とは、具体的にはどのようなものだろうか。Mitchell & Johnson(2000)によれば、様々なRMエラーは、いずれも記憶の構成・再構成メカニズムのあり方に依拠している。記憶の構成・再構成メカニズムには、情報解釈、情報変換、情報付与、そして、複数のソースからの情報統合の働きが備わっていると考えられている(e.g., Bartlett, 1932; Bransford & Johnson, 1973)。日常生活場面に

において何らかの経験をする時に、スキーマを情報に当てはめて認識する。これによって情報を理解しやすくなるが、RMに有効な手がかりである知覚的詳細情報や認知操作情報が記録・保持されにくく(Mitchell & Johnson, 2000)。そのため、RMエラーは記録段階や保持段階において生じると考えられる。また、想起時における知識、気分、状況など様々な要因に影響され、記憶が再構成される。その結果、知覚に由来する記憶であっても認知操作情報が多く想起されたり、思考や想像に由来する記憶であっても知覚的詳細情報が多く想起されたりする可能性がある。したがって、想起段階においてもRMエラーが生じると考えられる。つまり、記録・保持・想起のいずれの記憶段階においても、記憶の構成・再構成メカニズムによってRMエラーが生じるのである。

RMエラーが記憶の構成・再構成メカニズムのあり方に依拠するならば、カテゴリ(a)から(e)が記憶の構成・再構成メカニズムとどのように関わっているのだろうか。カテゴリ(a)と(e)は想起時の要因によって生じるRMエラーであり、知覚に由来する記憶であっても認知操作情報が多く伴う場合や、思考や想像に由来する記憶であっても知覚的詳細情報が多く伴う等、記憶の特徴が正確に再構成されなかつたために起こったと考えられる(Mitchell & Johnson, 2000)。カテゴリ(b)と(d)は記録時の要因によって生じるRMエラーであり、記録時に自己の感情や思考、他の課題に集中していたことにより、知覚的詳細情報や認知操作情報が構成されなかつたために起こると考えられる(Mitchell & Johnson, 2000)。そして、カテゴリ(c)は保持期間中の要因によって生じるエラーであり、記録からの時間経過に伴つて知覚的詳細情報や認知操作情報が減衰し、想起時にそれらの情報を正確に再構成できなかつたために起こると考えられる(中田, 2008e)。

本節では、第4章・第1節で得られた知見に基づいて、日常生活場面において経験されるSMエラーが均等に含まれる予備質問紙を作成し、調査的検討を行った。因子分析の結果、日常生活場面において経験されるSMエラーを測定すること目的とした1因子32項目から成る質問紙を作成することができた。

### 第3節 ソース・モニタリング・エラー経験質問紙の基準関連妥当性に関する検討<sup>16</sup>

前節では、日常生活場面において経験されるRMエラーを測定することを目的とした1因子32項目から成る質問紙を作成した。

第3節では、RMEEQの基準関連妥当性を確認するために、先行研究によりRMエラーとの関連性が既に指摘されているDES (Bernstein & Putnam, 1986)とRMEEQとを併用することにより、RMEEQの基準関連妥当性について検討を加えることを目的とする。

解離性障害とは、同一性、記憶、意識の統合機能における障害である(Putnum et al., 1993)。解離性障害の主な症状には、実際に体験した出来事に関する自伝的記憶に対して非現実感が伴う一方で、自らの想像に由来する記憶に対して現実感が伴うという経験が報告されている。この症状は、RMエラーと密接に関連するものであり、解離性障害に関わる体験の頻度を問うDESは、RMエラーの個人差の指標として捉えられるものであるとさえ考えられている(Hyman & Pentland, 1996)。

解離性体験とRMエラーとの関連性について検討したこれまでの実証的研究には、日常生活場面におけるRMエラー経験を検討対象としたものと、実験室場面におけるそれを検討対象としたものがある。前者の研究としては、Hyman & Billings(1998)が挙げられる。Hyman & Billings(1998)は、幼児期の出来事に関するRMエラー経験を2回にわたる面接で計測し、それとDES得点との間に有意な正の相関が認められることを見出している。

一方、後者の研究としてはKunzendorf & Karpen(1997)やMerckelbach, Muris, Horselenberg, & Stougie(2000)が挙げられる。Kunzendorf & Karpen(1997)は、知覚した文字とイメージした文字を区別するというRMを行う際の反応時間において、DES得点の高群と低群の間に違いが見られることを示したもので、解離性体験とRMエラーの間に関連があることを明らかにしたものである。また、Merckelbach et al.(2000)は、知覚した写真と文章からイメージした写真を区別するというRMを行う際のエラーの生起頻度とDES得点との間に有意な相関が見られなかったこと( $r = .09$ )を報告したものである。ただしMerckelbach et al.(2000)によれば、彼らが実施したRM課題においてはエラーの生起頻度が非常に低かったことから( $M = 0.95$ ,  $SD = 1.36$ , 最大値5), 床効果が生じこのような結果がもたらされたとも考えられる。

このように、解離性体験とRMエラーとは理論的に密接に関連していると考えられ、また、日常生活場面や実験室場面でのRMエラーを対象とした実証的研究によってもその関連性の存在が概ね認められている。したがって、本節で作成するRMエラー経験質問紙が一定の妥当性を有するものであれば、本節においてもDES得点とRMエラーの指標との間

<sup>16</sup>第3節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2010). リアリティ・モニタリング・エラー傾向質問紙の作成および信頼性・妥当性の検討 日本心理学会第74回大会発表論文集, 834.

中田英利子・森田泰介 (2014a). リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 85, 168-177.

に正の相関が見られることが予測される。なお、解離性障害者は、その主たる症状の1つであるRMエラーに関して大変な苦痛を味わっており(Hout et al., 1996), 本研究で解離性体験とRMエラー経験との関連性を検討することが、解離性障害者の苦痛を軽減するための方法を開発する手がかりになると考えられる。

## 方法

**調査対象者** 316名の大学生が調査対象者であった。316名のうち男性は201名で平均年齢は21歳( $SD = 4$ , 範囲: 18-54), 女性は115名で平均年齢は20歳( $SD = 1$ , 範囲: 18-28)であった。

**質問紙** 第2節で作成されたRMEEQ及び田辺(1994)による日本版DESから構成されていた。日本版DESの詳しい項目は付録1に示した。日本版DESとは、田辺・小川(1994)がBernstein & Putnam(1986)の原典を邦訳し、質問項目や教示における言い回しを修正し、予備的検討を行ったことにより作成された28項目から成る質問紙である。

**手続き** 調査は講義中に集団で実施された。調査のはじめに、本調査が人の認知特性を調べるものであること、調査に要する時間は40分弱であること、調査データは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。その後、調査者が調査用紙を直接配布し、全ての項目に回答するよう教示した。RMEEQの各項目を読んで、ふだんの自分にその内容がどの程度該当するかを5件法(4: “非常によくある” -0: “まったくない”)で回答するよう求めた。DESの回答方法については田辺(1994)と同様に、記載されている解離性体験の経験頻度について11件法(100%: “いつもそうだ” -0%: “そういうことはない”)で回答するよう求めた。

## 結果と考察

DESの合計得点とRMEEQの合計得点との関連性について検討するためにSpearmanの順位相関係数を算出した結果、有意な正の相関が認められた( $\rho = 0.65, p < .01$ )。この結果は、Hyman & Billings(1998)の知見と整合性を持つものであり、第2節で開発したRMEEQが一定のレベルの基準関連妥当性を持つ可能性を示唆するものであると言える。

本節では、RMエラーとの関連性が既に指摘されているDESと併用することにより、RMEEQの基準関連妥当性についての検討を行った。その結果、両者の間に有意な正の相関が認められたことから、RMEEQが一定レベルの基準関連妥当性を有するものであるということが示されたと言うことができた。

#### 第4節 ソース・モニタリング・エラー経験質問紙の再検査信頼性に関する検討<sup>17</sup>

前節では、RMEEQとDESとを併用することにより、RMEEQが一定のレベルの基準関連妥当性を有するという可能性について示唆されたと言えた。

第4節では、RMEEQのスコアが時間的に安定したものである可能性が低いことについて検討することを目的とする。そのため、RMEEQを同一の調査対象者に一定の間隔を空けて2回実施することにより、RMEEQの再検査信頼性について検討を加える。

#### 方法

**調査対象者** 第2節と第3節とは異なる専門学校生と大学生118名を調査対象者とした。このうち男性は64名で平均年齢は24歳( $SD = 11$ , 範囲: 18-75), 女性は54名で平均年齢は24歳( $SD = 9$ , 範囲: 18-57)であった。

**質問紙** 第2節で作成したRMEEQを用いた。

**手続き** 調査は心理学の講義中に集団で実施された。各回の調査のはじめに、本調査が人の認知特性を調べるものであること、調査に要する時間は30分弱であること、調査データは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。また第1回調査では、3週間後に再度同一の調査を実施するのでそちらへの参加も求められることを合わせて教示した上で同意を得た。第2回調査では、上記の教示に加えて、3週間前に調査に参加しなかった者は、今回参加できない旨を教示した上で、参加への同意を得た。参加に同意した対象者に質問紙を配布し、回答漏れがないよう注意しながらRMEEQの全項目に回答するよう教示した。回答方法は第2節と同様のものを採用した。

なお、対象者の匿名性を確保しつつ第1回調査と第2回調査のデータを照合するための手続きは山内・須藤・丹野(2009)の方法を採用した。これは各調査用紙に共通の数字(6桁の任意の数字)を記すことを求めるものであった。第1回調査においては、数字を忘れることがないよう、携帯電話のメモ機能や手帳などの外部記憶を用いたりして数字を記録しておくよう求めた。第2回調査においては、それらの外部記憶を参照して質問紙に前回と同一の数字を記すよう求めた。

#### 結果と考察

---

<sup>17</sup>第4節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2011). リアリティ・モニタリング・エラー傾向質問紙の再検査信頼性の検討 日本心理学会第75回大会発表論文集, 793.

中田英利子・森田泰介 (2014a). リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 85, 168-177.

計2回にわたる調査において同一の数字を記入したことが認められた66名の対象者による回答を分析対象とした。66名のうち男性は30名であり平均年齢は23歳( $SD = 10$ , 範囲 : 18-75), 女性は36名であり平均年齢は23歳( $SD = 8$ , 範囲 : 18-54)であった。複数の調査対象者が同一の数字を記入していた場合には、それらの対象者全てを分析対象から除外した。なお、分析対象となった66名とそれ以外の52名の間にはRMEEQ得点において相違がないかを確認するため両者の平均値(それぞれ,  $M = 44.76$ ,  $SD = 17.65$ ;  $M = 42.27$ ,  $SD = 20.95$ )を比較したところ、有意な差は認められなかった( $t(116) = 0.69$ ,  $p > .10$ ,  $d = 0.12$ )。

第1回調査でのRMEEQ得点と第2回調査でのRMEEQ得点のPearsonの積率相関係数を算出したところ、有意な正の相関が認められた( $r = 0.76$ ,  $p < .001$ )。この結果より、RMEEQの再検査信頼性は十分高く、時間的に安定しているものであることが示されたと言える。

本節では、RMEEQの時間的安定性について検討を加えるために、同一の対象者に2回にわたる調査を実施した。その結果、第1回調査でのRMEEQ得点と第2回調査でのRMEEQ得点の間に有意な正の相関が認められたことから、RMEEQの再検査信頼性は十分に高く、RMEEQは時間的に安定している結果が得られるものであることが示されたと言うことができた。

## 第5節 ソース・モニタリング・エラー経験と社会的望ましさ

前節では、RMEEQの再検査信頼性について検討したところ、RMEEQの再検査信頼性は十分に高く、そのスコアは時間的に安定しているものであるということが示されたと言うことができた。

第5節ではRMEEQのスコアが日常生活場面におけるSMエラー経験を正確に測定することができる有用なものであることを示すために、RMEEQのスコアに社会的望ましさが反映されている可能性が高いことについて検討を加えることを目的とする。

記憶研究だけでなく心理学の研究全般において、尺度項目が測定したい概念を測定していたとしても、概念とは無関係な成分からも影響を受けていることがあり、観測された尺度得点にはこの両方の要因に由来する成分が入り込むため、純粋に構成概念だけにもとづいた解釈をすれば誤った判断になりかねない(平井, 2006)。そして、構成概念外の分散をもたらす要因の1つとして、社会的望ましさによる回答が挙げられる(平井, 2006)。社会的望ましさとは、実験事態において、対象者が実験者からの承認を得たいがために、実験者にとって望ましい反応をしてしまう傾向を指す(Hyman & Billings, 1998)。もし、RMEEQのスコアに社会的望ましさが反映されているのか否かが不明なままでは、RMEEQが日常生活場面において経験されるRMエラーを正確に測定することができない可能性を残しているということになる。RMEEQが真に有用なものであることを示すためには、RMEEQのスコアに社会的望ましさが反映されている可能性が高いことについて検討を加えることが重要な研究課題であると考えられる。

これまでのSMエラー研究において、面接によって測定されたSMエラーが社会的望ましさをどの程度反映しているのか否かについて検討されている。例えば、Hyman & Billings(1998)は、どのような特性を持つ個人がSMエラーを犯しやすいのかを明らかにするために、2回にわたる面接を実施し、調査対象者が幼少期に経験したことについてのRMエラー傾向と、DESやSDSとの関連性について検討した。その結果、DES得点や創造的イメージ尺度得点と、SMエラー傾向との間には有意な相関が認められたが、SDSや没入尺度とエラー傾向との間には有意な相関が認められないことが報告された。Hyman & Billings(1998)が得た知見は、面接によって得られたSMエラーが社会的望ましさを反映している可能性が低いことを示唆するものであると言えるだろう。

しかしながら、RMEEQのスコアが社会的望ましさによって歪められたものなのかどうかについてはまだ明らかにされていない。RMEEQのスコアに社会的望ましさが反映されているか否かについて明らかにされないのならば、RMEEQによって得られたRMエラー経験の頻度が、日常生活場面でのRMエラー経験のみを反映したものであるのか、それともRMエラー経験だけでなく社会的望ましさが入り込んだものであるのかが判然としないため、スコアの解釈を誤ってしまう可能性が残されていると考えられる。もしRMEEQへの回答に社会的望ましさが反映している可能性が低いことが明らかになれば、RMEEQ得点が社会的望ましさによって歪められたものではなく、日常生活場面において経験され

るRMエラーの頻度を正確に測定することができる真に有用な質問紙である可能性が高いと言うことができるだろう。そこで、第6節では、RMEEQとSDSとの関連性について検討することによって、RMEEQのスコアに社会的望ましさが反映されている可能性が高いことについて明らかにすることを目的とする。Hyman & Billings(1998)で得られた知見と同様に、RMEEQで測定されたRMエラー経験のスコアに社会的望ましさが反映されたものでなければ、RMEEQの合計得点とSDSの合計得点との間に有意な正の相関は認められないと予測される。

## 方法

**調査対象者** 専門学校生と大学生の計102名が調査対象であった。このうち男性は50名で平均年齢は23歳( $SD = 8$ , 範囲 : 18-46), 女性は52名で平均年齢は23歳( $SD = 8$ , 範囲 : 18-49)であった。

**質問紙** 本調査では、RMEEQと日本語版Social Desirability Scale(以下、日本語版SDSとする)(北村・鈴木, 1986)とを併せて使用した。RMEEQは第2節で作成されたものを使用した。日本版SDSの詳しい項目は付録2に示した。日本語版SDSは, Crowne & Marlowe(1960)が作成した原典版であるSDSを翻訳し、予備的検討を行われたものである。作為的な回答の探知や当該の質問紙によって測定しようとしている特定の構成概念と社会的望ましさ反応について調べることができると考えられている。例えば、“選挙の時は、すべての立候補者について十分に研究します”, “たとえでしゃばってでも、困っている人を助けるのにちゅうちょしたことはありません”等の生活態度についてたずねる計33項目から構成されている。項目に対して“はい”的回答には0点, “いいえ”的回答に対しては1点を与え、その合計得点が社会的望ましさの高さを表す。この他、失敗傾向質問紙(Error Proneness Questionnaire)(山田, 1999)も同時に実施したが、これについては本節の目的とは無関係であるため、以後詳述しない。

**手続き** 調査は講義中に集団で実施された。調査のはじめに、本調査が人の認知特性を調べるものであること、調査に要する時間は30分弱であること、データは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。参加に同意した対象者に調査用紙を配布し、回答漏れがないよう注意しながら全項目に回答するよう教示した。RMEEQの回答方法は、第2節と同様方法であった。SDSの回答方法は、それぞれの項目について「はい」か「いいえ」で回答するよう求めた。調査終了後、調査者が調査用紙を全て回収した。

## 結果と考察

1名の回答に記入漏れがあったため、記入漏れであった1名を除いた101名のデータを分析対象とした。そのうち男性は49名で平均年齢は23歳( $SD = 8$ , 範囲： 18-51), 女性は52名で平均年齢23歳( $SD = 8$ , 範囲： 19-49)であった。

SMエラーと社会的望ましさとの関連性について検討するために、RMEEQ得点とSDS得点との間についてピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、RMEEQ得点とSDS得点との間に有意な相関は認められなかった( $r = -0.16$ , *n.s.*)。この結果は、RMEEQのスコアが社会的望ましさを反映したものでなければ、RMEEQの合計得点とSDSの合計得点との間に有意な正の相関は認められないという仮説を支持するものであった。

以上の結果からRMEEQで測定されたスコアは社会的望ましさによって歪められている可能性は低く、日常生活場面において経験されるSMエラーのみを反映している可能性が高いことについて示されたと言えるだろう。

本節では、RMEEQのスコアが社会的望ましさにより歪められている可能性について検討するために、RMEEQとSDSとを併用して調査的検討を行った。その結果、両者の得点の間には有意な正の相関が認められなかったことから、RMEEQのスコアには対象者の社会的望ましさが反映されている可能性は低いものであるということが示されたと言うことができた。

## 第6節 ソース・モニタリング・エラー経験と認知的失敗傾向

前節では、RMEEQのスコアに社会的望ましさが反映されている可能性は低いということが示されたと言えた。

本節では、RMEEQで測定されている認知過程が、日常生活場面において経験される広範な失敗行動とは異なる独自の認知過程を含む可能性が高いことについて検討を加えることを目的とする。

失敗行動とは、ほとんどの人の日常生活において普通にみられる、言いまちがいやもの忘れなどのちょっとした失敗や、ふだんなら簡単にできるようなことでも、急いでいたり、ぼんやりしていてまちがってしまうことを指す(山田, 1999)。Merckelbach et al.(2000)は、解離性障害者の経験するRMエラーがいかなる認知特性・性格特性によって規定されているのかについて検討を加えるために、認知的失敗傾向や空想傾向や解離性体験やRMエラーとの関連性について検討した。その結果、DESは空想傾向や認知的失敗傾向との間に有意な正の相関が認められたが、認知的失敗傾向とRMエラーとの間に有意な正の相関は認められなかった。この結果は、解離性体験が認知的失敗傾向や空想傾向に対しては敏感であることを示唆するものの、認知的失敗傾向とRMエラーとの関連性は低いという可能性も示唆されたと考えられる。RMエラーが解離性体験や認知的失敗傾向との関連性が認められなかつた理由として、Merckelbach et al.(2000)が実施したRM課題においてはエラーの生起頻度が非常に低かったことから( $M = 0.95$ ,  $SD = 1.36$ , 最大値5), 床効果が生じこのような結果がもたらされたとも述べている。

解離性体験とRMエラーとの関連性については、Merckelbach et al.(2000)においては認められなかつたものの、Merckelbach et al.(2000)以外の実証的研究においてはその関連性が認められている。解離性体験とRMエラー経験との関連性についての実証的研究には、日常生活場面におけるRMエラー経験を検討対象としたものと、実験室場面におけるそれを検討対象としたものがある。前者の研究としては、Hyman & Billings(1998)が挙げられる。Hyman & Billings(1998)は、幼児期の出来事に関するRMエラー経験を2回にわたる面接で計測し、それとDES得点との間に有意な正の相関が認められることを見出している。

一方、後者の研究としてはKunzendorf & Karpen(1997)やMerckelbach et al.(2000)が挙げられる。Kunzendorf & Karpen(1997)は、知覚した文字とイメージした文字を区別するというRMを行う際の反応時間において、DES得点の高群と低群の間に違いが見られることを示したもので、解離性体験とRMエラーの間に関連があることを明らかにしたものである。また、Merckelbach et al.(2000)は、知覚した写真と文章からイメージした写真を区別するというRMを行う際のエラーの生起頻度とDES得点との間に有意な相関が見られなかつたこと( $r = .09$ )を報告したものである。Merckelbach et al.(2000)においてRMエラー課題におけるエラーと解離性体験との間に関連性が認められなかつたものの、解離性体験とRMエラーとは理論的に密接に関連していると考えられ、また、日常生活場面や実験室場面でのRMエラーを対象とした実証的研究によってもその関連性の存在が概ね認められて

いる。したがって、Merckelbach et al.(2000)において解離性体験とRMエラーとの関連性が認められなかつた可能性として、Merckelbach et al.(2000)が述べるように、RM課題におけるRMエラーの生起頻度が非常に低かつたことから、床効果が生じ、RMエラーと解離性体験との関連性が認められなかつた可能性があると考えられる。

そのため、Merckelbach et al.(2000)においてRMエラー課題において生じたエラーと認知的失敗傾向との関連性が認められなかつた理由については、RMエラーの生起頻度が非常に低かつたために床効果が生じたことに依るものかもしれない。しかしながら、そもそもRMエラーと認知的失敗とではそれぞれを下支えしている認知過程とが異なるものであることに依る可能性も残されている。

そこで、RMエラーに含まれる認知過程と認知的失敗に含まれる認知過程との関連性について検討を加えるために、日常生活場面において経験されるより広範な失敗行動について測定することを目的に山田(1999)が作成した失敗傾向質問紙(Error Proneness Questionnaire)とRMEEQとを併用することにより、両者の関係性について検討を加えることを目的とする。もし、Merckelbach et al.(2000)においてRMエラーと認知的失敗との間に関連性が認められなかつた原因が、彼らが述べるように、RMエラー課題におけるエラーの頻度が非常に低く、床効果が生じたためであつて、両者に含まれる認知過程が関連するものであるならば、RMEEQの合計得点と失敗傾向質問紙得点との間には有意な正の相関が認められると予測される。Merckelbach et al.(2000)においてRMエラーと認知的失敗との間に関連性が認められなかつた原因が、そもそもRMエラーに含まれる認知過程と認知的失敗に含まれる認知過程とが異なるものであることに依るのならば、失敗傾向質問紙のスコアとRMEEQの合計得点との間には有意な正の相関は認められないと予測される。

## 方法

**調査対象者** 専門学校生と大学生の計102名が調査対象であった。このうち男性は50名で平均年齢は23歳( $SD = 8$ , 範囲: 18-46), 女性は52名で平均年齢は23歳( $SD = 8$ , 範囲: 18-49)であった。

**質問紙** 本調査では、RMEEQと失敗傾向質問紙とを併せて使用した。RMEEQは第2節において作成されたものと同様のものを使用した。

日常生活場面において経験されるより広範な失敗行動について測定することを目的に開発された失敗傾向質問紙を使用した。失敗傾向質問紙の詳しい項目は付録3に示した。失敗傾向質問紙はアクションスリップ, ミステイク, 認知の狭小化という3因子25項目から構成されるもので、3因子の合計得点は全般的な失敗傾向を表す。アクションスリップとは、日常生活で慣れ親しんだルーチン化された行動中に必要な注意が配分されないことで起こる実行の失敗, ミステイクとは、新奇な状況下での問題解決行動におけるプランの失敗, 認知の狭小化とは、航空機の操縦やパワープラントの操作などの高負荷状況において、処理できる情報の範囲が狭くなる現象(Robertson, 1985)である。山田(1999)によると、認知

の狭小化は注意が適切に配分されないという点ではアクションスリップと同じだが、その狭められた注意が状況内にある1点に集中してしまい、適切な行動がとれないという結果を招くという点においてアクションスリップとは異なるものである。この他、SDSも同時に実施したが、これについては本節の目的とは無関係であるため、以後詳述しない。

**手続き** 調査は講義中に集団で実施された。調査のはじめに、本調査が人の認知特性を調べるものであること、調査に要する時間は30分弱であること、データは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。参加に同意した対象者に調査用紙を配布し、回答漏れがないよう注意しながら全項目に回答するよう教示した。RMEEQの回答方法は、第2節と同様のものを採用した。失敗傾向質問紙の回答方法は、それぞれの項目について5件法(0：“まったくない”-4：“非常によくある”)で回答するよう求めた。調査終了後、調査者が調査用紙を全て回収した。

## 結果と考察

1名の回答に記入漏れがあったため、それらを除いた101名のデータを分析対象とした。そのうち男性は49名で平均年齢は23歳( $SD = 8$ , 範囲：18-51), 女性は52名で平均年齢23歳( $SD = 8$ , 範囲：19-49)であった。

SMエラーと失敗傾向との関連性について検討するために、RMEEQ得点と失敗傾向質問紙合計得点との間についてPearsonの積率相関係数を算出した。その結果、RMEEQ得点と失敗傾向質問紙合計得点との間に有意な相関は認められなかった( $r = 0.08$ , n.s.)。次に、RMエラーとアクションスリップ、RMエラーと認知の狭小化、RMエラーと衝動的失敗のそれぞれの関連性について検討するために、RMEEQ得点と失敗傾向質問紙の3因子との間についてPearsonの積率相関係数を算出した。その結果、RMEEQ得点とアクションスリップ得点、RMEEQ得点と認知の狭小化得点、RMEEQ得点と衝動的失敗得点のそれぞれについて有意な相関は認められなかった(それぞれ、 $r = 0.04$ ,  $r = 0.35$ ,  $r = 0.16$ , 全てn.s.)。

本研究の結果から、RMEEQと失敗傾向との間には有意な相関が認められなかった。またRMEEQとアクションスリップ、RMEEQと認知の狭小化、RMEEQと衝動的失敗との間にも有意な相関が認められなかった。以上の結果から、Merckelbach et al.(2000)においてRMエラーと認知的失敗との間に関連性が認められなかったのは、RMエラー課題におけるエラーの頻度が非常に低く床効果が生じただけでなく、日常生活場面で経験されているRMエラーを下支えする認知過程と、失敗傾向質問紙で測定されている失敗行動に関連する認知過程とでは異なるものである可能性が高いという仮説が支持されたと言える。

日常生活場面において多く経験される失敗行動の内容と、SMエラー内容について検討するために、失敗傾向質問紙の評定の平均値とRMEEQの評定の平均値が高い項目をそれぞれ抽出した。失敗傾向質問紙の評定の平均値が高かった項目から、(3)“決心するまでに、あれこれ迷ってしまう”(認知の狭小化： $M = 2.64$ ,  $SD = 1.16$ ), (5)“何かを聞いていなけ

ればならない時にぼんやり他のことを空想してしまう”（アクションスリップ： $M=2.60$ ,  $SD=0.96$ ），(1) “本や新聞を読みながらぼんやりしてしまい、内容を理解するためにもう一度読み直す”（アクションスリップ： $M=2.49$ ,  $SD=0.90$ ），(13) “テストや面接の時にあがってしまい、落ち着いていたらもつとうまくできたのにと思う”（認知の狭小化： $M=2.47$ ,  $SD=1.10$ ），(8) “何か1つのことをしている時に、つい他のことがしたくなってしまう”（アクションスリップ： $M=2.45$ ,  $SD=1.06$ ）というようなもので、認知の狭小化やアクションスリップに分類されるものが多く経験されるという結果であった。山田（1999）は、失敗傾向質問紙と注意に関する尺度及び短期記憶容量を測定する数字スパン課題との関連を調べたところ、アクションスリップは、内外の刺激に注意がとらわれて進行中の行動から注意が逸れやすい傾向との関連性を見出している。また、認知の狭小化は、注意の逸れやすさだけでなく、情報の多さに対処しきれずに混乱してしまう傾向との関連が強いことが示された。

一方、RMEEQの評定の平均値が高い項目は、(25) “置いてあると思った場所に物を取りに行ってみたが、実際には見つからなかったことがある” ( $M=2.39$ ,  $SD=0.94$ )，(9) “自分の考えに注意が向いていたために、ある物をまだ鞄に入れていないと思いこんでいたが、実際には入れていたことがある” ( $M=2.07$ ,  $SD=0.95$ )，(5) “何かをぼんやりと考えていたために、以前に聞いたことがあるはずの用件を、まだ聞いていないと思いこんでいたことがあった” ( $M=1.89$ ,  $SD=0.91$ )，(22) “他の何かに熱中していたため、声をかけられたのは気のせいだと思っていたが、実際には声をかけられていたことがある” ( $M=1.80$ ,  $SD=1.07$ )，(11) “家にあると思い込んでいた物が、実際には家にはなかったことがある” ( $M=1.66$ ,  $SD=1.10$ )であった。この結果から、記録時に出来事の詳細情報よりも自分の感情や思考へ注意していたために起こるSMエラーや、他の課題への集中などからくる注意不足による確認・記録不全であったために起こるSMエラーが多く経験されているということが示されたと言える。

以上のことから、日常生活場面において経験される失敗行動の多くは、現在進行している行動から注意が逸れてしまうことや、情報量の多さに対処しきれないために、当人の思考や感情へ注意が向けられていないことに依るものであると考えられる。一方、日常生活場面において経験されるSMエラーは、出来事の詳細情報よりも自らの感情や思考あるいは他の課題へ注意が向いていたために起こるものであるということが示された。したがって、失敗傾向質問紙とRMEEQとではそれぞれの独自の認知過程を測定するものであり、日常生活場面において経験されるRMエラーを下支えする認知過程と失敗行動を下支えする認知過程とでは異なるものであるという可能性を想定することができると考えられる。

Merckelbach et al.(2000)において、CFQと実験室の課題で測定されたRMエラーとでは関連性が認められなかつたという結果についても、RMエラーの生起頻度が低いことにのみ依るものではなく、実験室の課題におけるRMエラーに関する認知過程とCFQが測定している認知過程とでは異なるものであったことに依る可能性も考えられる。

本節では、日常生活場面において経験される失敗行動とRMエラーとの関連性について調

べるために、失敗行動の頻度について測定することができる失敗傾向質問紙とRMEEQとを併せて調査した。その結果、両者の間には関連性が認められなかつた。この結果から、日常生活場面において経験される失敗行動とRMエラーとでは異なる認知過程を含む可能性が示唆されたと考えられた。

## 第7節 本章のまとめ

本章では日常生活場面において経験されるSMエラーを網羅的に測定することができるRMEEQを作成し、予備的検討を行った。

第1節では、日誌法を用いて日常生活場面において経験されるSMエラーの実態を把握した。その結果、日常生活場面におけるSMエラー経験は、エラーの原因として想定されるものに基づくと、(a)元のソースとは異なる記憶の特徴が想起されたために起こる混乱、(b)記録時に出来事の詳細情報よりも自分の感情や思考へ注意が向いていたために起こる混乱、(c)時間経過によって記憶の特徴が減衰したために起こる混乱、(d)焦り、寝ぼけ、疲労、他の課題への集中などからくる注意不足による確認・記録不全であったために起こる混乱、(e)想起時に適切な判断基準で記憶の特徴を吟味しなかったために起こる混乱、(f)その他の6カテゴリに分類することができた。

第2節では、(f)その他を除いた5カテゴリに含まれるエラーから構成された予備質問紙を作成し、調査的研究を行った結果、1因子32項目から成るRMEEQを開発することができた。

第3節では、RMEEQの基準関連妥当性について検討するために、既にRMエラーとの関連性が認められているDESとRMEEQとを併せて調査的研究を行った結果、両者の間に関連性が認められたことから、RMEEQが基準関連妥当性を有するということが示されたと考えられた。

第4節では、RMEEQの時間的安定性について検討を行った。3週間の間隔をあけて2回にわたり同じ対象者に調査を行ったところ、RMEEQが一定の時間的安定性を有するということが示されたと考えられた。

第5節では、社会的望ましさによりRMEEQのスコアが歪められているか否かについて検討したところ、両者の間には関連性が認められなかったことから、RMEEQのスコアは社会的望ましさに依るものである可能性が低いということが示されたと考えられた。

第6節では、日常生活場面において経験されるSMエラーと失敗行動との関連性について検討するために、RMEEQと失敗傾向質問紙とを併せて調査的研究を行った。その結果、両者の間には関連性が認められなかったことから、日常生活場面において経験されるSMエラーは失敗行動とは異なる認知過程を含むものである可能性が示唆されたと考えられた。

以上より、日常生活場面において経験されるSMエラーを測定することができるRMEEQを開発し、その信頼性と妥当性について検討することができたと言えるだろう。次章では、本章で開発したRMEEQを採用して、日常生活場面において経験されるSMエラーを規定する要因について検討を加えてゆく。

## 第5章 ソース・モニタリング・エラー経験を規定する認知特性・性格特性に関する日常記憶研究

### 第1節 ソース・モニタリング・エラー経験と抑うつ傾向

本章の目的は、第4章・第1節で得られたSMエラーの原因として想定されるものに基づいて、RMEEQを用いてSMエラーを規定する性格特性や認知特性について検討を加える。このことにより、SMエラーが経験される精神疾患への理解を深めるための知見を獲得し、日常生活場面において経験されるSMエラーを低減するための方策を開発する手がかりを得ることである。第1節の目的は、出来事の詳細情報よりも自らの感情や思考へ注意が向いていたために経験されるSMエラーについて検討を加えるために、記録時に自らの感情や思考へ注意が向いてしまうことの原因として抑うつ傾向を取り上げ、抑うつ傾向とSMエラーとの関連性について調査的に検討を行う。

抑うつ傾向の個人差がSMエラーに与える影響に関する研究はHecker & Meiser(2005)を除いて、ほとんど認められない。Hecker & Meiser(2005)は、大学生を対象にして抑うつ傾向に伴う注意散漫がSMに及ぼす影響について検討するために、記録セッションとテストセッションから構成された以下のような実験を実施した。まず、ベック抑うつ尺度(Beck, Ward, & Mendelson, 1961 ; Beck, Kovacs, & Weissman, 1979)(Beck Depression Inventory：以下、BDIとする)のスコアが0から5であった者を非抑うつ群、スコアが10以上であった者を抑うつ群とに振り分けた。記録セッションでは、PCのモニターの左右どちらか一方に単語を表示し、後で単語が左右のどちらに表示されたのかをテストするため(外部情報のSM課題)，単語が表示された場所を記憶するよう教示した。記録セッションにおいて単語を表示する際には、赤色あるいは緑色のフレームも同時に表示するが、フレームに関連する教示は行わない。テストセッションでは、記録セッションで表示した旧項目と、記録セッションで表示されなかった新項目とを混せて、PCのモニターの中央に1つずつ表示して、記録セッションで表示された旧項目であるのか、それとも、テストセッションでのみ表示されたものである新項目であるのかという再認判断を求めた。旧項目であったと判断された単語については、さらに、モニターの左右どちらに表示されたものであったのか、そして、フレームの色が赤と緑のどちらであったのかについても回答するよう求めた。その結果、抑うつ群と非抑うつ群とでは、再認成績や外部情報のSMの成績に差は見られなかった。しかし、非抑うつ群と比較して抑うつ群はフレームの色に関する記憶成績が上回っていた。

この結果は、フレームの色について問うテストを課すということについては事前に告げていなかつたにも関わらず、非抑うつ群と比較して抑うつ群はフレームの色に注意を払い、記憶していたということを示唆する。抑うつ傾向によって注意が非選択的になりやすいため、テストで回答を求められないフレームの色を記憶していたと解釈された。Hecker & Meiser(2005)が報告した知見は、抑うつ傾向によって注意が非選択的になりやすいものの、

そうした注意傾向とSM成績との関連性は認められないということを示唆するものである。

Hecker & Meiser(2005)の研究は、記録時の注意傾向と外部情報のSMとの関連性について解明しようとした点について有意義なものである。しかしながら、Hecker & Meiser(2005)が採用した実験刺激は、実験対象者に肯定的・否定的な感情を喚起させるようなものではなかったという点に注意が必要である。Pyszczynski & Greenberg(1987)は、抑うつ傾向の者は、否定的な出来事の後に自己の思考や感情に注目し<sup>18</sup>、肯定的な出来事の後には自己の思考や感情への注目を避ける傾向があると報告している。彼らが得た知見は、抑うつ傾向の者が自己に注目するか否かは当該の情報が本人にとって肯定的なものであるか、否定的なものであるかに依ることを示唆するものである。そのため、Hecker & Meiser(2005)において外部情報のSM課題成績と抑うつ傾向との間に関連性が認められなかつた理由として、呈示された実験刺激の感情価が統制されたものであり、抑うつ群であつても否定的感情が喚起されなかつたために、自己注目に至らなかつた。その結果として、抑うつ群も非抑うつ群と同様に知覚的詳細情報を記録していたため、SM課題成績について抑うつ群と非抑うつ群とで差が認められなかつたとも考えられる。

傍証ではあるが、自己注目とSMエラーとの関連性についてはJohnson et al.(1996)によって検討されている。Johnson et al.(1996)は、記録時に自らの感情あるいは他者の感情とのどちらに注意が向いているかがSMに及ぼす影響について検討を加えるために、記録セッションとテストセッションから構成された以下のような実験を行つた。記録セッションにおいて、感情喚起度を統制したトピックがA氏あるいはB氏のどちらかの声により呈示された。そして、呈示されたトピックについて実験参加者自身が感じたことについて考えておくよう求められるか(自己注目条件)、話し手がそのトピックについてどのように感じているのかについて推測するよう求められた(他者注目条件)。テストセッションにおいて、トピックが視覚呈示され、A氏あるいはB氏のどちらの声で呈示されたものであったのか、あるいは、記録セッションでは呈示されていないトピックであったのかについて判断するよう求めた。その結果、自己注目条件と他者注目条件とでは再認成績には差が認められなかつたものの、外部情報のSMエラー率については他者注目条件よりも自己注目条件の方が下回つていた。自己注目条件においては、記録時に自らの思考や感情へ注目していたために、ソース判断の手がかりとなる話し手の知覚的詳細情報が記録不全であったか、あるいは、意味情報と知覚的詳細情報とが適切に結合されていなかつたため、他者注目条件よりも自己注目条件における外部情報のSMエラー率の方が下回つていたと解釈された。つまり、Johnson et al.(1996)が報告した知見は、自らの感情や思考へ注意することがSMエラーを生起させることを示唆するものであった。

もし、Hecker & Meiser(2005)においてSM成績と抑うつとの関連性が認められなかつた原因が、実験対象者の否定的な感情を喚起させることができない実験刺激を採用していたことに依拠するならば、対象者本人の主観的で否定的な感情が喚起されると考えられる日

---

<sup>18</sup>坂本(1997)は、抑うつの起因となる注意傾向の1つとして、自らの思考や感情への注意が持続してしまう自己注目(self-focus ; self-focussed attention)を挙げている。

常生活場面における出来事に対するSMエラーを検討対象とすれば、SMエラーと抑うつとの関連性が見出されると考えられる。そこで、本節では、第4章で開発されたRMEEQを用いて日常生活場面において経験されるSMエラーの個人差を測定し、それと抑うつ傾向との関連性を調べることにより、SMエラーと抑うつ傾向との関連性について検討することを目的とする。

抑うつ気分に伴う注意コントロールは、抑うつ気分によって経験される社会的状況、思考、問題解決、記憶等への対処が困難、創造性喪失の体験(Ellis & Ashbrook, 1988)を説明するために焦点が当てられている(Hertel, 1994 ; Shapiro & Roberts, 2003)。特に効率的な課題解決が注意コントロール方略によって妨害されるということも示されている(Hertel, 1998)。そのため、抑うつ気分に伴う注意傾向とSMエラーとの関連性について検討を加えることは、抑うつ気分に伴う注意コントロール方略に対する理解を得るために重要な研究課題であると考えられる。

もし、抑うつ傾向が高い者ほど出来事の知覚的詳細情報が記録不全になるため、SMエラーを多く経験しているとすれば、BDI得点とRMEEQ得点との間に有意な正の相関が認められると予測される。

## 方法

**調査対象者** 専門学校生と大学生の計122名が調査対象であった。このうち男性は63名で平均年齢は21歳( $SD = 6$ , 範囲: 18-42), 女性は59名で平均年齢は21歳( $SD = 4$ , 範囲: 18-46)であった。

**質問紙** 本調査では、RMEEQとBDIを使用した。RMEEQは、第4章・第2節で作成されたものと同様のものを使用した。BDIの詳しい項目を付録4に示した。BDIとは、林(1988)と林・灌本(1991)がBeck et al.(1961)やBeck et al.(1979)に基づいて作成した日本語版BDIを使用した。日本語版BDIは、最近1週間の抑うつ状態の重症度について4段階で自己評価するものである。BDIで測定できる抑うつの症状とは、抑うつ気分、ペシミズム、失敗感、満足感の欠如、罪悪感、受罰の予期、自己嫌悪、自己非難、自殺願望、涙もろさ、いらだち易さ、対人的興味の減退、決断困難、身体像の歪み、活動困難、不眠、易疲労感、食欲の減退、体重減少、身体へのとらわれ(病気の心配)、性欲の減退の計21の症状である。例えば、第1問については、0 = 私は落ち込んでいない、1 = 私は落ち込んでいる、2 = 私はいつも落ち込んでいるから急に元気にはなれない、3 = 私はとてもがまんができないほど落ち込んでいる、の4つの質問文から構成されており、4つの文から1つ以上選択させる。この他、無意図的想起経験質問紙(Involuntary Memory Experience Questionnaire : 以下、IMEQとする)(Morita & Kawaguchi, 2010)も同時に実施したが、これについては本調査の目的とは無関係であるため、以後詳述しない。

**手続き** 調査は講義中に集団で実施された。調査のはじめに、本調査が人の認知特性を調べるものであること、調査に要する時間は30分弱であること、データは匿名化して扱わ

れ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。参加に同意した対象者に調査用紙を配布し、回答漏れがないよう注意しながら全項目に回答するよう教示した。RMEEQの回答方法は、第4章・第2節と同様の方法を採用した。BDIの回答方法については、1つの症状に対して重症度の異なる4つの質問文が記載されているので、最近の気分に最も適合する質問文を1つ以上選択するよう求めた。適合する質問文が複数ある場合、複数回答も可能であることも告げた。また、選択する前に質問文を全て読むようにも教示した。回答の順序は、常にRMEEQ、BDIであった。調査終了後、調査者が全ての調査用紙を回収した。

## 結果と考察

回答漏れがあった9名を除き、専門学校生と大学生の計113名を分析対象とした。このうち男性は58名で平均年齢は21歳( $SD = 4$ 、範囲：18–36)、女性は55名で平均年齢は21歳( $SD = 4$ 、範囲：18–46)であった。

BDIにおいて1項目に対して複数回答であった場合には、点数が高い選択肢を質問紙の得点として採用する過大評価法と、点数が低い選択肢を質問紙の得点として採用する過小評価法がある。本節では、うつ病とSMエラーとの関連性への理解の一助となるよう、前者の採点方法を採用した。

SMエラーと抑うつ傾向との関連について検討するために、RMEEQ得点とBDI得点とのPearsonの積率相関係数を算出した。その結果、BDI得点とRMEEQ得点との間に有意な正な相関が認められた( $r = 0.43, p < .05$ )。以上の結果から、抑うつ傾向が高い者ほど出来事の知覚的詳細情報が記録不全になるため、SMエラーを多く経験しているという仮説が支持されたと言える。したがって、Hecker & Meiser(2005)において抑うつ群と非抑うつ群とでSMエラー成績に差が認められなかつたことの原因が、Hecker & Meiser(2005)が述べたように、抑うつ傾向によって注意が非選択的になりやすいものの、こうした注意傾向とSM成績との関連性が認められなかつたというよりも、実験対象者の否定的な感情を喚起させることができない感情価の統制された実験刺激を呈示したために、抑うつ群であつても自己の思考や感情に注意が向けられなかつたことに依拠すると考えられる。

しかしながら、自己注目傾向が抑うつ傾向とSMエラー経験とを媒介しているということについては本節において直接確認されたわけではない。次節にて、抑うつ傾向が高い者ほど日常生活場面においてSMエラーを多く経験しやすい理由として、出来事の詳細情報よりも自らの感情や思考に注意しているためであることを確認する。

## 第2節 ソース・モニタリング・エラー経験と没入傾向

本節では、前節での解釈の妥当性について検証するために、抑うつ傾向、自己注目傾向、SMエラー経験との関連性についての検討を加えることを目的とする。そのため、前節で使用したRMEEQやBDIに加えて、自己注目傾向を測定することができる没入尺度(坂本, 2001)を併せて使用する。このことにより、抑うつ傾向、自己注目傾向、SMエラーを経験する程度との関連性について検討することができると考えられる。抑うつ傾向が高い者ほど、記録時に出来事の詳細情報よりも自らの思考や感情へ注意してしまうために、SMエラーが多く経験されるとすれば、BDI得点、自己没入得点、RMEEQ得点との間に関連性が認められると予測された。

### 方法

**調査対象者** 専門学校生5名と大学生73名の計78名が調査対象であった。このうち男性は46名で平均年齢は19歳( $SD = 1$ , 範囲： 18-23), 女性は32名で平均年齢は20歳( $SD = 2$ , 範囲： 18-25)であった。

**質問紙** RMEEQ, BDI, 没入尺度を使用した。RMEEQとBDIについては、前節と同様のものを使用した。没入尺度の詳しい項目は付録5に示した。没入尺度とは、没入傾向の個人差を測定するために坂本(1997)により作成されたもので、自己没入因子と外的没入因子の2因子、合計19項目から構成されている。自己没入とは、自己へ注意が向きやすく自己に向いた注意が持続する特性であり、例えば、長い間、自分についてのことで思いをめぐらせていることがよくある等についてたずねる11項目から構成されている。外的没入とは、ある1つの外的な対象に向いた注意が持続しやすい傾向を指し、例えば何かやりだしたら最後までやりとげなければ気がすまない方だ等についてたずねる8項目から構成されていた。

**手続き** 心理学の講義中に集団で実施した。調査に要する時間が30分弱であることと、調査への参加は強制ではなく、参加したい者だけ教室に残るよう告げた。その後、調査用紙を配布し、記入漏れがないよう全ての項目について回答するよう求めた。RMEEQとBDIの回答方法と教示については第5章・第1節と同様の方法を用いて実施した。没入尺度については、項目を読んで、自分の性質に当てはまる程度を5件法(5：“かなりあてはまる”, 4：“あてはまる”, 3：“どちらともいえない”, 2：“あてはまらない”, 1：“全くあてはまらない”)で回答するよう求めた。回答の順序は、常にRMEEQ, BDI, 没入尺度であった。回答終了後、調査者が全て調査用紙を回収した。

### 結果

回答漏れがあった6名を除き、専門学校生4名と大学生68名の計72名が分析対象であった。

このうち男性は42名で平均年齢は19歳( $SD = 1$ , 範囲: 18-23), 女性は30名で平均年齢は20歳( $SD = 2$ , 範囲: 18-25)であった。

抑うつ傾向と没入傾向とSMエラーの関係を検討するために, 共分散構造分析によるパス解析を行った。前節の結果から抑うつ傾向が高い者ほどRMエラーを多く経験していること, 自己注目傾向が高い者ほどRMエラーを多く経験している(Johnson et al., 1996)ことを考慮し, 抑うつ傾向がRMエラーに影響を及ぼし, 自己注目傾向がRMエラーに影響を及ぼすということを仮定した。また, 坂本(1997)より抑うつ傾向が高い者ほど自己没入傾向が高いということが明らかにされていることから, 本研究でも同様のパスを仮定した。これらの仮定に基づきモデルを構成し分析を行った結果, その適合度指標の値は $\chi^2(2) = 1.25$ ,  $n.s.$ ,  $GFI = 0.99$ ,  $AGFI = 0.96$ ,  $RMSEA = 0.00$ であった。図1に各影響指標の推定値を示す。抑うつ傾向と自己没入がRMエラーに対して有意なパスを示していた(それぞれ $p < .05$ )。また抑うつ傾向が自己没入に有意なパスを示していたが( $p < .05$ ), 抑うつ傾向から外的没入へのパスは有意でなかった( $p < .10$ )。

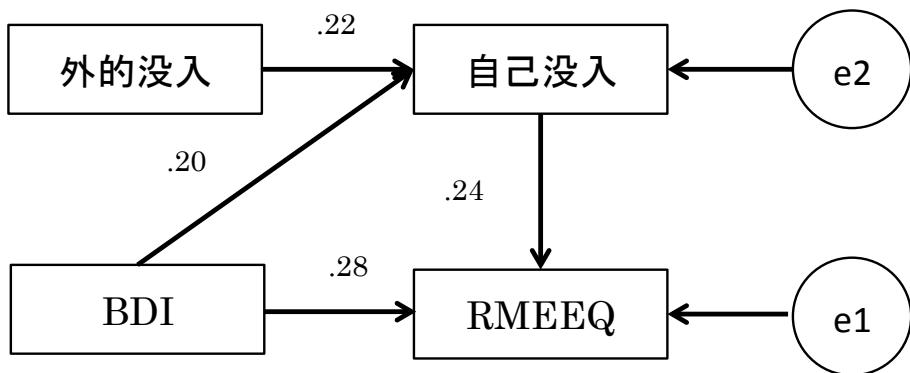


図1 RMEEQ, BDI, 没入傾向の関係のパスダイアグラム

## 考察

パス解析の結果, 抑うつ傾向と自己没入からRMエラーへのパスが有意であった。この結果は, 抑うつ傾向が高い者ほど出来事の知覚的詳細情報よりも自らの思考や感情へ注意していたためにRMエラーを多く経験しやすいという仮説を支持するものであることを唆唆するものである。したがって, 本章の第1節において得られた結果とその解釈は妥当なものであったということが示されたと言うことができた。

抑うつ傾向の者が自己注目するか否かは, 当該の情報が本人にとって肯定的なものであるか, 否定的なものであるかに依るという知見(Pyszczynski & Greenberg, 1987)に基づくならば, 第1節と本節において抑うつ傾向とSMエラーとの関連性が認められたのは, 調査

対象者の肯定的・否定的感情を喚起させるような、日常生活場面における出来事に対するSMエラーを検討対象としたためであると考えられる。また、Hecker & Meiser(2005)においてSM成績と抑うつとの関連性が認められなかったのは、実験対象者の肯定・否定的な感情を喚起させることができない感情価の統制された実験刺激を採用していたためであると考えらえると言える。

本節では、抑うつ傾向、自己没入傾向、SMエラーとの関連性について検討した。次節では、SMエラー経験と解離性体験との関連性について検討する。

### 第3節 ソース・モニタリング・エラー経験と解離性体験

外的な情報の取り込みやすさや、SM遂行時に採用される判断基準に影響を与える要因として解離性体験が挙げられる。本節では、第4章・第3節において得られたデータに基づいて、SMエラー経験の個人差と解離性体験との関連性について考察を行う。解離性障害者は、知覚に由来する記憶であるのに非現実感が伴い、想像や思考に由来する記憶には現実感が伴うというRMエラーを主たる症状の1つとして経験しており、大変な苦痛を味わっており(Hout et al., 1996)、本節で解離性体験とRMエラー経験との関連性を考察することは、解離性障害者の苦痛を軽減するための方法を開発する手がかりになると考えられるからである。

第4章・第3節においては、RMEEQの基準関連妥当性について検討するために、SMエラーと既に関連性が認められているDESとRMEEQとを併せて調査を行った。DESの合計得点とRMEEQの合計得点との関連性について検討するためにSpearmanの順位相関係数を算出した結果、DES得点とRMEEQ得点との間に有意な正の相関が認められた( $\rho = 0.65, p < .01$ )。この結果については、解離性傾向の高い者ほど外的に獲得された情報を自己概念に統合しやすく、さらに、SMを行う際の基準が寛容なものであると考えられている(Hyman & Billings, 1998)。そもそも記憶は構成・再構成的なものであり、スキーマに基づいて再構成された記憶のソースを弁別することは困難である(Bartlett, 1932； Hyman, Husband, & Billings, 1995)。とりわけ、スキーマのうちでも自らの自己概念に基づいて再構成された記憶は、よりSMを困難なものにしている(Johnson et al., 1993)。そのため、解離性体験の頻度の個人差であるDES得点とRMEEQ得点との間に有意な正の相関が認められたと考えられる。

これまで解離性体験とSMエラーとの関連性を検討したこれまでの実証的研究では、両者の密接な関連性が考えられるものの、一貫した結果が得られていなかった。Kunzendorf & Karpen(1997)やMerckelbach et al.(2000)は実験室的記憶研究法により測定されたRMエラーと解離性体験との関連性について調べたものの、両者の関連性は見出されなかった。一方、Hyman & Billings(1998)やWilkinson & Hyman(1998)は幼少期の出来事に関するRMエラー経験と解離性体験との間には関連性について検討したところ、両者の関連性が認められたと報告している。

このように、解離性体験とSMエラーとの間に一貫した結果が得られていなかったが、それには以下の理由が考えられる。本節やHyman & Billings(1998)やWilkinson & Hyman(1998)では、調査対象者自身が経験した出来事についてのSMエラーをその検討対象としている。それに対して、Kunzendorf & Karpen(1997)は知覚した文字とイメージした文字を区別するというRMを検討対象としており、また、Merckelbach et al.(2000)では知覚した写真と文章からイメージした写真を区別する際に発生するSMエラーを検討対象としている。もし、Hyman & Billings(1998)が述べているように、解離性傾向が高い者ほど外的に獲得された情報を自己概念に統合させやすく、さらに、SMを遂行する際の判断基準が寛容であるという考えが正しいのであれば、Kunzendorf & Karpen(1997)や

Merckelbach et al.(2000)のような、自己概念に依る程度が低い、統制された実験刺激を対象とした場合、解離性傾向が高い者であっても正常にSMをなすことができるのではないかと考えられる。一方、本節やHyman & Billings(1998)やWilkinson & Hyman(1998)のように、調査対象者自身が実際に経験することにより外的に獲得された記憶であっても、内的に獲得された自己概念との弁別が困難になるため、解離性傾向が高い者ほどSMエラーを犯しやすいと考えられる。

本節では、第4章・第3節において認められたRMEEQとDESとの関連性についての考察を行った。解離性傾向が高い者ほど、記録不全あるいは出来事についての記憶が適切に統合されないためにSMエラーが多く経験されると考えられた。次節では、SMエラー経験と鮮明な視覚イメージ体験との関連性について検討する。

#### 第4節 ソース・モニタリング・エラー経験と鮮明な視覚イメージ体験<sup>19</sup>

本節では、元のソースとは異なる鮮明な詳細情報が想起されてしまったために起こるSMエラー経験について検討することを目的とする。

SMエラーが発生する原因について、思考や想像に由来する記憶であっても鮮明性の高い知覚的詳細情報が多く伴う場合には、SMエラーが生じると考えられている(Johnson et al., 1993)。そのため、鮮明性の高い視覚イメージを体験することができる能力の個人差と実験室の課題で測定されたSMエラーとの関連性について検討されてきた(Aleman & de Haan, 2004 ; Aleman, Böcker,& de Haan, 1999)。しかしながら、いずれの研究においても、両者の間には関連性が想定されているものの、実証的に確認されていないのが現状である。

Aleman & de Haan(2004)は、空想傾向質問紙(Merckelbach, Horselenberg, & Muris, 2001)により測定された空想傾向の個人差や視覚イメージ鮮明性質問紙(Vividness of Visual Imagery Questionnaire : 以下、VVIQとする)(Marks, 1973)により測定された鮮明性の高い視覚イメージを生成することができる能力の個人差と、実験室の課題で測定されたSMエラーとの関連性について検討した。彼らは、SMエラーを測定するために、カテゴリに含まれる3つの典型語(例えば、“gold”)のうち1つを実験対象者自身に音読するよう求めるか、カテゴリ名と単語の最初の文字を同時に呈示して(“Metal-I...”), 穴埋め問題に回答するよう求めるかした。テストセッションでは、単語を知覚したものなのか(“Gold”), 自ら生成したものであるのか(“Iron”), 記録セッションでは呈示されなかつたもの(“Copper”)のかについて回答するよう求めた。しかしながら、Aleman & de Haan(2004)もまた、その他の研究と同様に、SMエラーと鮮明性との間に関連性を見出すことができなかつた。その理由として、SMエラーを犯してしまうのはSMの対象となる記憶に鮮明性の高い知覚的詳細情報が伴うからというよりも、むしろ、鮮明性の高い知覚的詳細情報を伴うような記憶には個人的に重要で感情的な内容を含んでいるためにSMエラーを犯してしまうのではないかと考察された(Aleman & de Haan, 2004)。Aleman & de Haan(2004)の考えは、自伝的記憶に対するSMエラーと、実験室で呈示された単語リストによって測定されたSMエラーとの関連性が常に認められるわけではないというWilkinson & Hyman (1998)の知見とも一致するものであった。

第4章において作成されたRMEEQは、日常生活場面において経験されるSMエラーや体験の個人差を測定することができるものである。そのため、実験対象者が日常生活場面において経験する多様な経験のうち、対象者自身にとって重要な内容や感情価の高い内容を含む記憶もまたSMの対象となっていると想定することができる。

そこで、本節ではRMEEQとVVIQを併用することにより、対象者にとって重要な内容や感情価の高い内容を含む記憶を対象としたSMエラー経験と、鮮明な視覚イメージを体験

---

<sup>19</sup>第4節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2012). リアリティ・モニタリング・エラー傾向に関わる認知的特性の検討 日本心理学会第76回大会発表論文集, 810.

することができる能力の個人差との関連性について検討を加えることを目的とする。鮮明なイメージを生成することができる能力とSMエラーとの関連性について想定することができるものの、その関連性を実際に見出したという研究は認められなかった。しかし、解離性障害やそれと関連する精神疾患を理解するためにも、継続的にこの二者間の関連性を検討対象とすることは重要な研究課題であると考えられている(Aleman & de Haan, 2004)。もし、鮮明な視覚イメージを体験することができる者ほど、日常生活場面においてSMエラーを経験しやすいのであれば、VVIQ得点とRMEEQ得点との間には有意な相関が認められると予測された。

## 方法

**調査対象者** 専門学校生と大学生の計207名が調査対象であった。このうち男性は130名で平均年齢は21歳( $SD = 6$ , 範囲: 18-60), 女性は77名で平均年齢は22歳( $SD = 6$ , 範囲: 18-58)であった。

**質問紙** 本節では、RMEEQと視覚イメージ能力を測定するために開発された視覚イメージ鮮明性尺度日本語版(Vividness of Visual Imagery Questionnaire: 以下、VVIQ日本語版とする)(菱谷, 2005)とを併せて使用した。RMEEQは第4章・第2節で開発されものである。VVIQの詳しい項目は付録6に示した。VVIQ日本語版はMarks(1973)により開発されたものに基づいて、菱谷(2005)が作成したものを用いる。VVIQは目の前に存在しない人物や風景について考えさせた際に心の眼に浮かぶ視覚的なイメージに注目させ、そのイメージの鮮やかさや明瞭さについて自己評定するよう求めるものである。この他、IMEQ (Morita & Kawaguchi, 2010)も同時に実施したが、これについては本節の目的とは無関係であるため、以後詳述しない。

**手続き** 調査は講義中に集団で実施された。調査のはじめに、本調査が人の認知特性を調べるものであること、調査に要する時間は30分弱であること、データは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。参加に同意した対象者に調査用紙を配布し、回答漏れがないよう注意しながら全項目に回答するよう教示した。RMEEQの回答方法は、第4章・第2節と同様の方法を採用した。VVIQ日本語版へ回答方法は、心の眼に浮かぶイメージについて調査用紙に記載された判断基準に従つてするよう求めた。例えば、今ここにはない、あなたがよく会っている親類とか友人とかのことを考え、あなたの心の眼に浮かぶ、その人のイメージを注意して見て下さい、というものである。そして、呼び起こされたイメージの鮮やかさや明瞭さについて判断基準に従つて分類し、それを記入してもらった。VVIQ日本語版の判断基準とは、1：“完全にハッキリしていて、実物を見ているようである。”、2：“かなりハッキリしているが、実物を見ているほどではない。”、3：“ハッキリした程度は、中位である。”、4：“ボンヤリしていて、かすかである。”、5：“全くイメージが浮かばないで、ただ言われたことに

ついて自分が考えているということが、「わかっている」だけである。”の5件法であった。以上のような教示によって視覚イメージやその鮮明さへ注目して評定していることを補償した。

## 結果

回答漏れがあった6名を除き、専門学校生と大学生の計201名を分析対象とした。このうち男性は124名で平均年齢は21歳( $SD = 6$ , 範囲: 18-60), 女性は77名で平均年齢は22歳( $SD = 7$ , 範囲: 18-58)であった。RMEEQ得点とVVIQ得点とのPearsonの積率相関係数を算出した。RMEEQ得点とVVIQ得点との間には有意な相関が認められなかった( $r = 0.03$ ,  $n.s.$ )。

RMEEQには視覚的なSMエラー、聴覚的なSMエラー、視覚と聴覚の両方に関わるSMエラー、行為に関するSMエラーについて尋ねる項目が含まれている。そのため、RMEEQの合計得点と視覚的なイメージの生成に関わるVVIQ得点との相関が認められなかつた可能性も考えられる。そこで、RMEEQに含まれる項目をモダリティごとに、視覚的なSMエラーに関わる項目(3, 29), 聴覚的なSMエラーに関わる項目(4, 5, 16, 22, 24, 31), 視覚と聴覚の両方に関わるSMエラー項目(6, 8, 18, 23, 27), 行為に関わるSMエラー項目(1, 2, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 17, 19, 20, 21, 25, 26, 28, 30, 32)に分類し、モダリティごとの合計得点を算出し、それぞれの合計得点とVVIQとの相関係数を算出した。

まず、視覚的なSMエラー得点とVVIQ得点、視覚・聴覚的なSMエラー得点とVVIQ得点との関連性について検討するために、それぞれについてSpermanの順位相関係数を算出したところ、視覚的なSMエラー得点とVVIQ得点との間に有意な正の相関が認められたが( $\rho = 0.18$ ,  $p < .05$ )、視覚・聴覚的なSMエラー得点とVVIQ得点との間には有意な正の相関は認められなかつた( $\rho = -0.03$ ,  $n.s.$ )。聴覚的なSMエラー得点とVVIQ得点、行為に関わるSMエラー得点とVVIQ得点との関連性について検討するために、それぞれのPearsonの積率相関係数を算出した。その結果、聴覚的なSMエラー得点とVVIQ得点、行為に関わるSMエラー得点とVVIQ得点のいずれも有意な正の相関は認められなかつた(それぞれ $\rho = 0.05$ ,  $\rho = 0.00$ ,  $n.s.$ )。以上の結果から、RMEEQに含まれるエラーのうち視覚的なSMエラーと鮮明な視覚イメージを生成することができる能力との間に関連性が認められるということが示唆されたと言える。

## 考察

本節で得られた結果から、RMEEQに含まれるエラーのうち視覚的なSMエラーと鮮明な視覚イメージを体験することができる能力との間に関連性が認められるということが示された。本節で得られた結果は、SMエラーとVVIQ得点との間には有意な相関が認められないというAleman & de Haan(2004)の知見とは異なるものであった。この結果は、鮮明な視覚イメージを体験することができる者ほど、想像したことに由来する記憶には知覚的詳細

情報が多く伴うため、想像に由来する記憶であっても知覚や実行されたことに由来するものであると勘違いするSMエラーを多く経験しやすいと考えられる。

Aleman & de Haan(2004)においてSMエラーとVVIQとの間に関連性が認められなかつたのは、SMエラーを測定するために採用したカテゴリ連想課題と実験刺激の性質に依るものであると考えられる。まず、この課題では、実験対象者自身が単語を音読するというものと、実験者によって視覚呈示された単語の穴埋め問題から構成されている。つまり、この課題におけるSMは、行為や聴覚に由来する記憶と視覚的に生成されたもの由来する記憶とを弁別させるものになる。本節で得られた結果から、鮮明な視覚イメージを体験することができる能力が高い者は、視覚に由来する記憶と視覚的に想像されたものに由来する記憶とを取り違えてしまうSMエラーを経験しやすいが、聴覚に由来する記憶や行為に由来する記憶とを取り違えてしまうSMエラーが経験されやすいといわけではないことが示唆された。さらに、Aleman & de Haan(2004)が採用した実験刺激は、実験対象者自身にとって重要な内容や感情的内容を含んでいないものであったため、鮮明性の高い視覚イメージが体験されていなかった可能性があると考えられる(Aleman & de Haan, 2004)。そのため、Aleman & de Haan(2004)においても、SMエラーとVVIQとの間に関連性が認められなかつたのかもしれない。

本節において得られた結果から、鮮明な視覚イメージを体験することができる能力を有する者ほど、SMエラーが経験されやすいということを示唆された。前節において、解離性傾向が高い者ほど、日常生活場面においてSMエラーを経験しやすいという知見が得られた。さらに、解離性障害の主な症状には、実際に体験した出来事に関する自伝的記憶に対して非現実感が伴う一方で、自らの想像に由来する記憶に対して現実感が伴うというものがある(Hout et al., 1996)。したがって、解離性傾向が高い者や解離性障害を有する者は、鮮明な視覚イメージを体験することができるため、自ら想像したことによる記憶に対して現実感が伴うのではないかと考えられると言える。ただし、解離性傾向の高い者がSMエラーを体験するのは、実験室で呈示される二次変数の統制された刺激に対してではなく、日常生活場面において自ら体験した出来事や、想像したことによる限られるのではないかと考えられる。

本節では、鮮明な視覚イメージを生成することができると自己評価する者ほど、日常生活場面において経験されるSMエラーとの関連性について検討を加えるために、VVIQとRMEEQとを併せて使用した。その結果、両者の間に有意な相関が認められた。したがって、鮮明な視覚イメージを生成することができるという自己評価をする者ほど、日常生活場面においてSMエラーを経験しやすいということが示されたと言うことができた。次節では、SMエラー経験と視覚イメージスタイルとの関連性について検討する。

## 第5節 ソース・モニタリング・エラー経験と視覚イメージスタイル

前節において、鮮明な視覚イメージを体験することができる能力の個人差を調べるために質問紙であるVVIQ日本語版とRMEEQとの関連性について検討した。その結果、RMEEQに含まれる項目のうち、視覚的なSMエラーに関わる項目の合計得点とVVIQ得点との間に有意な正の相関が認められた。この結果から、鮮明な視覚イメージを体験することができる能力を有する者ほど、SMエラーを経験しやすいということが示唆されたと言うことができた。

しかしながら、最近、視覚イメージ能力に関する神経生理学的研究から得られた知見を根拠に、視覚イメージ能力を個々の物体の形や大きさ、色、明るさのような見えの情報処理に関わる物体イメージ(*object imagery*)特性と、物体の部品間の空間的関連性や配置、物体の動きや変化、空間操作の情報処理に関わる空間イメージ(*spatial imagery*)特性とに分類して、視覚イメージ能力の個人差を捉え直そうという試みがなされてきている(川原・松岡, 2009; Kozhevnikov, Kosslyn, & Shephard, 2005)。例えば、読書によって映像的な視覚イメージを経験している際に使用されている視覚イメージ能力は、物体イメージ特性に該当するが、見知らぬ土地で東西南北がわかるため道に迷うことが少ないといった際に使用されている視覚イメージは空間イメージ特性に該当するなどである。前節において使用したVVIQは、物体イメージ特性と関連するということも実証的に検討されている(川原・松岡, 2008)。

さらに、個人内で、物体イメージに関わる処理と空間イメージに関わる処理のどちらが優先されているのかを調べるために、Blajenkova, Kozhevnikov, & Motes(2006)は、物体-空間イメージ質問紙(*Object-Spatial Imagery Questionnaire* : 以下、OSIQとする)を開発した。OSIQは、物体イメージ得点はイメージの鮮明性や物体イメージに関わる課題成績と相関が認められている一方で、空間イメージ得点は心的回転テストや空間的視覚化テストの成績との相関が見出されている(Blajenkova et al., 2006)。これらの知見は、視覚イメージ能力には、物体と空間のそれぞれに対応する処理が存在しているということと、それぞれに特異化された視覚イメージの処理能力には個人差が存在するということを示唆するものである。

従来のSM研究においては、物体イメージ処理に関わる個人差を測定するためのVVIQとSMエラーとの関連について検討してきたものの、SMエラーと空間イメージに関わる処理能力の個人差との関連性についてはデータが蓄積されているとは言い難いのが現状である。そこで、本節では、RMEEQと空間イメージ特性や物体イメージ特性との関連性が認められるのか否かについて検討することを目的とする。

物体イメージや空間イメージに関わる処理能力の個人差について調べるために、本節では視覚イメージスタイル質問紙(*Visual Imagery Style Questionnaire* : 以下、VISQとする)(川原・松岡, 2009)を使用する。Blajenkova et al.(2006)が作成したOSIQには建築家やデザイナーなどの専門家でなければ理解しにくいと考えられる製図やデザインに関わる専門

用語が質問項目に含まれているため、職業によって求められるイメージ処理能力が異なる<sup>20</sup>ことを明らかにできるという意味で有意義であるものの(Blajenkova et al., 2006), 一般の学生には回答しにくいという問題がある(川原・松岡, 2009)。

VISQは、個人内で空間イメージ特性と物体イメージ特性のどちらが優位であるのかを測定するために川原・松岡(2009)により作成された質問紙で、日常生活場面におけるイメージ経験に関する質問項目を含む。VISQは物体イメージ特性因子12項目と空間イメージ特性因子12項目の2因子、計24項目から構成されている。物体イメージ特性項目は、“1度目にした絵画や写真、テレビや映画などのイメージがいつまでも頭の中に残っている”, “ラジオのアナウンサーやDJが話すのを聞いているとき、いつもその情景や様子を具体的に思い浮かべている自分に気づく”などであった。空間イメージ特性は、“3次元的な立体図形を描くのが得意である”, “言葉で目的地までの生き方を教えてもらえば、目的地までの正しい道筋がわかる”などの項目が含まれており、それぞれの項目について自己評定することを求める。

もし、VVIQで測定されているような、鮮明な視覚イメージを体験することができる能力を有する者ほど、SMエラーを経験しやすいのであれば、物体イメージ得点とRMEEQ得点との間には有意な正の相関が認められると予測された。一方、空間イメージ特性は、その特性が高い者ほど空間的関連性や配置に関する認識が正確なものになると考えられる。そのため、空間イメージ能力が高い者ほど、SMエラーをあまり経験していないため、空間イメージ特性とSMエラーとの相関は認められないか、認められたとしても弱い相関であることが予測された。

## 方法

**調査対象者** 大学生の計78名が調査対象であった。このうち男性は45名で平均年齢は19歳( $SD = 1$ , 範囲: 18-23), 女性は33名で平均年齢は20歳( $SD = 2$ , 範囲: 18-25)であった。

**質問紙** 本節ではRMEEQとVISQを使用した。RMEEQは第4章・第2節と同様のものを使用した。VISQの詳しい項目は付録7に示した。VISQは、視覚イメージ特性について測定するために川原・松岡(2009)により作成された質問紙を使用した。回答の順番は常にRMEEQ, VISQであった。AIQも同時に実施したが、本節とは無関係であるため、以後記述しない。

**手続き** 心理学の講義中に集団で実施した。調査に要する時間が30分弱であることと、調査への参加は強制ではなく、参加したい者だけ教室に残るよう告げた。調査者が調査用紙を配布し、記入漏れがないよう全ての項目について回答するよう求めた。RMEEQへの教示文と回答方法については第4章・第2節と同様のものを採用した。VISQについては、文章1-24が普段の自分に該当する程度について、当てはまる程度を5件法(5: “よく当て

<sup>20</sup> Blajenkova et al.(2006)によると、物体イメージ使用傾向の者は芸術や映像に関わる専門職と、空間イメージ使用傾向者が建築家や數学者といった職業との関連性が見出されている。

はまる”—1：“全くあてはまらない”に置き換えて1つ○をつけて回答するよう求めた。また、各質問、あまり深く考えず当てはまると思ったところを○で囲むようにも告げた。回答順序は常にRMEEQ, VISQであった。回答終了後、調査者が全て調査用紙を回収した。

## 結果

記入漏れの者がいなかつたため、全てのデータを分析対象とした。

SMエラーと物体イメージスタイルとの関連性について検討するために、RMEEQ得点と物体イメージスタイル得点とのSpearmanの順位相関係数を算出した。その結果、RMEEQ得点と物体イメージ得点との間には有意な正の相関が認められた( $\rho = 0.25, p < .01$ )。次に、RMエラーと空間イメージスタイルとの関係性について検討するために、RMEEQ得点と空間イメージスタイル得点とのSpearman順位相関係数を算出した。その結果、RMEEQ得点と空間イメージスタイル得点との間には有意傾向である負の相関が認められた( $r = -0.19, p < .10$ )。以上の結果から、物体イメージスタイル傾向の高い者ほどRMエラーを多く経験しやすく、空間イメージスタイル傾向が高い者ほどRMエラーをあまり経験しない傾向であるということが示された。

## 考察

物体イメージスタイル尺度の項目には“映像的なイメージを思い浮かべながら本を読むことが多い”，“ラジオのアナウンサーやDJが話すのを聞いているとき、いつもその情景や様子を具体的に思い浮かべている自分に気づく”などが含まれており、物体イメージの合計得点が高い、すなわち、物体イメージの処理スタイル傾向が強い者ほど物体について事実とは異なる色や形について主観的体験がなされる傾向が高いと考えられる。そのため、物体イメージスタイル傾向が高い者ほど、想像や思考に由来する記憶であっても、元のソースとは異なる詳細情報が想起されるため、SMエラーを多く経験しやすいと考えられる。

一方、空間イメージ尺度の項目には“知らないところに言っても東西南北をあまり間違えない”，“建物の見取り図や平面図を描くことが得意である”，“ホテルや旅館の部屋に入るとその部屋がどちら向きの部屋かわからなくなる(逆転項目)”などが含まれており、空間イメージ尺度の得点が高い、すなわち、空間イメージの処理スタイル傾向が高い者ほど、事実に基づいた空間的イメージを体験することができる傾向が高いということになる。そのため、空間イメージスタイル傾向が高い者ほど、生成された空間イメージ情報を判断手がかりとして、SMを正常になすことができるのでないかと考えられる。

従来のSM研究においては、記憶痕跡の質的特徴を調べることができるMCQとSM課題との関連性から、知覚的詳細情報の鮮明さがSMエラーに影響を与えるという知見が得られていた(Johonson et al., 1993)。しかしながら、いかなる視覚イメージ能力の個人差がSMエラーに影響を与えるのかについては明らかにされてこなかった。本節において、視覚イ

メージ能力を構成するもののうち、物体の色や形についての鮮明なイメージを体験することができる物体イメージスタイル傾向とSMエラーとの関連性を見出すことができた。したがって、MCQで測定されていた鮮明な知覚的詳細情報の処理には、視覚イメージの処理能力のうち、物体イメージスタイルが関わっている可能性も示唆されたと言えるだろう。

本節では、視覚イメージ能力の個人差を構成する物体イメージスタイル傾向や空間イメージスタイル傾向と、SMエラーとの関連性について検討を加えた。その結果、物体イメージスタイル傾向が優勢である者ほど、SMエラーを多く経験しやすいと考えられた。次節では、SMエラー経験と無意図的想起経験との関連性について検討する。

## 第6節 ソース・モニタリング・エラー経験と無意図的想起経験<sup>21</sup>

本節では、SMエラーと無意図的想起との関連性について検討することを目的とする。従来の実験室的記憶研究法によるSMエラー研究においては、実験者の促しによってSMを行うよう求められていた。しかしながら、日常生活場面においては常に外的な促しによってSMを開始するよう求められるといった状況ばかりではない。例えば、出先で玄関扉の施錠を行ったのか否かについてふと思いつき出される場合や、図書館で借りた書籍を返却したかどうかについて受講中にふと思いつき出される場合のように、日常生活場面においては外的な促しが存在しないにも関わらず、SMが開始されるといった状況も想定される。このように、外的な促しがない状況において、ふと記憶が想起される現象は無意図的想起と呼ばれている(小谷津ら, 1992)。日常生活場面においては、無意図的想起とSMとの関連性について想定することができる状況が存在するにも関わらず、無意図的想起経験とSMエラー経験を検討対象としたデータが蓄積されているとは言い難いのが現状である。

日常生活場面における無意図的想起経験とSMエラー経験との関連性を検討対象とすることことができなかつた理由は、日常生活場面において経験される無意図的想起を測定する方法の欠如であると考えられる。この難点を克服するために、Morita & Kawaguchi(2010)は、日常生活場面で経験される無意図的想起の頻度について尋ねることができるIMEQを開発した。IMEQは、3因子(まだ実行されていないが未来に予定された行為についての無意図的想起、数分前に経験した過去の出来事についての無意図的想起、数ヶ月-数年前に経験した出来事についての無意図的想起)16項目から構成される質問紙で、無意図的想起経験について普段どう感じているかについての評定を求め、その合計得点は全般的な無意図的想起経験の頻度を表すものである。また、それぞれの因子得点は、未来に予定された行為に関する無意図的想起の頻度、数分前に経験した出来事についての無意図的想起の頻度、そして、数ヶ月-数年前に経験した出来事についての無意図的想起の頻度を表す。例えば、何かを見たり聞いたりして、近日中に何かを買わなければいけないのをふと思いつき出しますか(未来の予定)、特にきっかけがないのに、数分前に自分が言ったことをふと思いつき出しますか(過去短期)、特にきっかけがないのに、食事をしたことをふと思いつき出しますか(過去長期)、等である。

本節ではIMEQとRMEEQとを併せて使用し、それぞれの得点の関連性について調べることにより、現在殆ど解明されていない日常生活場面における無意図的想起経験とRMエラー経験との関連性について検討することを目的とする。例えば、ストーブのスイッチを確認した後でキッチンを後にするが、実際にストーブのスイッチを確認したのか、あるいは、確認しようと考えていただけなのかをふと思いつき出する場合のように、無意図的想起が強迫観念を駆動すると想定することもできるため(Abramowitz, Moore, Braddock, &

<sup>21</sup>第6節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2012). リアリティ・モニタリング・エラー傾向に関わる認知的特性の検討 日本心理学会第76回大会発表論文集, 810.

Harrington, 2009), SMエラー経験と無意図的想起経験との関連性を検討対象とすることは、強迫観念が経験されることに伴う苦痛を低減するための方策を提唱するために、貴重な研究課題であると考えられる。

最近の出来事についての記憶には、遠い過去の出来事よりも、知覚的詳細情報を多く含んでいる(D'Argembeau & Van der Linden, 2004 ; Johnson et al., 1988b ; McDonough & Gallo, 2010)。そのため、RMEEQ得点とIMEQのうち最近経験した出来事の得点との相関が認められると予測された。さらに、未来の予定について考えることは、現時点で起こっていない出来事をシミュレートすることが求められるため、過去の出来事について考えるよりも、認知操作を多く必要とする(Addis, Wong, & Schacter, 2007; McDonough & Gallo, 2010)。そのため、RMEEQ得点とIMEQのうち未来の予定に関する得点との間にも相関が認められると予測された。

## 方法

**調査対象者** 専門学校生と大学生の計207名が調査対象であった。このうち男性は130名で平均年齢は21歳( $SD = 6$ , 範囲 : 18-60), 女性は77名で平均年齢は22歳( $SD = 6$ , 範囲 : 18-58)であった。

**質問紙** 本調査では、RMEEQとMorita & Kawaguchi(2010)により開発されたIMEQを使用した。RMEEQは第4章・第2節で開発されたものと同様のものを使用した。IMEQの詳しい項目は付録8に示した。この他、VVIQも同時に実施したが、これについては本調査の目的とは無関係であるため、以後詳述しない。

**手続き** 調査は講義中に集団で実施された。調査のはじめに、本調査が人の認知特性を調べるものであること、調査に要する時間は30分弱であること、データは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。参加に同意した対象者に調査用紙を配布し、回答漏れがないよう注意しながら全項目に回答するよう教示した。RMEEQの回答方法は、第4章・第2節と同様の回答方法を採用した。IMEQについては、無意図的想起経験に関する文章1-16について普段どう感じているかを5件法(4：“非常によくある” —0：“全くない” )で回答するよう求めた。

## 結果と考察

回答漏れがあった6名を除き、専門学校生と大学生の計201名を分析対象とした。このうち男性は124名で平均年齢は21歳( $SD = 6$ , 範囲 : 18-60), 女性は77名で平均年齢は22歳( $SD = 7$ , 範囲 : 18-58)であった。

SMエラーと無意図的想起との関連について検討するために、RMEEQ得点とIMEQ得点の未来の行為得点、過去短期得点、過去長期得点とのPearsonの積率相関係数を算出した。

その結果を表3に示す。未来の行為得点とRMEEQ得点、過去・長期得点とRMEEQ得点、過去・短期得点とRMEEQ得点との間にそれぞれ有意な正な相関が認められた(それぞれ $r=0.62$ ,  $r=0.46$ ,  $r=0.59$ , それぞれ $p<.01$ )。

表3 RMEEQ得点とIMEQの下位尺度得点間の相関係数

RMEEQ	IMEQ (未来)	IMEQ (過去・長期)	IMEQ (過去・短期)
IMEQ(未来)	.62**		
IMEQ(過去・長期)	.46**	.48**	
IMEQ(過去・短期)	.59**	.59**	.56**

\*  $p<.05$     \*\*  $p<.01$

次に、RMEEQ得点を従属変数、その他の変数を独立変数とする重回帰分析を実行した。表3に示した変数間の相関係数は中程度以下であることから、多重共線性の問題はないと考えられる。変数を強制投入した。重決定係数は0.46で、1%水準で有意だった。それぞれの独立変数から従属変数への標準化係数を表4に示した。未来の行為の無意図的想起及び最近の過去の無意図的想起の標準化係数は1%水準で有意であった。

表4 IMEQの下位尺度得点からRMEEQ得点への標準化係数

	$\beta$
IMEQ(未来)	.39 **
IMEQ(過去・長期)	.10 n.s.
IMEQ(過去・短期)	.30 **

従属変数：RMEEQ    \*\*  $p<.01$

McDonough & Gallo(2010)によると、現時点で実行していない未来の行為について考えることにより、認知的操作情報が記憶に付与されやすく、既に実行した行為について考えることにより、知覚的操作情報が記憶に付与されやすい。そのため、現時点で実行していない未来の行為をふと思いつくことが多いと、認知的操作情報が付加されやすいため、現

実のことなのに想像したことによって由来するものだと勘違いしてしまうSMエラーを経験しやすい。その結果、IMEQ・未来の得点とRMEEQ得点との間に有意な正の相関が認められたと考えることができる。一方、最近実行した行為をふと思い出すことが多いと、知覚的詳細情報が付加されやすいため、想像したことなのに、現実のことだと勘違いしてしまうSMエラーを経験しやすい。その結果として、IMEQ・過去短期の得点とRMEEQ得点との間に有意な正の相関が認められたと考えられる。

本節では、これまで殆ど検討対象とされてこなかった無意図的想起経験とSMエラー経験との関連性について検討を行った。次節では、強迫神経症傾向とSMエラー経験との関連性について検討する。

## 第7節 ソース・モニタリング・エラー経験と強迫神経症傾向<sup>22</sup>

SMエラー経験に対する主観的な自己評価やエラーを未然に防ぐための行動がSMエラー経験に与える影響について検討するために、本節では日常生活場面において経験されるSMエラーと神経症的傾向との関連性について検討する。

強迫神経症(obsessional compulsive disorder)とは、自らの意志や理性に反して侵入的で繰り返し浮かんでくる不合理で不快な強迫観念(obsession)と、そのような強迫観念を減衰させたり、脅威事態を避けるために行われる強迫行為(compulsion)により悩まされる状態である(細羽ら, 1992)。強迫神経症の典型的な症状として、最愛の孫をバルコニーから投げ捨てるイメージが繰り返し浮かんでくるという強迫観念(Rachman, 1997)や、ガスストップのスイッチを連続して15回以上確認してしまうという強迫行為(Hermans et al., 2008)が挙げられる。とりわけ、確認行為は強迫神経症であると診断された者の75%が行っているという報告もなされており(Ball, Baer, & Otto, 1996 ; Rachman & Hodgson, 1980)、確認行為のために時間が費やされてしまう場合、しばしば日常生活に支障をきたしてしまうことがある(APA, 2000)。そのため、確認行為が発生してしまうメカニズムについて解明することは、強迫神経症に対する理解を深め、その苦痛を軽減するための方策を提案する上で重要な研究課題であると考えられる。

強迫神経症に関する過去の研究において、確認行為は脅威事態を回避するために重要な機能を果たしていると考えられてきたが、確認行為を繰り返したとしても、必ずしも恐怖や不安を回避することができないという報告がなされるようになった(Hermans et al., 2008)。さらには、強迫神経症の者が強迫行為を行う前に必ずしも強い不安や不快感を訴えているわけではないという報告さえもなされている(Rachman & Hodgson, 1980)。そのため、不安や不快感の低減と確認行為とを関連づけて理解することが困難であると考えられるようになった(Rachman & Hodgson, 1980)。確認行為は脅威事態に対する不安や不快感を低減させるために行われるというよりも、自らの行為に関する記憶が損傷してしまったために行われるのではないかと指摘されている(Hermans et al., 2008)。

しかしながら、強迫神経症の者とそうでない者との記憶を検討対象とした研究において、一貫した知見が見出されていない。Ecker & Engelkamp(1995)は、強迫神経症に罹患している者のうち、確認行為を繰り返す者とそうでない者とを対象に、動作に関する記憶成績を比較した。その結果、確認行為を繰り返す者の方がそうでない者よりも自由再生の成績が下回っていた。この結果は、自らの行為についての記憶が欠如していることを示唆するものであった。同様の知見は、Sher, Frost, & Otto(1983), Rubenstein, Peyniciogle, Chambless, & Pigott(1993)においても見出されている。その一方、強迫神経症者と健常者群とを比較した場合には、両群の記憶成績に差は認められていない(Foa, Amir, Gershuny,

<sup>22</sup>第7節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2013). リアリティ・モニタリング・エラーと強迫神経症傾向の関連 日本心理学会第77回大会発表論文集, 316.

Molnar, & Kozak, 1997 ; Jelinek, Morits, Heeren, & Naber, 2006 ; Simpson, Rosen, Huppert, Lin, Foa, & Liebowitz , 2006)。一貫した知見が見出されない理由は、実験で採用されている刺激が強迫神経症の者にとって中性的あるいは強迫神経症とは無関連なものであったためであるとも考えられた。しかし、強迫神経症と関連するような刺激を用いて、強迫神経症の者と不安障害の者の記憶成績を比較したところ、両者の記憶成績には違いが認められなかった(Hermans, Martens, De Cort, Pieters, & Eelen, 2003)。この知見は、強迫神経症の者が示す確認行為は、記憶そのものが損傷されていることに依るものではないことを示唆するものである。むしろ、確認行為を行ったという自らの記憶、すなわち、実行したか否かという SMに対する確信度が低下しているために、繰り返し確認行為を行ってしまうのではないかと考えられるようになってきた(Hermans et al., 2003)。

Hout & Kindt(2003)は、大学生を対象にコンピューターの画面に表示させたストーブのスイッチや電球のスイッチを繰り返し確認させた。そして、それぞれの記憶に伴う詳細情報や記憶に対する確信度を比較した。その結果、ストーブのスイッチを繰り返し確認した群は、そうでない場合よりも、最後に行われた確認行為に対する確信度、鮮明さ、詳細情報が減少するということが見出された。電球のスイッチを繰り返し確認させた群では、記憶に対する確信度や鮮明さ等の減少は認められなかった。しかしながら、両群において、実際の記憶成績に差が認められなかった。この知見は、確認行為を繰り返すことにより、実行したか否かという自らのSMに対する確信度や詳細情報が低下するということを示唆するものである。それは、確認行為が繰り返されることによって、確認行為に関わる詳細情報を“思い出せる (remembering)” という想起意識から、確認行為を行ったことを単に“知っているだけ(knowing)” という想起意識へと変化するためであると考えられた<sup>23</sup>。同様の知見は、Boschen & Vuksanovic(2007)やRadomsky & Alcolado(2010)においても認められており、コンピューター上の対象物ではなく実際の対象物を用いた場合においても同様の結果が得られている(Radomsky, Gilchrist, & Dussault, 2006)。

その一方、SMと確認行為との間に関連性が見出されなかつたという報告もある。Brown et al.(1994)は、確認行為と見たことに由来する記憶と想像に由来する記憶とを弁別する能力との関連性について検討を行った。視覚呈示により記録させるか、聴覚呈示された単語を視覚イメージさせることにより記録させた。そして、確認行為を行う者とそうでない者とのSMの成績を比較した。その結果、両者のSM成績には有意な差は認められなかつた。Brown et al.(1994)と同様の知見は、Merckelbach & Wessel(2000), McNally & Kohlbeck (1993), Sher et al.(1983)においても見出された。しかしながら、これらの研究で採用された材料は強迫神経症とは関連のないものであったことや、対象者数が少なかつたために、SMと確認行為との関連性が認められなかつたのではないかと考えられている(Zermatten,

---

<sup>23</sup> “思い出せる”とは、既に実行された行為であると判断されたもののうち、その行為を実行した詳しい状況や実行する際に考えてしたことなどの記憶経験の詳細が意識的に回想できる状態を指し、“知っている”とは既に実行された行為であると確信が持てるほど熟知しているが、行為を実行した際のいかなる記憶経験の詳細も回想できない状態を指す(藤田, 1999)。

Van der Linden, Larøi, & Ceschi, 2006)。したがって、確認行為とSMエラーとの関連性について概ね認められていると言えるだろう。

ただし、確認行為とSMエラーとの関連性を検討対象とした研究はその数が限られている(Hermans et al., 2008)。さらに、確認行為とSMエラーとの関連性に関するこれまでの研究では、実験室の課題により測定されたSMエラーと確認行為との関連性がその検討対象となっていた。そのため、確認行為を繰り返す者が日常生活場面において示すSMエラー経験の個人差に関するデータが蓄積されているとは言い難いのが現状である。

そこで、本節ではRMEEQを用いて日常生活場面において経験されるSMエラーの個人差を測定し、それと確認行為との関連について検討することを目的とする。日常生活場面において主観的に経験される確認行為に伴う苦痛を理解し、確認行為に伴う苦痛を低減するためには、日常生活場面において経験されるSMエラーの個人差と確認行為との関連性について検討することは重要な研究課題であると考えられる。Hermans et al.(2003)やHout & Kindt(2003)で得られた知見のように、強迫神経症傾向の高い者ほど日常生活場面においてSMエラーを多く経験しやすいならば、RMEEQ得点と神経症傾向との間には有意な正の相関が認められると予測された。

## 方法

**調査対象者** 専門学校生と大学生230名が調査対象であった。このうち男性126名で平均年齢は21歳( $SD = 3$ 、範囲：18-41)、女性104名で平均年齢21歳( $SD = 3$ 、範囲：18-45)であった。

**質問紙** 本節ではRMEEQと日本語版モーズレイ強迫神経症質問紙(MOCI)(細羽ら, 1992)を用いる。RMEEQは第4章・第2節で作成されたものと同様のものを使用した。MOCIの詳しい項目は付録9に示した。MOCIは30項目から構成され、評定値の合計得点から健常者の強迫神経症傾向を測定するもので、確認行為、清潔・洗浄行為、疑惑・強迫的思考の3因子から構成されている。確認行為は脅威や危険を未然に防ごうとする予防的行動であり、例えば、“物事を2度も3度もチェックする”等が挙げられる。清潔・洗浄行為は脅威や危険を最小限に抑えようとする修復的行動を表すもので、例えば、“公衆電話を使うとき、不潔な感じがしてあまり良い気はしない”が挙げられる。そして、疑惑・強迫的思考は自身の行為や思考に対する強い疑いを表すもので、例えば、“自分で否定したくても、不愉快な考えが頭に浮かぶことがある”が挙げられる。

**手続き** 大学・専門学校の心理学の講義時間の一部を利用して、集団で質問紙による調査を実施した。調査のはじめに、本調査が人の認知特性や性格特性を調べるものであること、調査に要する時間は30分弱であること、データは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、調査への参加は自由意志に基づくものであり強制的なものではないことを教示した上で、参加に同意する者は部屋に残るよう求めた。参加に同意した対象者に調査用紙を配布し、回答漏れがないよう注意しながら全項目に回答するよう教示した。RMEEQ

の回答方法は、第4章・第2節と同様の方法を採用した。MOCIの回答方法は、日頃の考え方や気持ちに最も近いと思うところに3件法(1：“そうではない”，2：“どちらともいえない”，3：“その通りだ”)で回答を求めるものであった。回答順序は固定で、常にRMEEQ, MOCIの順であった。

## 結果

13名の回答に記入漏れがあったため、それらを除いた217名のデータを分析対象とした。217名のうち男性は116名で平均年齢は21歳( $SD = 3$ , 範囲：18-35), 女性は101名で平均年齢21歳( $SD = 4$ , 範囲：18-32)であった。

SMエラーと強迫神経症傾向との関連を検討するために、RMEEQ得点とMOCIの各因子得点とのPearsonの積率相関係数を算出した。RMEEQ得点と確認行為得点, RMEEQ得点と疑惑・強迫的思考得点との間にそれぞれ有意な正の相関が認められた( $r = 0.18, r = 0.35$ , それぞれ $p < .01$ )。RMEEQ得点と清潔・洗浄行為得点と間には有意な相関が認められなかつた( $r = 0.13, n.s.$ )。以上の結果から、SMエラー経験の個人差と、確認行為及び疑惑・強迫的思考との間に関連性が認められるということが示された。この結果は、強迫神経症の者が、健常者と比較して、自らのSM能力に対する確信度が低いという知見(Hermans et al., 2008 ; Hermans et al., 2003 ; Hout & Kindt, 2003)とも一致するものであった。

## 考察

本節の結果から、SMエラー経験の個人差と、確認行為及び疑惑・強迫的思考との間に関連性が認められるということが示された。RMEEQは日常生活場面におけるSMエラー経験の頻度についての回答を求めるものであり、RMEEQ得点にはSMエラーを多く経験しているという自己評価も含まれると考えられる。そのため、SMエラーを多く経験しているという自己評価が低い者ほど、既に実行したことであっても未だ実行していないのではないかと自らの思考などに対する疑惑・強迫的思考が引き起こされたり、SMエラーを未然に防ぐために確認行為を繰り返してしまうのではないかと考えられる。

本節では、SMエラーと確認行為及び疑惑・強迫的思考との関連性が認められるということが示された。前節においては、無意図的想起とSMエラーとの関連性を見出すことができたと言うことができた。また、強迫観念は外的な、または内的なリマインダにより駆動されるため(Abramowitz et al., 2009)，無意図的想起の内容が強迫観念に関連するものである場合に、無意図的想起が内的なリマインダとして強迫観念を駆動する可能性があると考えられる(森田・中田, 2014)。そして、強迫観念(疑惑)から確認行為を経るという報告もなされている(山崎・丹野, 2002)。したがって、したがって、無意図的想起が高頻度である者ほど、SMエラーを経験しやすいために、強迫観念が駆動され、確認行為を繰り返してしまう可能性が考えられる。

本節では、強迫神経症傾向と日常生活場面において経験されるSMエラーの個人差との関連性について調べるために、MOCIとRMEEQとを併せて調査した。その結果、確認行為や疑惑・強迫的思考とRMEEQ得点との間に関連性が認められた。この結果は、SMエラーを多く経験していると自己評価する者ほど、確認行為や自己の思考などに対する疑惑・強迫的思考を引き起こしやすいと考えられた。また、無意図的想起経験、SMエラー経験、強迫観念及び確認行為との関連性についても考察された。

## 第8節 本章のまとめ

本章の目的は、第4章・第1節で得られたSMエラーの原因として想定されるものに基づいて、記録・保持・想起のそれぞれの段階において性格特性や認知特性がSMエラーをどのように規定するのかについて検討を加える。このことにより、SMエラーが経験される精神疾患への理解を深めるための知見を得ることである。

第1節と第2節では、SMエラー経験を規定する記録時の要因を検討対象とした。記録時に出来事の詳細情報よりも自らの感情や思考に注意していたことに起因する記録不全によってSMエラーが経験されることを検討するために、抑うつ傾向、没入傾向、SMエラーとの関連性について検討した。その結果、3者間には関連性が認められた。つまり、抑うつ傾向が高い者ほど、出来事の詳細情報よりも自らの思考や感情に注意しやすいためにSMエラーが経験されると解釈できるものであることが示された。抑うつの者によって経験されるSMエラーは、記録時に出来事の知覚的詳細よりも自らの思考や感情に注意していたことに起因する記録不全に依るものであるという可能性が示唆されたと言える。

第3節では、外部情報の取り込みやすさや、SMを行う際の基準がSMエラー経験に与える影響について検討するために、第4章・第3節のデータに基づいて、SMエラーと解離性体験との関連性について考察を行った。その結果、両者の間に関連性が認められたことから、解離性傾向が高い者ほど外的に獲得された情報を自己概念に統合しやすく、さらに、SMを行う際の基準が寛容なものであるために、SMエラーを経験しやすいと考えられた。この知見は、知覚に由来する記憶に対して非現実感が伴うという解離性障害の者が示す症状と一致するもので、知覚に由来する記憶が内的に獲得された記憶と同じ記憶痕跡の特徴をもつものであると主観的に判断されてしまうために、知覚に由来する記憶であっても非現実感が伴うということを示唆するものであった。

さらに、内的に獲得された記憶に知覚的詳細が伴うことが、SMエラーに与える影響を調べるために、第4節と第5節では物体の色や形について鮮明な視覚イメージを体験することができる能力とSMエラーとの関連性について検討を行った。その結果、両者の間に関連性が認められた。この知見は、解離性障害の者が示す症状のうち、思考や想像したことにより内的に獲得された記憶には現実感が伴うというものと一致するものであると考えられた。このことから、解離性障害の者は、鮮明な視覚イメージを体験することができる処理スタイルが優位であるため、内的に獲得された記憶であっても知覚的詳細が伴い、外的に獲得されたものである勘違いしてしまうSMエラーが経験されるということが示された。

第6節と第7節ではSMエラーを規定する要因のうち、想起時の要因について検討を行った。まず、外的な促しがなく想起されることがSMエラー経験に与える影響について検討するために、無意図的想起経験とSMエラー経験との関連性について検討した。その結果、両者の間に関連性が認められた。このことから、無意図的想起が高頻度で経験される高い者ほどSMエラーを経験すると考えられた。さらに、自らの思考や行為に対して疑念を抱いたり、脅威や危険を未然に防ごうとするための記憶行動がSMエラー経験に与える影響

を調べるために、第7節では、強迫神経症傾向とSMエラー経験との関連性について検討した。その結果、強迫神経症傾向のうち自らの記憶や思考への疑惑や確認行為と、SMエラー経験との関連性が認められた。この結果は、SMエラーを頻繁に経験しているという自己評価が、自分はSMエラーを犯しているのではないかという疑念や、SMエラーを未然に防止するための確認行為を発生させてしまうと考えられた。これらのことから、無意図的想起が高頻度で経験される者ほどSMエラーを経験しやすいため、自らの思考や記憶への疑惑や確認行為を発生させてしまうのではないかと考えられた。

## 第6章 実際のソース・モニタリング・エラーを規定する要因 に関する実験室的記憶研究

### 第1節 記録時に自発的に処理される視覚イメージが与える影響<sup>24</sup>

第6章の目的は、日常生活場面において発生するSMエラーの規定因のうち、日常記憶研究法によって検討困難だと考えられるものについて、実験的記憶研究法を用いて検討を加えることである。

実験室的記憶研究法による従来のSM研究では、“雨が降っている”という出来事を記録させたい場合、その映像のみを視覚呈示するように、1つの事象に対して1つのソースを割り当てるという実験手続きを採用してきた。Henkel & Franklin(1998)は、実験条件で刺激の類似度がSMエラーに与える影響について検討するために、視覚呈示された線画(眼鏡)と呈示された言語ラベルから視覚的にイメージさせたもの(ロリポップ・キャンディ)とが知覚的に似ている条件や、視覚呈示された線画(ワイシャツ)と言語ラベルから視覚的にイメージさせた線画(ズボン)との意味(衣服)が似ている条件におけるSMエラーの割合を比較した。その結果、視覚イメージに由来する記憶であっても知覚に由来するものであると判断されるSMエラー率が、意味が似ている条件よりも知覚的に似ている条件の方が有意に上回っていた。この結果は、想像に由来する記憶を対象としたSMを遂行する際、それぞれ異なるソースに由来する記憶であっても、知覚的に似ている他の記憶痕跡の特徴も連想的に想起されたためにSMエラーが発生したと解釈された。

しかしながら、日常生活場面においては、1つの事象を1つのソースによってのみ経験するという状況ばかりではない。“雨が降っている”という事象のうち、“雨が降っている”という景色についての視覚的なイメージを生成したり、また、“雨が降っている”という音声を実際に聞くことにより経験するといった事態も想定することができるだろう。1つの事象を1つのソースにより経験する事態だけでなく、1つの事象について異なるモダリティにより経験するといった事態も日常生活場面においては数多く存在するだろう。そのような、日常生活場面に比較的近い事態をシミュレートした実験が、Henkel et al.(2000)によって行われている。Henkelらは、ある事象について視覚的なイメージを生成させ、そして、同じ事象に関する音声だけを聴覚呈示した(以下、英語表記Imagined as seen and heardを省略してIS & H条件と呼ぶ。それ以外の条件の英語表記とその略記については表5を参照)。IS & H条件では、ある事象について2回経験しているという経験回数についての要因と、視覚や聴覚といったモダリティについての要因とが交絡している。そのため、Henkel et al.(2000)

<sup>24</sup>第1節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子 (2005). 記録時に喚起された視覚イメージが現実とイメージ判断に及ぼす影響—ソース・モニタリング課題を用いて— 日本心理学会第69回大会発表論文集, 821.

中田英利子 (2006a). 自発的なイメージが現実とイメージの判断に及ぼす影響 教育科学セミナー, 37, 31-39.

により得られた知見と、Henkelら以外の従来のSM研究で得られた知見とを比較することができない。そこで、同じソースにより同じ事象を2回経験させる視覚イメージ2回条件(以下、IS & IS条件とする)と、視覚と聴覚の両方のモダリティにより事象を経験させる条件(以降、IS & IH条件と呼ぶ)を設定した。その結果、視覚呈示に由来しない記憶なのに実際に“見た”と誤判断される率(以降、“見た”誤判断)は、IS & IS条件やIS & IH条件と比較して、IS & H条件の方が有意に上回っているという結果が見出された。Henkelらは、由来するソースが異なる記憶であっても、意味情報が同じであればその記憶同士が結合されると仮定している。さらに、IS & IS条件やIS & IH条件においては、意図的にイメージを生成させるため、その記憶には認知操作情報が多く伴っている。こうした記憶は想像に由来するものであると判断されやすい(Durso & Johnson, 1980; Rabinowitz, 1990)。一方、IS & H条件においては、聴覚呈示を契機として視覚イメージが自発的に処理される。自発的に視覚イメージが生成されたことによって成立した記

表 5 記録セッションとテストセッションにおける事象数

	記録セッション		テストセッション	
	事象数	記録する 事象数	事象数	記録する 事象数
(a) 視覚イメージ+聴覚呈示条件(IS & H)	9	18	9	9
(b) 視覚イメージ条件(IS)	9	9	9	9
(c) 聽覚呈示条件(IH)	9	9	9	9
(d) 視覚イメージ+視覚イメージ条件(IS & IS)	9	18	9	9
(e) 視覚イメージ+聴覚イメージ条件(IS & IH)	9	18	9	9
(f) 聽覚イメージ条件(IH)	9	9	9	9
(g) 視覚呈示条件(S)	9	9	9	9
視覚呈示(filler)	36	36	27	27
非呈示条件(New)			18	18
合計	99	126	108	108
視覚呈示の合計	45	45	36	36
視覚イメージの合計	18	18	18	18
聴覚呈示の合計	36	45	36	36
聴覚イメージの合計	18	18	18	18
合計	117	126	108	108

注：視覚呈示=Seen(S), 視覚イメージ=Imagined as see(IS), 聴覚呈示=Hear(H), 聴覚イメージ=Imagined as hear(IH)

憶には、アクセス可能性の低い認知操作情報が伴う一方で、その知覚的詳細情報は想起されやすい。さらに、視覚イメージに由来する記憶にも知覚的詳細情報が伴う。そのため、IS & H条件において成立した記憶には、IS & IS条件やIS & IH条件と比較して、知覚的詳細情報が多く伴う。その結果、IS & IS条件やIS & IH条件における“見た”誤判断と比較して、IS & H条件におけるそれの方が有意に上回ったと解釈された(Henkel et al., 2000)。

Henkel et al.(2000)により得られた知見は興味深いが、以下の3つの難点があると考えられる。1つめは、材料の割り当て方がソースに対して固定されていたため、Henkel et al.(2000)において得られた知見が実験刺激に依存したものであった可能性を否定することができない。2つめの難点は、聴覚呈示によって視覚イメージが自発的に処理されたとしても、その処理がSMエラーに与える効果について実験的に直接検討されたものではないというものである。3つめの難点は、Henkel et al.(2000)は記録セッションから1週間後にテストセッションを実施していたため、IS & H条件における“見た”誤判断率の増大が、視覚イメージと聴覚呈示というソースの組み合わせに依るものなのか、あるいは、ソースの組み合わせと時間経過という相乗効果に依拠するものであるのかが明確ではないと考えられるというものである。

本節の目的は、1つめの難点を克服するとともに、自発的に視覚イメージを処理することが“見た”誤判断に与える効果について明らかにすることである。本節の目的を遂行するために、Henkelらの実験手続きを踏襲したうえで、方向付け課題と同時に視覚イメージの処理が求められる心的回転課題(mental rotation task)(Cooper & Shepard, 1973)を課す。心的回転課題とは、対呈示された図形がその角度とは関係なく同一のものであるかについて照合することを求めるものである。方向付け課題と同時に心的回転課題を課す条件における“見た”誤判断率と、心的回転課題を課さずに方向付け課題のみを遂行させる条件における“見た”誤判断率とを比較する。なお、3つめの難点の克服については第2節で検討するため、本節では以降詳細を記述しない。

Henkel et al.(2000)が述べているように、意味情報に基づいて複数の事象が統合され、かつ、聴覚呈示によって自発的に視覚イメージが生成されるだけでなく、自発的に視覚イメージが処理されているとすれば、以下のような仮説が考えられるだろう。心的回転課題なし条件においては、Henkel et al.(2000)と同様に、IS & H条件における“見た”誤判断率が、IS & IS条件とIS & IH条件のそれよりも上回ると予測された。聴覚呈示が含まれるIS & H条件においては自発的に視覚イメージが処理されるため、IS & IS条件とIS & IH条件と比較して、知覚的詳細情報が多く伴うだろう。そのため、心的回転課題なし条件においては、IS & H条件の“見た”誤判断がIS & IS条件やIS & IH条件のそれよりも上回るだろう。心的回転課題あり条件において、IS & H条件の“見た”誤判断率は、IS & IS条件とIS & IH条件のそれよりも下回ると予測される。なぜなら、心的回転課題によって聴覚呈示に起因する自発的な視覚イメージの処理が抑制されると考えられるからである。その結果として、心的回転課題の有無とソース条件との間には交

互作用が認められると予測される。

## 方法

**実験計画** 2(心的回転課題：あり，なし)×8(ソース：IS & H条件，視覚イメージ条件，聴覚呈示条件，IS & IS条件，IS & IH条件，聴覚イメージ条件，視覚呈示条件，非呈示条件)の2要因計画であった(以降，視覚イメージ条件をIS条件，聴覚呈示条件をH条件，聴覚イメージ条件をIH条件，視覚呈示条件をS条件，非呈示条件とN条件と呼ぶ)。&を含む条件では，ラベルが同じである材料を2回記録した。心的回転課題の有無のみが参加者間要因で，ソースの要因は参加者内要因であった。

**実験対象者** 心的回転課題あり条件と心的回転課題なし条件とに大学生を9名ずつ無作為に振り分けた。

**刺激** 記録材料はHenkel et al.(2000)と同様に動画を呈示した。テレビドラマ『古畑任三郎』シリーズ全15巻(形式：VHS，販売元：ポニーキャニオン)から明確な視覚的情報と聴覚的情報を同時に含む117事象を選択し，1事象当たり6秒間に編集したものを使用した。事象を選択した基準は，事象に含まれる視覚的情報あるいは聴覚的情報のどちらかだけでも，その事象に該当する言語ラベルを同定することができるというものであった。例えば，“雨が降っている”という事象の場合，雨が降っている風景という視覚的情報，あるいは，ザーーという雨が降る聴覚的情報のどちらかだけでも“雨が降っている”という言語ラベルの事象であるということが分かるように選択した。事象をより同定しやすいよう言語ラベルを作成し，言語ラベルの表現は全て“—している”という文末で統一した。

記録セッションにおいて，フィラー項目36項目，N条件を除いた7条件×9項目=63項目，計99項目を実験協力者ごとにランダムに振り分けた。IS & H条件，IS & IS条件，IS & IH条件においては，ある事象の1回目の呈示と2回目の呈示との間に他の20事象以上を呈示した。ソースの順番もランダムに振り分けた。テストセッションにおいて，N条件から18項目，フィラー項目から27項目，それ以外の7条件×9項目=63項目の計108項目を参加者ごとにランダムに振り分けた。

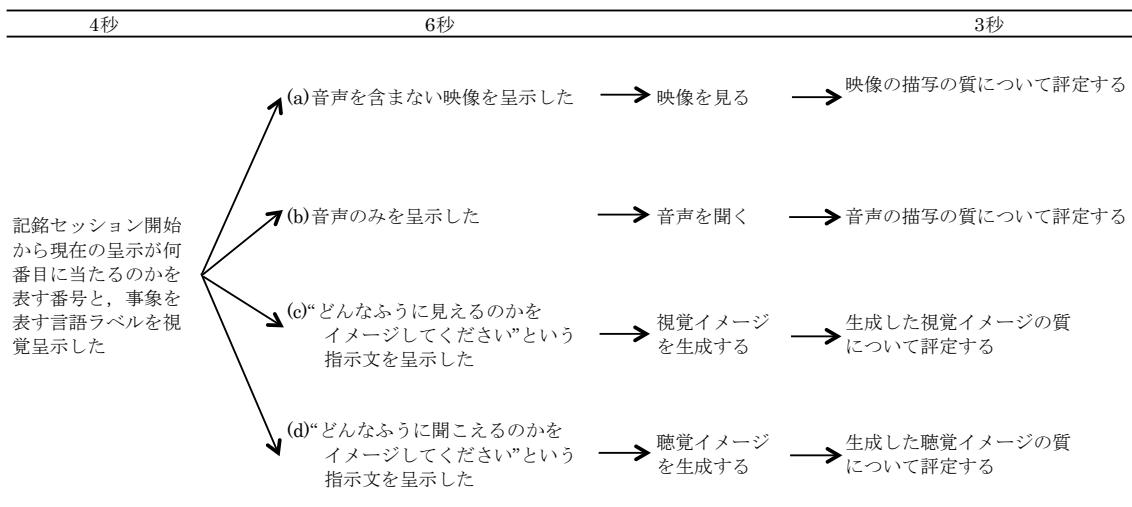
Cooper & Shepard(1973)と同様の方法を用いて心的回転課題で使用する正立文字と鏡映文字を作成した。作成した正立文字と鏡映文字を付録10に示す。アラビア数字とアルファベットを含む6種類の文字(2, 5, 7, G, J, R)について正立文字と鏡映文字とを計16種類作成した。それぞれの文字を0°から60°ずつ時計周りで300°まで回転させて計72種類の文字を作成した。そして，72種類の文字の周囲を丸で囲んだ。72種類の文字を記録セッションにおける126試行においてランダムに1回あるいは2回呈示した。

**装置** パーソナルコンピューター(SONY VAIO コンピューターV-RX52)の17インチカラーモニター(SONY MODEL：HMD-A200)にMicrosoft Visual Basic 6.0で呈示した。

**手続き** 本節の実験手続きは記録セッションとテストセッションから構成されていた。研究への参加依頼は実験者が個別に依頼した。実験へ参加する際には、人間の認知メカニズムに関する2つの独立した実験を実施していること、それぞれの実験の日程と実験に要する時間と説明したうえで、2つの実験に参加可能であること、実験のデータは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、参加は自由意志に基づくものであり強制ではないことを教示した上で、実験への参加を依頼した。

記録セッションとテストセッションのどちらも個別実験であった。心的回転課題あり条件と心的回転課題なし条件とでは、心的回転課題のあり・なし以外は全て同じ手続きを採用した。本節の基本的な手続きについては表6に示した。現在の呈示が記録セッショ

表 6 Henkel et al.(2000)における記録セッションの基本的な手続き



ン開始から何番目に当たるのかを表す番号(1.-126.)と言語ラベルをモニターに呈示した。4秒後に番号と言語ラベルは画面から消え、表 6の(a)音声なしの映像、(b)音声のみ、(c)視覚イメージ指示文(“どんなふうに見えるのかをイメージしてください”)、(d)聴覚イメージ指示文(“どんなふうに聞こえるのかをイメージしてください”)のいずれかをランダムに呈示した。(a)か(b)の場合には呈示されたものを知覚し、(c)か(d)の場合には指示文に従うよう求めた。6秒後に呈示していたものを消失させ、ブランクを3秒間挿入した。この間に動画、音声、自分のイメージの描写について評定(3段階：“うまかった”，“まあまあだった”，“へただった”)するよう教示した。これを126回繰り返した。フィラー項目は(a)の視覚提示の手続きを用いて記録させた。

心的回転課題を遂行するタイミングは、表 6(a)から(d)が呈示されている6秒間であった。冊子には、3種類のアラビア数字(2, 5, 7)と3種類の大文字のアルファベット(G, J, R)を含む計6種類の文字のそれぞれについて、正立文字と鏡文字のどちらであるのかを

判断し、選択肢に○を記入するよう求めた。ただし、それぞれの文字について0°から300°まで60°ずつ時計周りで6種類の傾きで印刷されているということと、記録セッション126試行において、72種類の文字が1回あるいは2回ランダムに表示されるということも告げた。そして、3秒間のブランクでは、動画、音声、自分のイメージの描写の質について評定させる方向付け課題を遂行するよう求めた。これを126回繰り返した。

記録セッションから1週間後にテストセッションを実施した。テストセッションの始めに、ソース(“見た”，“聴いた”，“視覚イメージをした”，“聴覚イメージをした”，“新項目”)を選択肢として印刷した冊子を配布した。現在の表示がテストセッションの開始から何番目に当たるのかを表す番号と言語ラベルを6秒間表示した。6秒間に言語ラベルが表す事象をいかなるソースにより記録したかについて想起し、選択肢に○印を記入するよう求めた。複数回答も可能であることも告げた。

## 結果と考察

実験で使用された刺激を熟知していたと報告した者や、刺激のソースについての回答を求められるテストの予期をしていたと報告した者はいなかったため、全てのデータを分析対象とした。

分析方法は、Henkel et al.(2000)と同様の方法を採用した。反応率は、各ソースに対してなされた“見た”，“聴いた”，“視覚イメージをした”，“聴覚イメージをした”，“新項目”という反応数を各ソースの項目数で除して、算出した。(1)心的回転課題を課すことにより自発的な視覚イメージの処理が抑制されるために、“見た”誤判断率は減少するのか否かに関する仮説を検証するために、視覚表示されたものではなかったはずなのに実際に“見た”と誤判断した割合について検討する。ただし、“見た”という判断が正答となる視覚表示条件における反応率は分析対象から除外した。(2)(1)における“見た”誤判断率が事象を忘却したために、実験参加者がランダムに反応したことによるバイアスに依るものである可能性が高いことについて検討するために，“新項目”であると誤判断した割合についても検討した(以下，“新項目”誤判断とする)。ただし、“新項目”であるという判断が正答となるN条件における反応率は分析対象から除いた。

**“見た”誤判断率** 心的回転課題の有無ごとに各ソースにおける“見た”誤判断率を図2に示す。心的回転課題のあり・なしと“見た”誤判断率との関係性について調べるために、心的回転課題(2)×ソース(7)の実験参加者間の2要因分散分析を行った。その結果、心的回転課題の主効果( $F(1, 96) = 4.68, p < .05$ )が有意であり、心的回転課題なし条件(0.19)が心的回転課題あり条件(0.13)よりも有意に上回っていた。ソースの主効果( $F(1, 96) = 3.74, p < .05$ )に有意差は見られたが、交互作用は見られなかった( $F(1, 96) = 1.55, n.s.$ )。記録条件の主効果が有意であったので、Tukey法による多重比較を行った(以下、有意水準は全て5%以上とする)。その結果、IS条件(0.24)と比較してIS & H条件(0.31)が有意に上回っており、IS & H条件はIS & IS条件(0.16)より有意に上回っていた。H条件(0.18)とIS & IH条件(0.19)は、

N条件(0.09)よりも有意に上回っていた。

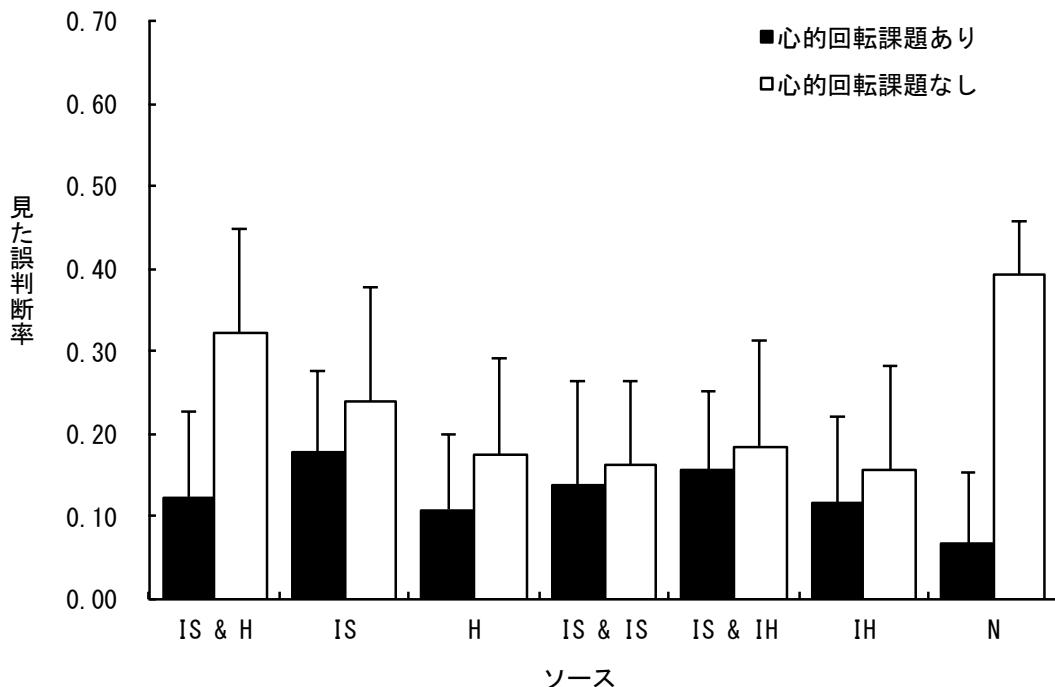


図2 心的回転課題あり・なしごとの“見た”誤判断率

本節では、心的回転課題なし条件において、IS & H条件がIS & IS条件やIS & IH条件よりも上回るという有意差が認められるという結果が得られた。この結果は、Henkel et al.(2000)において得られた知見と同様のものであった。したがって、本節で行った実験操作が妥当なものであったと考えられるということができる。

本節では、心的回転課題あり条件における“見た”誤判断率よりも、心的回転課題なし条件におけるそれが上回ることにより交互作用が認められるという結果が得られた。本節で得られた結果は、心的回転課題なし条件においてIS & H条件における“見た”誤判断率が、IS & IS条件とIS & IH条件のそれよりも上回り、心的回転課題あり条件においては、IS & H条件の“見た”誤判断率がIS & IS条件とIS & IH条件のそれよりも下回るという仮説を部分的に支持するものであった。本節で得られた結果は、IS & H条件やH条件といった聴覚表示を含むもののみならず、全てのソースにおいて自発的に視覚イメージが処理されており、その処理が“見た”誤判断率を増大させていた可能性が高いということが示唆されたと考えられる。したがって、Henkel et al.(2000)の言うように、聴覚表示によって自発的に視覚イメージが処理されることが、IS & H条件における“見た”誤判断率を増大させる一因になりうるということが実証的に確認することができたと言

えるだろう。

なぜ視覚イメージを自発的に処理することが“見た”誤判断を増大させるのだろうか。視覚的なイメージを処理する際に、認知操作情報と視覚的詳細情報とが成立する。視覚的詳細情報や認知操作情報を多く伴う記憶痕跡は、想像に由来する記憶であっても実際の知覚に由来するものであると判断されやすい。そのため、IS & H条件においては“見た”誤判断率が増大したと考えられる。

**“新項目”誤判断率** “見た”誤判断率の生起が忘却したために対象者がランダムに回答したことによる起因するバイアスに依拠する可能性が高いことについて調べるために、心的回転課題(2)×ソース(7)の実験対象者間の2要因分散分析を行った。その結果、心的回転課題なし(0.19)が心的回転課題あり(0.13)よりも有意に上回るという心的回転課題の主効果( $F(1, 96) = 4.68, p < .05$ )が認められた。ソースの主効果( $F(1, 96) = 3.74, p < .05$ )も有意であったが、交互作用は有意ではなかった( $F(1, 96) = 1.55, n.s.$ )。ソースの主効果が有意だったので、Tukey法による多重比較を行った(以下、有意水準は全て5%とする)。その結果、IH条件の“新項目”誤判断率(0.36)はH条件のそれ(0.22)よりも上回るという有意差が認められた。また、IS条件の“新項目”誤判断率(0.27)はIS & IS条件のそれ(0.17)よりも上回るという有意差も認められたが、S条件(0.19)、IS & IS条件、IS & H条件(0.13)、IS & IH条件(0.17)の間には有意差は見出されなかった。

心的回転課題あり条件におけるIS & H条件の“見た”誤判断率は、忘却されたためにランダムに“見た”と誤判断されたことに起因する反応バイアスによるものである可能性が高いのだろうか。もし、心的回転課題あり条件におけるIS & H条件の“見た”誤判断が、実験対象者の反応バイアスに起因するものである可能性が高いのであれば、IS & H条件の“新項目”誤判断率が他の条件と比較して上回るという有意差が認められるはずである。しかし、本節において得られた結果によると、IS & H条件の“新項目”誤判断率は、IH条件やH条件やIS条件よりも下回るという有意差が認められた。また、事象を1回だけ経験するIS条件における“新項目”誤判断率と事象を2回経験するIS & IS条件における“新項目”誤判断率とでは、後者の方が下回ったことから、事象を2回経験することにより事象が忘却される可能性は低くなると考えられる。さらに、経験する回数が2回である条件間には有意差が認められなかったことから、忘却がソースの組み合わせに依拠する可能性も低いと考えられる。したがって、心的回転課題あり条件におけるIS & H条件の“見た”誤判断率は、反応バイアスに依るものである可能性は低いと考えられる。

本節では、記録時の聴覚表示を契機とした自発的な視覚イメージの処理が、検索時の“見た”誤判断に与える影響について検討した。その結果、記録時に視覚イメージが処理されていたのはH条件やIS & H条件を含めた全ての条件においてであることが示された。IS & H条件において発生する“見た”誤判断率が、他の条件のそれよりも有意に上回る理由は、聴覚表示を契機とした自発的な視覚イメージの処理であることも一因であるということが示唆されたと言えるだろう。次節では、記録からテストまでの保持期間

が“見た”誤判断に与える影響について検討する。

## 第2節 記銘からテストまでの保持期間が与える影響<sup>25</sup>

前節では、Henkel et al.(2000)により得られた知見は興味深いが、3つの難点が考えられることを指摘した。そのうち2つについては前節において克服を行った。本節の目的は、残る1つの難点、つまり、Henkel et al.(2000)においてはテストセッションを実施するタイミングが記銘セッションから1週間後であったため、IS & H条件における“見た”誤判断率の増大が、自発的に視覚イメージを処理したことと聴覚呈示というソースの組み合わせに依るのか、あるいは、ソースの組み合わせと時間経過という相乗効果に依拠するものであるのかが明確ではないという問題についての検討を行う。そのため、Henkel et al.(2000)の手続きを踏襲しながら、記銘直後にテストセッションを実施した場合の“見た”誤判断率と、記銘セッション実施から1週間後にテストした場合における“見た”誤判断率とを比較を行う。

記銘セッションの直後にテストセッションを実施した場合、IS & H条件、IS & IS条件、IS & IH条件のいずれにおいても記憶痕跡の特徴は保持されていると考えられる。そのため、意味情報に基づいて事象が統合されていたとしても、個々のソースを正しく区別することができるのではないかと考えられる。その結果、IS & H条件、IS & IS条件、IS & IH条件におけるそれぞれの“見た”誤判断率には有意な差が認められないと予測される。記銘セッションから1週間経過した後にテストセッションを実施した場合においては、Henkelらが解釈した理由に基づいて、IS & H条件の“見た”誤判断率は、IS & IS条件やIS & IH条件における“見た”誤判断率よりも有意に上回ると考えられる。その結果、保持期間と記銘条件間には交互作用が見られると予測される。

### 方法

**実験計画** 2(保持期間：なし、1週間)×8(ソース：IS & H条件、IS条件、H条件、IS & IS条件、IS & IH条件、HI条件、S条件、N条件)の2要因計画であった。保持期間の要因が参加者間要因で、ソースの要因は実験対象者内要因であった。

**実験対象者** 大学生、大学院生30名を保持期間なし条件と1週間後条件に15名ずつランダムに分けた。

**実験刺激** 第6章・第1節と同様のものを用いた。

**実験装置** 第6章・第1節と同様のもので刺激を呈示した。

---

<sup>25</sup> 第2節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子 (2002). 現実とイメージを混乱させる要因の検討—ソース・モニタリング・パラダイムを用いて— 日本心理学会第66回大会発表論文集, 662.

中田英利子 (2008a). ソース・モニタリング課題における誤判断に関する検討 哲学論集, 54, 学会活動報告 大谷大学哲学会秋季研究会, 102.

中田英利子 (2008e). ソース・モニタリング課題における誤判断に関する検討—知覚とイメージにより記銘した事象間のクロスモーダルな誤判断について— 基礎心理学研究, 27, 21-25.

**手続き** 研究への参加依頼は実験者が個別に依頼した。実験へ参加する際には、人間の認知メカニズムに関する2つの独立した実験を実施していること、実験の日程と実験に要する時間と説明したうえで、2つの実験に参加可能であること、実験のデータは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、参加は自由意志に基づくものであり強制ではないことを教示した上で、実験への参加を依頼した。

本節の実験手続きは記録セッションとテストセッションから構成されていた。保持期間、材料、材料の配置以外の手続きはHenkel et al. (2000)に基づいており、直後条件と1週間後条件とでは保持期間以外全て同じ手続きを採用して行った。

## 結果と考察

テストセッション終了後に、ソースに関するテストを予期したか否かをたずねたが、予期した参加者はいなかつたため、全てのデータを分析対象とした。分析対象は、N条件を含む全ての条件の反応率であった。分析は、第1節と同様の方法を採用して行った。(1)時間経過に伴う記憶痕跡の特徴の差が“見た”誤判断率に影響を及ぼすという仮説を検証するため、直後条件と1週間後条件におけるそれぞれの“見た”誤判断率を比較した。ただし、“見た”という判断が正答となるS条件の反応については分析対象から除外した。(2)IS & H条件における“見た”誤判断が忘却による反応バイアスに依拠するものではなく、ソースの組み合わせに依るものである可能性が高いということを検証するため、“新項目”誤判断率についても分析した。ただし、“新項目”という判断が正答となるN条件の反応は分析対象から除外した。

**“見た”誤判断率** 直後条件と1週間条件における“見た”誤判断率を図3に示した。保持期間(2)×ソース(7)の実験対象者間の2要因分散分析を行った。その結果、保持期間の主効果( $F(1, 168) = 89.05, p < .01$ )、ソースの主効果( $F(6, 168) = 5.72, p < .05$ )、交互作用( $F(6, 168) = 2.28, p < .01$ )が有意であった。保持期間によりソースの効果が異なるのかどうかについて検討するために、下位検定を行った。その結果、1週間後条件においてソースの単純主効果は有意であった( $F(6, 168) = 7.24, p < .01$ )。1週間後条件における“見た”誤判断率についてTukey法による多重比較を行った(有意水準は全て5%)。その結果、IS & H条件の“見た”誤判断率(0.36)が他の条件より有意に上回っていた。H条件(0.29)、IS条件(0.26)、IS & IS条件(0.25)は、IS & IH条件(0.23)より有意に上回っており、IS & IH条件はIH条件(0.19)より有意に上回っていた。IH条件を除く5条件がN条件(0.14)より有意に上回っていた。

本節の結果によると、直後条件におけるソース条件間には有意な差が認められなかつたが、1週間後条件においてはIS & H条件がIS & IS条件やIS & IH条件よりも上回るという有意差が認められた。1週間後条件において得られた知見は、Henkel et al.(2000)で得られた知見と同様のものであった。したがって、本節で行った実験操作が妥当なものであったと言えるということが示された。

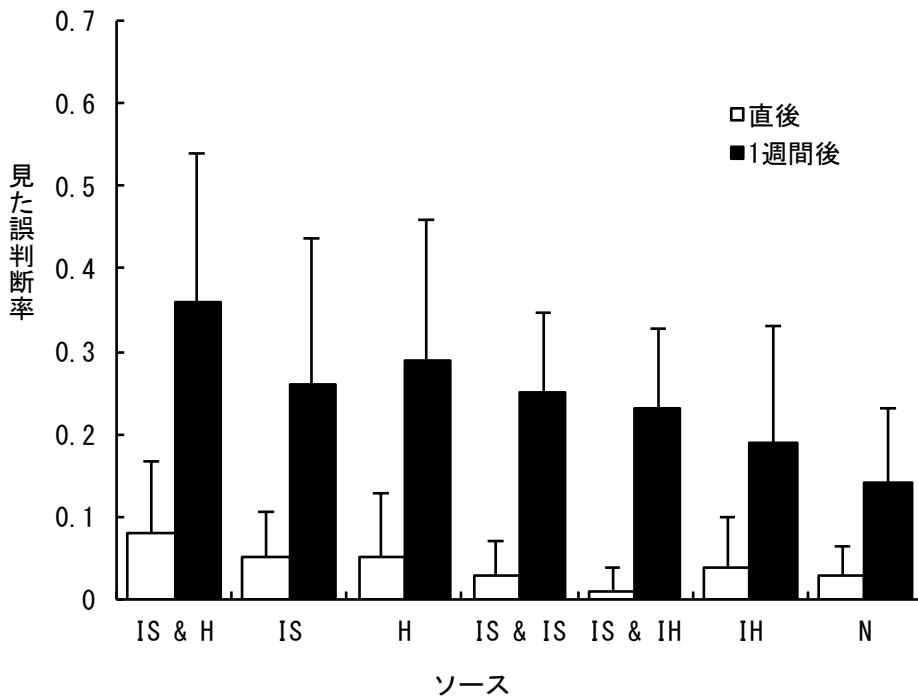


図3 保持期間ごとの“見た”誤判断率

一方、直後条件においてはソース間に有意な差が認められなかったという結果は、Henkel et al.(2000)で得られなかつた知見であり、新しい知見であると言えるだろう。以下では、直後条件においてはソース間に有意な差が認められず、1週間後条件においてIS & H条件の“見た”誤判断率がIS & IS条件やIS & IH条件よりも上回るという有意差が認められた理由について述べる。記録セッション直後において、2つの事象が意味的に統合されていたとしても、全ての条件において記憶痕跡の特徴が保持されていたため、正しくソースを判断することができたと考えることができる。1週間後条件においては、IS & IS条件やIS & IH条件では認知操作情報が多く記録されると考えられる。Johnson et al.(1993)によると、認知操作情報は知覚的詳細情報と比較して忘却されにくく、ソースを判断するために有効な手がかり情報である。そのため、2つの事象が意味的に統合されていたとしても、ソースを区別することができたと考えられる。その結果、IS & IS条件やIS & IH条件において“見た”誤判断率は生じしなかつたのかもしれない。IS & H条件においては、聴覚呈示によって自発的に視覚イメージが処理されると考えられている(Henkel et al., 2000)。自発的に視覚イメージが処理される過程において成立する認知操作情報は、意識的に視覚イメージが処理される過程において成立する認知操作情報と比べて、時間経過にしたがってアクセス可能性が低くなると考えられている(Henkel et al., 2000)。そのため、視覚イメージに伴う視覚的詳細情報だけが想起されやすくなつ

た。そして、2つの事象が意味的に統合されていた場合には両者を弁別することが困難となり、IS & H条件では“見た”誤判断が増大した。その結果、1週間後条件においてIS & H条件の“見た”誤判断率がIS & IS条件やIS & IH条件より有意に上回ったと考えられる。

記録回数が“見た”誤判断に与える影響について検討するために、IS条件やH条件と、IS & H条件を比較する。直後条件においては、IS条件とIS & H条件、H条件とIS & H条件とでは“見た”誤判断率に差が見られなかった。1週間後条件では、IS & H条件の“見た”誤判断がIS条件やH条件のそれよりも上回るという有意差が認められた。記録セッション直後においては、記憶痕跡の情報を忘却している可能性が低いため、記録回数によって“見た”誤判断率に違いは認められなかったと考えられる。しかし、記録セッションから1週間という時間経過に伴って、記録回数が1回であるよりも2回である方がソースの判断は困難になったと考えられる。したがって、記録セッションからの時間経過に伴って、記録回数によって“見た”誤判断率に差が認められたと考えられる。

**“新項目”誤判断率** 保持期間(2)×ソース(7)の実験対象者間の2要因の分散分析を行った。その結果、保持期間の主効果( $F(1, 28) = 18.78, p < .01$ )、ソースの主効果( $F(6, 168) = 12.04, p < .01$ )、交互作用( $F(6, 168) = 5.01, p < .01$ )が有意であった。保持期間におけるソースの単純主効果を検定した結果、1週間後条件においてのみ有意な差が認められた( $F(6, 168) = 16.08, p < .01$ )。1週間後条件における“新項目”と誤判断した割合についてTukey法による多重比較を行った(有意水準は全て5%)。その結果、IH条件の“新項目”誤判断率(0.38)が他の条件よりも上回るという有意差が認められた。IS条件の“新項目”誤判断率(0.27)は、H条件(0.20)よりも上回るという有意差が認められた。H条件はS条件(0.12)とIS & IH条件(0.12)よりも上回るという有意差が認められた。IS & IH条件、IS & IS条件(0.11)、IS & H条件(0.10)の間には有意な差は認められなかった。

1週間後条件におけるIS & H条件の“見た”誤判断率は、記憶痕跡の特徴を忘却してしまったために対象者がランダムに回答してしまったことに起因する反応バイアスによるものである可能性が高いのだろうか。もし、対象者の反応バイアスに起因するものである可能性が高いのであれば、IS & H条件の“新項目”誤判断率が他の条件と比較して上回るという有意差が認められるはずである。しかし、本節において得られた結果によると、IS & H条件の“新項目”誤判断率は他の条件よりも下回るという有意差が認められた。また、記録回数が1回である条件よりも2回である条件の方が“新項目”誤判断率は有意に下回ったことから、記録回数が2回である条件において事象が忘却されるという可能性は低いと考えられる。さらに、記録回数が2回である条件間に有意な差が認められなかつたことから、忘却がソースの組み合わせに依拠する可能性は低いと考えられる。したがって、1週間後条件において、IS & H条件の“見た”誤判断率は、記憶痕跡の特徴を忘却してしまったことによる反応バイアスに依拠する可能性は低いと言えるだろう。

記録回数が1回である条件では、知覚した場合よりもイメージした場合の方が忘却されるという知見が得られた。本節で得られたこの知見は、イメージにより記録した場合よりも知覚により記録した場合の方が忘却されるというGoff & Roediger(1998), Henkel

& Franklin (1998), Johnson & Raye(1981)において得られたものとは異なっている。彼らの研究では単語、行為文、線画などの静止画を記録させていたが、本節では映像や音声を使用した。そのため、それらの研究で得られた知見と本節で得られた知見とが乖離した可能性がある。SMFにおいては、記録材料の量・質がSMに影響することはあまり考慮されていない。刺激として映像を採用したSM研究は本節とHenkel et al.(2000)による研究しか見当たらないため、刺激の種類によってソースの誤判断率パターンにいかなる相違が認められるのかについては今後の検討を要する。

本節では、Henkel et al.(2000)の実験手続きを踏襲しながら、記録直後にテストした場合と記録から1週間後にテストした場合における“見た”誤判断率を比較した。その結果、記録から時間が経過するに伴ってIS & IS条件やIS & IH条件と比較して、IS & H条件の“見た”誤判断率が上回るという有意差が認められた。この結果から、由来するソースが異なる記憶であっても、意味情報が同じであれば、時間経過に伴って想像に由来する記憶と知覚に由来する記憶との弁別が困難になるため、想像に由来する記憶を実際の知覚に由来するものであると判断されるということが示された。次節では、テスト刺激の種類がSMに与える効果について検討する。

### 第3節 テスト刺激が与える影響<sup>26</sup>

前節では、Henkel et al.(2000)における3つの難点のうち、残る1つについての克服を行った。すなわち、記録からテストまでの保持時間を操作することによって、IS & H 条件における“見た”誤判断率の増大が、記録からテストまでの保持期間中に認知操作情報の利用可能性が低減するため、複数のソースに由来する記憶であってもそれらのソースを弁別することが困難になったためであると解釈された。本節では、記録からテストまでの時間経過により利用可能性の低減した記憶痕跡の特徴が、どのような条件においても想起困難である可能性が高いことについての検討を行う。

前節では記録刺激として映像や音声を呈示したが、その他の過去のSM研究では、単語(e.g., Johnson et al., 1981), 言語ラベルと線画(e.g., Henkel & Franklin, 1998), 写真と文章(Intraub & Hoffman, 1992), 実演された行為と想像しただけの行為(e.g., Garry et al., 1996)など、様々な種類の刺激を記録時に呈示してきた。それは、記録刺激の種類によって成立する記憶痕跡の特徴が異なり、そのことがSM成績に影響を与えるということが想定されているからであると考えられる。こうした研究は記録刺激の種類とSM成績との対応関係について明らかにしてきたという点において有意義なものであると考えられる。

ただし、これらの大半の研究では様々な種類の刺激を記録させていたとしても、テスト時に呈示していたものは言語ラベルのみであったという点に注意が必要である。その数は限定されているものの、記録刺激のみがSM成績に影響を与えるのではなく、テスト刺激やその呈示方法と、記録材料とその呈示方法との一致・不一致がSMに及ぼすということが報告されているからである(Dodson & Shimamura, 2000; 畠中・藤田, 2004; Leynes et al., 2003; Senkfor, Van Petten, 1998)。Dodson & Shimamura(2000)は、テスト刺激がSMに与える効果を検討するために、記録セッションにおいて男声あるいは女声により名詞を聴覚呈示した。テストセッションでは、その2種類のうちどちらかの声で刺激を呈示し、記録セッションで呈示したのが女声であったか、男声であったのかを同定するよう求めた。その結果、記録刺激を呈示した声がテスト時の声と一致する場合にはSMが促進されるが、記録刺激を呈示した声がテスト刺激を呈示した声と不一致である場合にはSMが干渉されるということを見出した。このような効果はソース一致効果(source-match effect)と呼ばれた。彼らは、テスト刺激と一致する記録刺激は活

<sup>26</sup> 第3節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子 (2006b). 記録時とテスト時の表記形態が現実とイメージの判断に及ぼす影響(1)—ソース・

モニタリング課題を用いて— 基礎心理学研究, 24, 日本基礎心理学会第24回大会発表要旨, 201.

中田英利子 (2006c). 記録時とテスト時の表記形態が現実とイメージの判断に及ぼす影響(2)—ソース・

モニタリング課題を用いて— 日本心理学会第70回大会発表論文集, 874.

中田英利子 (2008b). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵刺激の効果 文学部心理学論集, 2, 53-62.

中田英利子 (2008d). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵刺激の効果(3) 日本心理学会第72回大会発表論文集, 861.

性化されるため、SMが正しく行われるが、テスト刺激と不一致である記銘刺激は不適切な活性化が行われるため、SMが干渉されると解釈した。

また、日常生活場面においてもテスト刺激が常に言語ラベルであるとは限らないであろう。具体的には、書店にある本を見つけた際に、この本はすでに購入したものか否か、すでに購入したものであるとすれば、自宅の何処に保管していたかと考える場合や、家族写真を眺めながら、その写真がいつ、どこで撮影されたものであるかを思い出す場合が挙げられるだろう。このように、日常生活場面において言語ラベル以外にも対象物、行為、線画などの様々なものがテスト刺激となりうる状況を多数想定することができる。言語ラベル以外のテスト刺激では、正常にSMをなすことができないのであれば、同じ書籍を複数冊も購入してしまうことによる経済的損失や、既に行つたことがある場所へ家族と繰り返し旅行してしまうことによって日常生活が破綻してしまうかもしれない。そのため、テスト刺激がSMに与える影響について解明することは、こうした損失を防ぎ、適応的な日常生活を送るために重要な研究課題であると考えられる。

しかしながら、テスト刺激の種類がSMに及ぼす影響についてのデータの蓄積が満足できるものであるとは言い難いのが現状である。線画を記銘刺激とした研究は認められるものの(e.g., Henkel & Franklin, 1998), 全て言語ラベルによるテストが行われており、線画をテスト刺激とした研究は認められない。そのため、線画でテストすることがSMの成績に及ぼす影響についてはまだ解明されていないのである。

そこで本節では、テストセッションにおいて言語ラベルだけでなく、線画を呈示することにより、テスト刺激がSM課題の成績に与える影響、とりわけ、視覚に由来する記憶について実際に“見たものである”と正判断(以下，“見た”正判断)される認知メカニズムを検討することを目的とする。第1節と第2節では“見た”誤判断を検討対象とすることによって、誤判断が生起する認知メカニズムについて示すことができたと言えた。しかしながら、“見た”誤判断を正常なSMとするためには、“見た”誤判断に関わる認知メカニズムを解明するだけでなく、正常なSM自体を下支えする認知メカニズムについて明らかにしてゆくことも求められると考えられる。

以上のような本節の目的を達成するために、記銘刺激とテスト刺激との組み合わせによって次の4条件が設定された。それは、記銘時とテスト時のどちらも言語ラベルを呈示される条件、記銘時には言語ラベルを呈示されるがテスト時には線画が呈示される条件、記銘時には線画が呈示されるがテスト時には言語ラベルが呈示される条件、記銘時とテスト時ともに線画が呈示される条件である。

テスト時の声と一致する記銘情報は活性化されるためSMが促進されるが、テスト時の声と不一致である記銘情報は抑制されるためにSMは干渉されるというソース一致効果(Dodson & Shimamura, 2000)の考えに従い、以下の結果が予測される。言語ラベルでテストした場合、線画を記銘させた場合よりも、言語ラベルを記銘させた場合の方が記憶痕跡の特徴が活性化されるために“見た”正判断率が上回ると予測される。また、線画でテストした場合には、言語ラベルを記銘させた場合よりも、線画を記銘させた場

合の方が記憶痕跡の特徴が活性化するために“見た”正判断率が上回ると予測される。その結果、記銘刺激とテスト刺激の間に交互作用が認められると予測された。

## 方法

**実験計画** 3(ソース：視覚呈示、視覚イメージ生成、新項目)×2(記銘材料：言語ラベル、線画)×2(テスト材料：言語ラベル、線画)の3要因計画であった。全て実験対象者内要因であった。

**実験対象者** 大学生13名であった。対象者のうち男性は6名で平均年齢は22歳( $SD = 2$ , 範囲：20-25), 女性は7名で平均年齢は22歳( $SD = 2$ , 範囲：18-24)であった。

**実験刺激** 本節で使用した線画と言語ラベルを付録11に示す。西本・安田(1982)と西本(1996)から命名一致度が高く、概念カテゴリーや知覚的詳細情報が異なることを基準に120項目を選択した。120項目を3つに分割し、視覚呈示項目、視覚イメージ生成項目、新項目にそれぞれ40項目ずつ割り当てた。

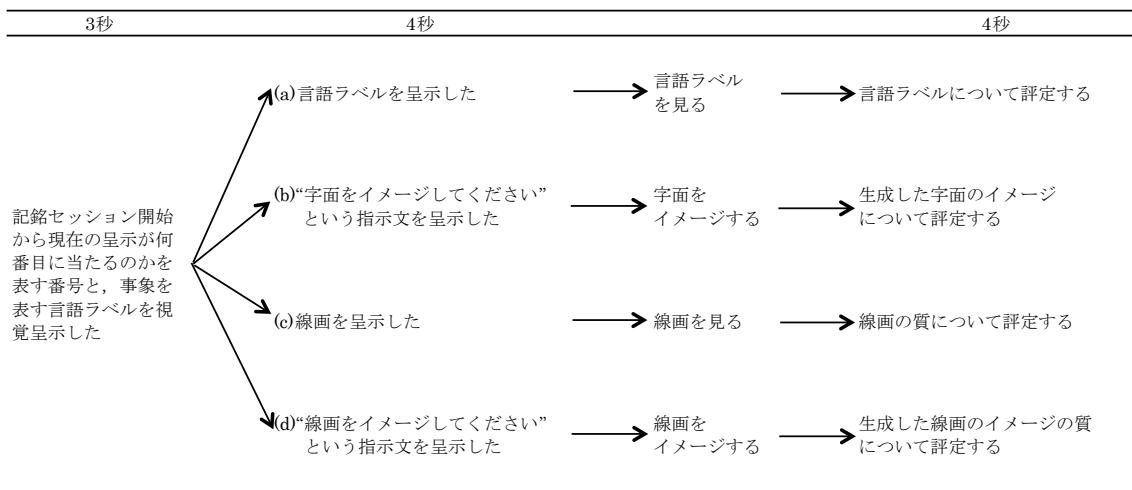
記銘セッションでは、視覚呈示項目40項目と視覚イメージ生成項目40項目がランダムな順序で1項目ずつ呈示された。

テストセッションでは、記銘セッションで呈示された視覚呈示項目40項目と視覚イメージ生成項目40項目、そして、記銘セッションでは非呈示であった40項目を新項目として加えた計120項目がランダムな順序で1項目ずつ呈示された。

**手続き** 本節の実験手続きは記銘セッションとテストセッションにより構成されていた。また、実験への参加依頼は実験者が個別に依頼した。実験へ参加する際には、人間の認知メカニズムに関する2つの独立した実験を実施していること、実験の日程と実験に要する時間と説明したうえで、2つの実験に参加可能であること、実験のデータは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、参加は自由意志に基づくものであり強制ではないことを教示した上で、実験への参加を依頼した。

記銘セッションとテストセッションのどちらも個別実験であった。本節の基本的な手続きについては表7に示した。呈示や評定のタイミングは全て実験者の合図により知らせた。最初に現在の呈示が記銘セッション開始から何番目に当たるのかを表す番号(1.-120.)と事象を表す言語ラベルとを冊子で呈示した。実験開始から3秒後に表7の(a)言語ラベル、(b)言語ラベルの字面についての視覚イメージを処理するよう求める指示文、(c)線画、(d)言語ラベルに該当する線画について視覚イメージを処理するよう指示する文のいずれかをランダムに4秒間呈示した。(a)あるいは(c)であった場合には呈示されたものを見ておくよう教示した。(b)あるいは(d)であった場合には指示文に従ったイメージを生成するよう告げた。その後、4秒間に言語ラベル、線画、自らのイメージに対して、描写の質を評定(3段階：“うまい”，“ふつう”，“へた”)し、全ての冊子の選択肢に○印を記入するよう求めた。これを80回繰り返した。記銘セッション終了後、冊子を回収した。

表7 記録セッションの手続き



記録セッションから1週間後にテストセッションを実施した。テストセッションの初めに、ソース(“見た”，“視覚イメージを生成した”，“新項目”)の印刷された冊子と、テスト刺激が印刷された冊子を配布した。まず、現在の表示がテストセッションの開始から何番目に当たるのかを表す番号と言語ラベルを3秒間表示した。次に、言語ラベルあるいは線画のどちらか一方を表示している4秒間に、そのソースを判断して、冊子の選択肢に○を記入するよう求めた。これを1試行として合計で120試行繰り返した。合図は全て実験者が行った。

## 結果と考察

テストセッション終了後、ソースに関するテストを予期したのか否かについてたずねたところ、予期した対象者はいなかった。そのため、全ての参加者からのデータを分析対象とした。

分析方法は、まず視覚表示反応、視覚イメージ生成反応、新項目反応というそれぞれの反応数をソースごとの項目数で除して、反応率を算出した。線画でテストした場合に、記録材料によってソースの正判断の割合は異なるのか否かということについて検討するために、視覚表示項目であったものを“見たものである”と正判断した割合を分析した。また、“見た”正判断が忘却したことによって参加者がランダムに反応したというバイアスに依拠するものである可能性についても検討するために、視覚表示項目であったものを新項目であったと誤判断した(以降，“新項目”誤判断)割合についても分析した。

**“見た”正判断** 記録刺激とテスト刺激との組み合わせごとに“見た”正判断率を図

4に示す。“見た”正判断率について記録刺激(2)×テスト刺激(2)の実験参加者間の2要因分散分析を行った。記録刺激の主効果( $F(1, 12) = 6.51, p < .05$ ), 交互作用( $F(1, 12) = 11.40, p < .01$ )については有意差が認められた。テスト刺激の主効果( $F(1, 12) = 0.24, n.s.$ )については有意差が認められなかった。テスト刺激における記録材料の単純主効果に関する

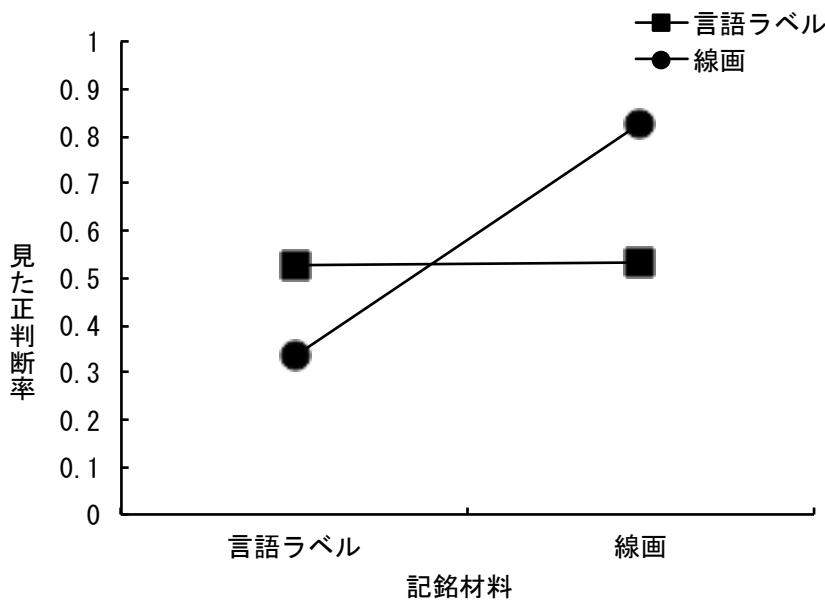


図 4 記録刺激とテスト刺激との組み合わせにおける“見た”正判断率

検定を行ったところ、言語ラベルでテストした場合には有意差は認められなかつたが( $F(1, 24) = 0.04, n.s.$ )、線画でテストした場合には言語ラベルを記録させた場合よりも線画を記録させた方が上回るという有意差が認められた( $F(1, 24) = 17.02, p < .001$ )。

以上の結果から、言語ラベルでテストした場合には記録刺激によって“見た”正判断率に有意差は認められないが、線画でテストした場合には、言語ラベルを記録させた場合よりも線画を記録させた方が“見た”正判断率が有意に上回るということが示された。本節で得られたこの結果は、言語ラベルでテストした場合には、線画よりも言語ラベルを記録させた方が“見た”正判断が上回り、線画でテストした場合には、言語ラベルよりも線画を記録させた方が“見た”正判断率が上回り、その結果として、テスト刺激と記録刺激との交互作用が認められるという仮説を部分的に支持するものであった。

本節で得られた結果によると、言語ラベルでテストした場合には、記録材料によって“見た”正判断率に違いは見られなかつた。まず、ソース一致効果(Dodson & Shimamura, 2000)の考えに依拠するならば、テスト刺激と不一致である線画についての知覚的詳細は抑制され、一致している言語ラベルの知覚的詳細情報は想起されやすいと考えられる。

言語ラベルの記憶と比較して、線画の記憶に伴う知覚的詳細が多いとするならば、テスト刺激と不一致であっても、想起される知覚的詳細は言語ラベルを記録した場合と同程度であった可能性がある。その結果として、言語ラベルでテストした場合には、記録材料によって“見た”正判断率に有意差が認められなかったと考えられる。

本節で得られた結果から、線画でテストした場合には、言語ラベルを記録させた場合よりも、線画を記録させた方が“見た”正判断率は有意に上回っていたことが示された。ソース一致効果(Dodson & Shimamura, 2000)の考えに依拠するならば、線画でテストした場合には、言語ラベルについての知覚的詳細情報が適切に活性化されないが、線画に関する知覚的詳細情報は適切に活性化される。その結果として、テスト時に線画が呈示された場合には、言語ラベルを記録させた場合よりも線画を記録させていた方が“見た”正判断率が上回っていたと解釈される。

以上の結果から、テスト時に言語ラベルが呈示された場合には記録材料の種類によって“見た”正判断率に有意差は認められなかつたが、テスト時に線画が呈示された場合には、テスト刺激と不一致である言語ラベルを記録させるよりも、一致する線画を記録させた方が“見た”正判断率が有意に上回るということが示された。この結果から、時間経過に伴って利用可能性が低減した知覚的詳細情報であっても、テスト時に言語ラベルではなく線画が与えれば、線画の記憶に伴う知覚的詳細情報が想起されるため、正しくソースと判断することができる可能性の高いことが示唆されたと言うことができる。

**“新項目”誤判断** “新項目”誤判断率について記録刺激(2)×テスト刺激(2)の実験参加者間の2要因分散分析を行った。記録刺激の主効果( $F(1, 12) = 4.55, p < .10$ )には有意傾向が認められ、交互作用( $F(1, 12) = 8.84, p < .05$ )が有意であった。テスト刺激の主効果( $F(1, 12) = 1.09, n.s.$ )は有意ではなかった。交互作用が有意であったので、テスト刺激条件における記録材料の単純主効果の検定を行ったところ、言語ラベルでテストした場合には有意差が認められず( $F(1, 24) = 0.02, n.s.$ )、線画でテストした場合には線画を記録した場合よりも言語ラベルを記録させた方が上回るという有意差が認められた( $F(1, 24) = 12.32, p < .001$ )。

以上の結果から、言語ラベルでテストした場合には記録刺激によって忘却される割合に有意な差は認められないが、線画でテストした場合には線画よりも言語ラベルを記録させた方が忘却される割合が有意に上回るということが示された。テスト刺激が線画であった場合、線画よりも言語ラベルを記録していた方が視覚呈示した事象に対して“新項目”と誤判断した割合が上回っていたことから、テスト刺激が線画であるならば線画を記録した場合における“見た”正判断率は、言語ラベルを記録した場合におけるそれよりも、忘却したことによる参加者の反応バイアスに依拠するものである可能性は低いと考えられる。

本節では、テスト刺激の種類によって想起される記憶痕跡の特徴が異なるのか否かについて検討を行うため、言語ラベルでテストした場合における“見た”正判断率と線画でテストした場合におけるそれを比較した。その結果、線画でテストした場合には、言語ラ

ベルを記銘するよりも線画を記銘していた方が“見た”正判断率が有意に上回るということが示された。この結果は、ソース一致効果(Dodson & Shimamura, 2000)の考えに依拠するならば、線画でテストした場合には言語ラベルについての知覚的詳細情報よりも線画についての知覚的詳細情報が想起されるため、言語ラベルを記銘した場合の“見た”正判断率よりも線画を記銘した場合のそれの方が有意に上回ったと解釈された。このことから、たとえ時間経過に伴って利用可能性の低減した知覚的詳細情報であっても、テスト時に言語ラベルではなく線画を呈示すれば、線画の記憶に伴う記憶痕跡の特徴が想起されるため、そのソースを正しく判断することができるという可能性が高いことについて示唆されたと言いうことができた。

#### 第4節 本章のまとめ

第6章では、日常生活場面において生起するSMエラーを規定する要因のなかでも、調査的研究により検討対象とすることが困難であると考えられたSMエラーやSMとその規定因について実験室記憶研究法により検討を加えた。

第1節と第2節では、日常生活場面において複数のソースに由来する記憶を対象としたSMも求められる状況を想定し、そうした事態をシミュレートした実験を行った。その結果、記録時の聴覚呈示を契機として行われる自発的な視覚イメージ処理や、時間経過に伴って記憶痕跡の特徴が減衰したことによって、複数のソースに由来する記憶であっても、そのソースを識別することが困難になってしまったためにSMエラーが発生してしまうということが示されたと言うことができた。

また、SMエラーを理解するためには正常なSMを下支えする認知メカニズムについて示す必要があると考えられた。そこで、第3節ではテスト時に与えられる刺激の種類によって想起される記憶痕跡の特徴の量や質に違いが認められるのか否かについての検討を行った。その結果、テスト時に線画が呈示された場合にはテスト刺激と不一致である言語ラベルよりも、一致する線画に関する記憶痕跡の特徴が適切に活性化されるため、ソースを正しく判断することができるということが示された。この結果は、時間経過に伴って利用可能性の低減した記憶痕跡の特徴であっても、テスト刺激の種類によっては想起することができる可能性が高いことを示唆するものであると言つてよい。次章では、実験室的記憶研究法によって測定されたSMエラーとRMEEQで測定されたSMエラー経験との関連性について検討を加える。

## 第7章 ソース・モニタリング・エラー経験と実際のソース・モニタリング・エラーとの関連性に関する日常記憶研究と実験室的記憶研究

### 第1節 ソース・モニタリング・エラー経験と実際のソース・モニタリング・エラーとの関連性<sup>27</sup>

本章では、実験室の課題で測定された実際のSMエラーとRMEEQで測定された日常生活場面におけるSMエラー経験との関連性について検討することを目的とする。

第4章において作成されたRMEEQは、DES(田辺, 1994)との間に有意な正の相関が認められていることから、RMEEQが一定の基準関連妥当性を有するということが確認されている。また、2週間のインターバルを置いて質問紙への回答を2度求めるこにより再検査信頼性が検討されており、RMEEQが一定の時間的安定性を有することも確認されている。これらの結果から、RMEEQがSMエラー経験を測定することができるものであることが示されたと言うことができた。しかしながら、RMEEQが専ら自己のエラー経験に関する回想的な報告に依存していることから、RMEEQ得点が単なる思い込みやバイアスを反映したものであり、実際のSMエラーとは異なるものを測定している可能性も否定することができない。

そこで、本節では回想的な報告に依る程度が低いと考えられるSMエラーの個人差の指標と、RMEEQ得点との相関について検討することにより、RMEEQで測定されているSMエラー経験と実際のRMエラーの頻度との関連性について検証することを目的とする。回想的な報告に依存する程度が低いと考えられるSMエラーの個人差の指標としては、SMエラーの発生について自ら報告する必要がないもの、または、SMエラーの発生についての報告が発生時点の直後になされるものを用いる。具体的には、SMの実験室的研究法においてしばしば用いられるSM課題における誤判断率と、日誌法により記録された日常生活場面におけるSMエラーの経験回数の2つを採用する。

RMEEQで測定されたSMエラー経験と、実験室の課題で測定されたSMエラーとの関連性を調べるための実験室の課題としては、実験のテストセッションにおいてSMを遂行させるものを採用する必要がある。前述したように、SMとは知覚に由来する記憶と、自らの思考や想像に由来する記憶とを区別する認知過程である。そのため、記録セッションにおいて項目を知覚することにより知覚的詳細情報を生じさせ、なおかつ、項目について心的操作することにより認知操作情報が生成されるような方向付け課題を採用する必要がある。そのような課題の1つとして、Marsh & Hicks(1998)はアナグラム課題

---

<sup>27</sup>第5節は次の発表の資料に基づく。

中田英利子・森田泰介 (2014b). 質問紙法と日誌法によるリアリティ・モニタリング・エラー経験の測定 日本心理学会第77回大会発表論文集, 453.

(anagram solution task)を挙げている。アナグラム課題とは，“あさいつ”的ように並べ替えられた文字列を“あいさつ”というように正しい順序に入れ替えて単語を生成するものである。Marsh & Hicks(1998)は、第1実験の統制条件に以下のようなアナグラム課題の手続きを採用した。記録セッションにおいて、文字が正しい順序で並んでいる単語を視覚表示する場合と、文字を入れ替えた単語を視覚表示して正しい順序に並べ替えて単語を生成させる場合を設定した。記録セッションの直後に、記録セッションで表示した項目と表示していない新項目とを混ぜたリストを視覚表示して、当該の単語をどのように記録したのか、あるいは、記録しなかったのかについて判断し、“見た”，“生成した”，“新項目”的ないずれかから選択するよう求めた。その結果、判断の正確さは知覚項目よりも、生成項目と新項目とが上回り、新項目に対しては生成反応よりも知覚反応が上回るというit-had-to-be-you効果<sup>28</sup>(Johnson et al., 1981)が認められた。知覚項目については生成反応よりも新項目反応が上回り、生成項目については新項目反応よりも知覚反応が上回った。Marsh & Hicks(1998)はこのようなアナグラム課題の手続きを統制条件に採用した。そのため、アナグラム課題がSMを測定するための標準的な課題であると判断し、本節でもアナグラム課題を採用した。ただし、テストセッションを実施するタイミングを変更した。Marsh & Hicks(1998)は記録セッションの直後にテストセッションを実施していたが、本節では記録セッションから1週間後にテストセッションを実施する。本節ではSMエラーを測定することが目的であるため、記録直後にテストセッションを実施した場合にSMの正答率が高くなりすぎて、天井効果の生起の可能性が予測されたからである。

上述したように、本節ではRMEEQと実際のSMエラーとの関連性について調べるために、実験室的記憶研究法に加えて、日誌法も採用する。尺度と実際のパフォーマンスとの関連性について検討するための方法として実験室的記憶研究法が挙げられるが、質問紙により自己報告された日常生活場面における記憶活動と、実験室の課題で測定された記憶活動とでは、その乖離が大きいため、質問紙のスコアと実験室の課題で測定される記憶活動との関連性が常に認められるとは限らないという問題も指摘されている(Herrmann, Sheets, Gruneberg, & Torres, 2005; Rabbitt, Maylor, McInnes, Bent, & Moore, 1995)からである。例えば、日常生活場面における記憶の失敗行動を評定する日常記憶質問紙(Everyday Memory Questionnaire: 以下、EMQとする)(Sunderland, Harris, & Baddeley, 1983)は、実験室の課題で測定された記憶成績との相関は高い場合でも.30程度、もしくは負の相関を示す場合もあることが知られている(Sunderland, Harris, & Baddeley, 1984; Sunderland, Watts, Baddeley, & Harris, 1986)。ただし、対象者により自己評定されたEMQ得点と他者評定されたEMQ得点との間に中程度の相関が見られることも報告されているため、EMQは実際の記憶行動をある程度は正確に反映している可能性も示唆されている(Sunderland et al., 1984; Sunderland et al.,

---

<sup>28</sup>第2章・第2節の脚注を参照されたい。

1986)。また、日常生活場面で経験される認知的失敗について測定するために作成された認知的失敗質問紙(Cognitive Failures Questionnaire：以下、CFQとする)(Broadbent, Cooper, Fitzgerald, & Parkes, 1982)もまた、実際の記憶パフォーマンスとの相関がほとんど見出されていない(Bexhill, 1980；Broadbent et al., 1982；Harris & Wilkins, 1981)。ただし、配偶者が対象者の記憶能力を評定したものと、対象者自身が自らの記憶能力を自己評定したものとの間には弱い相関が認められている(Broadbent et al., 1982)。これらの研究は、記憶を自己報告させる質問紙が日常生活場面において経験される認知・記憶の失敗を測定できることを示唆するものであるが、それと同時に、記憶を自己報告させる質問紙のスコアと実験室の課題成績との関連性が常に確認されるわけではないということも示唆するものである。

記憶を自己報告させる質問紙の妥当性を検討するための方法として、実験室研究法や配偶者からの評価以外には日誌法が採用されることもある。Sunderland et al.(1986)は、EMQの妥当性を検討するために、実験室研究法の他に、1週間にわたり記憶の失敗行動について自己報告するよう求めるという日誌法を採用した。その結果、日誌法による記憶の自己報告とEMQ得点との間に有意な正の相関は認められなかった。それは、調査対象者が低頻度の記憶の失敗よりも、思いつきで記憶の失敗や症状を報告する傾向があったため、分散が制限され、その結果として、自己報告された記憶の失敗と質問紙で測定された記憶の病状との間に有意な相関が認められなかつたと考えられた。Sunderland et al.(1986)の結果をふまえて、Zelinski, Gilewski, & Anthony-Bergstone(1990)は、記憶機能質問紙(Memory Functioning Questionnaire：以下、MFQとする)(Gilewski, Zelinski, & Schaie, 1990)の得点と実際の記憶の失敗との関連性について検討するために、2週間にわたり記憶の失敗と、その深刻さについて記録させるという日誌法を採用し、日誌法により測定された記憶活動からMFQ得点が予測されるという知見を得た。また、記録させた具象名詞について自由再生、再認、遅延再生という3つの方法でテストし、また、散文を記録直後に自由再生させるという実験室研究法を採用した。そして、それぞれのテストにおける記憶成績とMFQ得点との関係性について検討した結果、実験室の課題で測定されたほとんどの記憶活動からMFQ得点が予測されるという知見が示された。したがって、2週間にわたり自らの記憶の失敗について自己報告することを求めるという日誌法によって、日常生活場面において経験される記憶活動を自己報告させる質問紙のスコアが実際の記憶パフォーマンスとの関連性について確認されたと言えるだろう。

RMEEQが日常生活場面において経験されるSMエラーについて正確に測定することができる質問紙であるとすれば、RMEEQが日常的なSMエラー経験の多さを反映していたとしても、実験室の課題で測定されたSMエラーとの乖離が大きい場合には、RMEEQ得点と実験室の課題で測定されたSMエラーとの間には相関がほとんど認められない可能性も想定することができる。したがって、本節でも、RMEEQのスコアと実際のSMエラーとの関連性について検討するために、実験室研究法だけでなく、2週間にわたり

日常生活場面におけるSMエラー経験についての記録を求めるという日誌法を採用する。

質問紙フェイズでは、RMEEQのスコアと実際のSMエラーとの関連性について検討するために、RMEEQを用いて日常生活場面におけるRMエラー経験の頻度を測定する。実験フェイズでは、アナグラム課題におけるSMエラーの生起頻度を測定する。日誌フェイズでは、2週間にわたり日常生活場面において経験されるSMエラーを記録するという日誌法を実施することにより、日常生活場面におけるSMエラー経験の頻度を測定する。もし、RMEEQが日常生活場面での個人のSMエラー経験を正確に測定しているとすれば、RMEEQ得点と日誌法で測定されたSMエラー回数との間には有意な正の相関が認められるが、RMEEQ得点とアナグラム課題におけるSMエラー率や、日誌法で測定されたSMエラー回数とアナグラム課題におけるSMエラー率との間には有意な正の相関が認められないと予測される。

## 方法

### 対象者

大学生計60名が対象者であった。このうち男性は25名で平均年齢は20歳( $SD = 2$ , 範囲 : 18-26), 女性は35名で平均年齢は20歳( $SD = 1$ , 範囲 : 18-22)であった。対象者のうち、実験フェイズの記録セッションに参加しなかった9名及び日誌フェイズにおいて日誌を返却しなかった4名は分析対象から除外し、質問紙フェイズ、実験フェイズ、日誌フェイズの全フェイズに参加した47名から得られたデータのみを分析対象とした。除外後の対象者のうち男性は18名で平均年齢は20歳( $SD = 1$ , 範囲 : 18-21), 女性は29名で平均年齢は20歳( $SD = 1$ , 範囲 : 18-22)であった。

### 材料

**質問紙** 質問紙フェイズでは第4章・第2節が作成したRMEEQを使用した。

**実験刺激** 実験フェイズの刺激は、寺岡(1959)による平仮名清音4文字名詞120項目から現代における出現頻度が低いと考えられるなど適切でない可能性がある項目計12項目を除いた108項目であった。108項目の刺激語を、知覚項目、生成項目、非呈示項目にそれぞれ36項目を割りあてた。

記録セッション用冊子には知覚項目36項目と生成項目36項目がランダムな順序で18項目ずつ4枚のA4判用紙に印刷されていた。ただし生成項目のみは、刺激がアナグラムに変換されて印刷されていた。刺激をアナグラムに変換する際には、Marsh & Hicks(1998)と同様に、文字の交換パターンを第1文字と第2文字の交換、第1文字と第3文字の交換、第1文字と第4文字の交換、第2文字と第3文字の交換、第2文字と第4文字の交換、第3文字と第4文字の交換の6パターンとし、各パターンが均等に含まれるようにした。また、Marsh & Hicks(1998)と同様に、交換された文字の下には誤字記号(^)を付加した。

テストセッション用冊子には、記録セッションで呈示された知覚項目36項目と生成項

目36項目に、新たに非表示項目36項目を加えた計108項目が、ランダムな順序で18項目ずつ6枚のA4判用紙に印刷されていた。また、各項目の横には3件の選択肢(“読んだ”, “生成した”, “新項目”)が印刷されていた。なお、テストセッション用冊子においては生成項目をアナグラム変換せずに単語として表示した。

**日誌** 日誌フェイズでは第4章・第1節において使用したものと同様の日誌を使用した。日誌の冒頭のページにはSMエラーに関する説明が記されており、それ以降のページには、SMエラーの事例が10件まで記録できるようになっていた。各事例を記録するページには、SMエラーの内容、エラーに気づいたきっかけ、エラーを経験した時の心的状態、エラーに気づいた時の自分の状況、エラーを経験したおおよその年月日、エラーに気づいたおおよその年月日、日誌に記入した月日、エラーの理由として想定されるもの、その他気づいたこと、の9項目を回答することができる欄が設けられていた。

### 手続き

**手続きの概要** 本節の手続きは質問紙フェイズ、実験フェイズ、日誌フェイズから構成されていた。また、研究への参加を依頼する際には、質問紙フェイズ、実験フェイズ、日誌フェイズの全ての日程や個々の調査・実験に要する時間、全ての調査や実験に参加可能であること、調査や実験のデータは匿名化して扱われ厳重に管理されること、そして、参加は自由意志に基づくものであり強制ではないことを教示した上で、全ての調査と実験への参加に同意する者は教室に残るよう求めた。

なお、対象者の匿名性を確保しつつ全ての調査や実験のデータを照合するための手続きは第4章・第4節と同様に、山内ら(2009)の方法を採用した。これは各フェイズでの記録用紙に共通の数字(6桁の任意の数字)を記すことを求めるものであった。具体的には、質問紙フェイズでは、数字を忘れる事のないよう、携帯電話のメモ機能を使用したり手帳などを用いたりして数字を記録しておくよう求め、実験フェイズや日誌フェイズにおいては、質問紙フェイズで利用した外部記憶を参照して記録用紙に同一の数字を記すよう求めた。

**質問紙フェイズ** 調査は講義中に集団で実施された。調査用紙を配布し、RMEEQの各項目を読んで、ふだんの自分にその内容がどの程度該当するかを5件法(4：“非常によくある” -0：“まったくない”)で回答するよう求めた。

**実験フェイズ** 記録セッションとテストセッションにおける材料の呈示方法、テストセッション実施のタイミング以外、Marsh & Hicks(1998)の手続きを採用した。

質問紙フェイズ終了後、冊子を用いて集団で記録セッションを実施した。冊子に、外部記録を参照し、データ照合のための6桁の数字を記入するよう求めた。単語が正しい順序である場合には読むだけ、単語の2字の順序が交換されている場合には、交換されている文字の下に誤字記号がついているので、その2文字を正しい順序に並べ替えて読むよう教示した。実験者の合図により、1項目当たり3秒のペースで進めた。記録セッション終了後、冊子を回収した。

記録セッションから1週間後にテストセッションを実施した。冊子に、外部記録を参

照し、データ照合のための6桁の数字を記入するよう求めた。実験者の合図により1項目当たり0.5秒のペースで進めた。記録セッションで読んだだけのもの(知覚条件)、平仮名を並べ替えたもの(生成条件)、あるいは、記録セッションでは呈示されなかったもの(新項目)のうちのいずれであるのかを判断させ、選択肢に○をつけるよう求めた。テストセッション終了後、テスト用の冊子を回収した。

**日誌フェイズ** 実験フェイズ終了後、調査者が実験対象者に調査を依頼した。調査対象者には冊子を手渡し、冊子に印刷したSMとそのエラーについて口頭で説明した。次に、調査期間中に冊子を可能な限り携帯し、調査期間中に経験したSMエラーについて9項目全てに回答するよう求めた。なお、調査期間中に経験したSMエラーだけを記録してもらうため、記録されるSMエラーが少なくなってしまう可能性もある。日誌への記録を動機づけるために、調査期間中に経験したSMエラーを可能な限り記録してくれれば、日誌を回収する際に学内で利用可能な500円のコピーカードを謝礼として渡すことを告げた。また、調査期間中にSMエラーを経験しなかった場合でも、日誌を返却するよう指示した。冊子を手渡ししてから2週間後、心理学の授業中に全ての冊子を調査者が直接回収し、謝礼を手渡した。

## 結果

全ての調査と実験に参加し、なおかつ、任意の6桁の番号が同一のものであることが確認できた対象者47名のうち、日誌の調査項目への記述は見られたが筆者2名がSMエラーに該当しないと判断をした記述をしていた3名、質問紙調査での回答漏れがあった1名を分析対象から除外し、43名の対象者のデータを分析対象とした。なお、これらの対象者のうち、男性は16名で平均年齢は20歳( $SD = 1$ , 範囲： 18-22), 女性は27名で平均年齢は20歳( $SD = 1$ , 範囲： 18-22)であった。

### RMEEQ

本節におけるRMEEQの合計得点の平均及び標準偏差は、男性で $M = 41.25$ ( $SD = 17.57$ )、女性で $M = 48.96$ ( $SD = 18.08$ )であった。第4章・第4節におけるRMEEQの合計得点の平均及び標準偏差は、男性で $M = 43.08$ ( $SD = 21.06$ )、女性で $M = 40.82$ ( $SD = 21.06$ )であった。本節で得られたRMEEQ得点と大きな差があるとは言い難いことから、RMEEQは比較的安定した結果が得られるということが示されたと言える。

日常生活場面において経験されやすいRMエラーについて検討するために、RMEEQの項目のうち、得点の高かったものを抽出したところ、この結果は、第4章・第2節とほぼ同様のものが得られた。具体的には、RMEEQ得点上位5項目は(25) “置いてあると思った場所に物を取りに行ってみたが、実際には見つからなかったことがある”( $M = 2.86$ ,  $SD = 1.06$ ), (9) “自分の考えに注意が向いていたために、ある物をまだ鞄に入れていないと思いこんでいたが、実際には入れていたことがある” ( $M = 2.42$ ,  $SD = 1.20$ ), (20) “他の用事を同時にと思っていたために、送信したと思い込んでいたメールを実際には送

信していなかったことがある” ( $M = 2.24, SD = 1.27$ ), (22) “他の何かに熱中していたため、声をかけられたのは気のせいだと思っていたが、実際には声をかけられていたことがある” ( $M = 2.05, SD = 1.31$ ), (11) “家にあると思い込んでいた物が、実際には家にはなかったことがある” ( $M = 1.95, SD = 1.15$ ) であった。

### SM課題

知覚反応、生成反応、新項目反応というそれぞれの反応数をソースごとの項目数で除して、反応率を算出した。さらに、SMエラー率を算出するために、SMの誤反応数を、SMの正答・誤答を含めた全ての旧項目判断数で除した。その結果、平均SMエラー率は、 $0.50 (SD = 0.06)$  であった。

### 日誌

冊子の回収率は92.15%であった。SMエラーの事例を報告した者は43名で、そのうち調査期間中にSMエラーを経験しなかったと報告した者は18名であった。得られたエラー事例の総数は45件であった。1人当たりの平均報告数は1.80件、最少報告数は1件、最多報告数は5件であった。

得られたSMエラーの事例の内実について詳細に検討するため、第4章・第1節と同様の方法で、45件の事例について筆者ともう1名の研究者が独立にKJ法により4つのカテゴリに分類した。その際にはエラー内容に関する記述だけでなく、そのエラーを経験したときの心的状態やエラーを犯した理由に関する記述についても分類判断の材料とした。分類の信頼性を検討するためにカッパ係数を求めた結果、 $k = 1.00$  という高いカッパ係数が得られた。

表8に4つのカテゴリごとの事例数と、実際に報告されたSMエラーの内容を示す。(a)元のソースとは異なる詳細情報が想起されたために起こる混乱(想起)は8件、(b)焦り、寝ぼけ、疲労、他の課題への集中などから来る注意不足による確認・記録不全(記録)28件、(c)リアリティ判断時に、リアリティ判断の基準が緩くなつたために起つた混乱(想起)は3件、(d)その他は6件であった。

以上の結果から、カテゴリ(b)に起因すると考えられるエラーの報告数が最も多いということが示された。また、この結果は第4章・第1節で報告した結果と一致するものである。したがって、日常生活場面において経験されるSMエラーは、焦り、寝ぼけ、疲労、他の課題への集中などから来る注意不足による確認・記録不全に起因するものが多いということが確認されたと言える。

### RMEEQ, SM課題, 日誌の関係性

日誌法によるSMエラー経験報告数とRMEEQ得点とのSpearmanの順位相関係数を算出したところ、有意な正の相関が認められた( $\rho = 0.31, p < .05$ )。日誌法によるSMエラー経験数とSM課題におけるエラー率とのSpearmanの順位相関係数を算出したところ、有意な相関は認められなかつた( $\rho = -0.08, n.s.$ )。RMEEQ得点とRM課題におけるエラー率とのSpearmanの順位相関係数を算出したところ、有意な相関は認められなかつた( $\rho = -0.04, n.s.$ )。

表8 ソース・モニタリング・エラー起因ごとの事例

ソース・モニタリング・エラーのカテゴリ	事例数	実際に報告されたエラーの内容 エラーが生起した時の心的状態 エラーを犯した理由
(a)元のソースとは異なる記憶の特徴が想起されたために起こる混乱(想起)	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>書道部で郵便物を出すのにお金がいるということで、私は財布から1000円を取り出し部長に渡したつもりだったが、部長にお金を受け取ってないと言われた。実際に1000円札を財布から取り出し、手に持っていたから、お札を触った感触が手に残っていたから。(後輩言わく、出した1000円をそのまま財布に戻したそうです)</li> <li>母親に出てくれと頼まれた郵便物を、カバンに入れたと勘違いして外出、ポスト前で無いことに気付いた。前にも同様の頼まれごとをしたせいで、依頼を遂行するイメージが先行してしまったのではないかと思う。また焦っていたせいで、郵便物の優先度合が下がり注意を向かられなかったのもあるだろう。</li> </ul>
(b)焦り、寝ぼけ、疲労、他の課題への集中などからくる注意不足による確認・記録不全であったために起こる混乱(記録)	28	<ul style="list-style-type: none"> <li>朝、お米を洗って、炊飯器にお米を入れた。そして炊飯のボタンを押してごはんをたいたと思いこんでいたが学校から帰ってきて見てみると、お米を入れただけで炊飯のボタンはおされておらず、ごはんはたけてなかった。することがいっぱいだったから。頭の中に、次はこれをする、あれをするというイメージがあった。</li> <li>友だちAに言ったつもりで話をしたら、本当は友だちBに言っていた。忙しかって、その中で友だちBに話をしていて、友だちAともそのあとに話をしたからだと思う。</li> </ul>
(c)想起時に適切な判断基準で記憶の特徴を吟味しなかったために起こる混乱(想起)	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>夜、家でくつろいでいた。お菓子（ミルキー）が一粒残っていたと思ったので、袋を見たらすでに空っぽだった。食べる時に袋の中身を見ることなく、感覚でまだあるか、ないかを判断していたから。</li> <li>長い昼寝から目が覚めて、自分のベッドに寝そべつており、辺りは暗かったのだが、これは早朝でパジャマを着ているものだと思っていたが、早朝ではなく夜でまだ普段着だった。長時間寝たというハッキリした感覚が、これまでの経験と照らし合させて、“当然”夜に寝て朝に起きたのだろうと勘違いさせたと思われる。毎日寝慣れている自分のベッドということに加えて、暗くて自分の服装や時間などヒントになるものをすぐに確認できなかつたことも勘違いの原因と思われる。</li> </ul>
(d)その他	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>いつもキーを決めた場所にしまっていたが、いそいでかたづけて、いつもと違う場所にいれていたが、（棚を開けて）決まった場所にキーがないことに気づき、しばらくして思い出して、見つける事ができた。部屋をのぞいてもないので、そのいつもの棚に入っていると思っていた。</li> <li>家賃をおろして、大家さんに渡したと思っていたが、実際にはまだ渡していないかった。作業を中断してしまったため。</li> </ul>

## 考察

本節では、第4章で作成されたRMEEQのスコアと実験室の課題で測定された実際のSMエラーとの関連性について検討することを目的とした。そのため、同一の協力者にRMEEQへの回答を求める質問紙フェイズ、SM課題を用いた実験フェイズ、日誌フェイズの全てに参加するよう依頼した。その結果、RMEEQ得点と日誌法により測定されたSMエラー経験との間には有意な正の相関が認められた。この結果から、RMEEQは日常生活場面で経験されるSMエラーを正確に測定できる質問紙であることが確認できたと言える。また、RMEEQ得点と実験フェイズにおけるSMエラー率や、日誌フェイズにおけるSMエラー経験数と実験フェイズにおけるSMエラー率との間には有意な正の相関は認められなかったことから、RMEEQや日誌法により測定されるSMエラー経験と、実験フェイズにおけるSMエラーとでは異なる認知過程を反映している可能性が示唆された。

RMEEQ得点と実験フェイズにおけるSMエラー率との間に有意な正の相関が認められなかったという結果については、RMEEQが日常生活場面で経験されるSMエラーについて測定できないものであることによるとも解釈できる。しかしながら、日常生活場面と実験室実験とではそれぞれ異なる状況における認知過程を反映しているために、日常生活場面における自らの記憶活動について自己評価させる質問紙のスコアと、実験室の課題で測定された記憶成績との間に常に相関が認められるわけではないと考えられている(Broadbent et al., 1982 ; Herrmann, 1982 ; 山田, 1999)。

例えば、山田(1999)は、CFQで測定されるスリップを含めた日常生活場面において経験されるより広範な失敗行動について自己評価させる失敗傾向質問紙を開発し、その妥当性と信頼性について検討した。失敗傾向質問紙は“アクションスリップ”，“認知の狭小化”，“衝動的失敗”という3因子から構成されており、その構成概念妥当性を検討するために、数字スパン課題を実施した。その結果、“アクションスリップ”得点が高いほど数字スパンが大きいという結果が得られた。“全般的な失敗しやすさ”を測っているはずの質問紙のスコアが実験状況での遂行の失敗を必ずしも予測しなかったのである。その理由として、日常生活場面でのアクションスリップは慣れ親しんだ行動の実行中に、ぼんやりした状態で多く起こり、実験状況は参加者にとっては新奇で何らかの問題解決的行動が要求されるという日常生活場面と実験室実験での状況との違いを挙げている。

それでは本節においては、日常生活場面と実験フェイズでの状況とではどのような違いが存在したと考えられるのだろうか。RMEEQの項目のうち、得点が高かった項目を抽出した結果から、自分の考えに注意が向いていたことや、他の用事を同時にっていた等、記録時の要因に起因すると想定されるRMエラーが日常生活場面では多く経験されているということが示された。また、日誌では(b)焦り、寝ぼけ、疲労、他の課題への集中などから来る注意不足による確認・記録不全(記録)に起因すると想定されるRMエラー経験が28件報告され、全報告数の大半を占めていた。日誌法で報告された記録時

の状況として，“電車の時間がせまっていて急いでいたから。”，“色々考えていたから。”，“ねぼけていたから”などが挙げられていた。

一方、実験フェイズで採用した記録時の方向付け課題は、Marsh & Hicks(1998)と同様の方法で作成したアナグラム課題であった。アナグラム課題の手続きは、単語が正しい順序である場合には読むだけ、単語の2字の順序が交換されている場合には交換されている文字の下に誤字記号がついている2文字を正しい順序に並べ替えて読むよう求めるので、この手続きにより実験対象者が刺激へ注意を払っているということを保障しているのである(Marsh & Hicks, 1998)。つまり、RMEEQや日誌法において報告された記録時の状況と、実験フェイズにおける記録時の状況とでは刺激に注意を払っているか否かという点において異なっていたと言える。そのため、RMEEQや日誌法で測定されたSMエラー経験と、実験フェイズで測定されたSMエラーとでは異なる認知過程を反映していた可能性がある。その結果として、RMEEQ得点と日誌法で測定されたSMエラー経験数との間には有意な正の相関が認められたが、RMEEQ得点と実験フェイズで測定されたエラー率、日誌法で報告されたSMエラー経験数と実験フェイズにおけるエラー率との間に相関が認められなかった可能性が考えられる。もし、RMEEQがSM経験を正確に測定することができないとすれば、日誌法により測定されたSMエラー経験数とRMEEQ得点との間に有意な相関が認められなかっただけである。しかし、本節の結果によるとRMEEQ得点と日誌法により報告されたSMエラー経験数との間には有意な相関が認められている。したがって、RMEEQ得点と実験フェイズにおけるエラー率との間に有意な正の相関が認められなかっただとしても、その結果はRMEEQの妥当性が低いということを示すものではなく、RMEEQで測定されたSMエラー経験と実験フェイズにおいて測定されたSMエラーとでは異なる認知過程を反映していたからであると考えるのが妥当であろう。

SMエラーについての従来の研究においては、SMが想起時の判断過程を通じて遂行されると考えられてきた(Johnson et al., 1993)。Raye et al.(1980)は、項目を2, 5, あるいは, 8回イメージさせ、そして、同じ項目を2, 5, あるいは8回視覚呈示することにより記録させた。テストセッションでは、イメージを生成した回数あるいは視覚呈示された回数についての判断を求めたところ、イメージの生成回数が増えるほど当該の項目は視覚呈示されたものであると判断された。しかしながら、テストセッションにおいて頻度判断の回数に制限が設けられると、生成項目を視覚呈示に帰属させる傾向は減少した。いかなる判断が遂行されるかはテスト時の認知的要求に依存しており、イメージを生成する際に成立した認知操作情報が視覚的詳細情報の代わりに判断手がかりとして利用されたためであると考えられた。この結果は、テスト時にイメージの生成回数や視覚呈示された頻度についての判断に回数制限が設けられることによって、想起された記憶痕跡に対する解釈が変化するということを示唆するものである。このように、実験室のSM課題により測定されているエラーは、記憶痕跡の特徴を想起し、ソースを判断する過程を通じて生じることが強調されていると考えられる。このような知見は、

我々がどのようにして記憶痕跡の特徴を想起・解釈するのかということを示唆するという点において有意義なものであるが、日常生活場面において経験されるSMエラーの多くが記録時の確認不足や記録不全によって生じるものであるということを示す第4章・第1節や本節から得られた知見とは異なるものである。実験室実験においては記録時に方向付け課題を課すことにより刺激に対する注意を促している。一方、日常生活場面においては、当人が常に刺激に注意しているとは限らないといった状況も報告された。例えば、日誌法で報告された記録時の状況として、想起時に厳密なSMの判断基準を設定することが求められたり、SMを遂行するための時間制限が設けられるといった報告は少なかった。したがって、日常生活場面におけるSMエラーは、想起時の要因よりも記録時の要因によって生じるという報告が多くたのかもしれない。ただし、今回調査を大学生のみに依頼したという点に注意が必要かもしれない。例えば、大学生より社会人の方がRMの正確さが要求されたりSMに時間制限が設けられたりするといった状況が多いと想定される。仕事上の重要な書類を提出したか否か、取引先へのメールを送信したか否かについての即答が要求される等が挙げられる。したがって、日常生活場面において発生するRMエラーのうち記録時の確認不足や記録不全に依るものが多いという本節で得られた知見が、大学生にのみ該当するものであるという可能性も否定することができない。そのため、大学生以外の者を対象者とした場合にも本節で得られた知見が該当するのか否かについては注意を要するだろう。

本節では、日誌法により報告されたSMエラー経験数とRMEEQ得点との相関を検討することにより、RMEEQのスコアと実際のSMエラーとの関連性について確認することができた。メタ記憶質問紙は調査協力者自身の記憶信念及び自らの記憶行動や記憶能力に関する主観的評価や回想的判断を調べるものであり、人間のメタ記憶の構造を理解するための有効な手がかりを提供してくれると考えられる(清水・高橋・齋藤, 2006)。したがって、RMEEQ得点と実験室の課題で測定された実際の記憶活動と相関が認められなかつたとしても、日常生活場面で経験されるSMやSMエラーを理解するための一助になるという点で、RMEEQは有意義なものであると考えられる。

## 第2節 本章のまとめ

第1節では、RMEEQや日誌法で測定されたSMエラー経験と実験室の課題により測定された実際のSMエラーとの関連性について検討を加えた。その結果、RMEEQが日常生活場面において経験されるSMエラー経験について正確に測定することができるものであるものの、実験室の課題で測定された実際のパフォーマンスとの関連性については認められなかった。しかしながら、自らの記憶活動に対する主観的な評価が日常生活場面における記憶行動を規定するため、RMEEQによって提供されるSMエラー経験に関する自己評価もまた日常生活場面において生起するSMエラーを規定する重要な要因であると考えられた。

### 第Ⅲ部 総括

## 第8章 総括

### 第1節 日常生活場面において経験されるソース・モニタリング・エラーを防止するための方法

日常生活場面において、我々は数多くのSMを遂行している。例えば、自宅の扉を施錠したか否か、持病の薬を医師の指示した時間に服用したか否か、自分を罵ったのはAさんであってBさんではなかった場合などである。もし、SM課題における錯誤、すなわちSMエラーが日常生活場面において頻繁に経験されるとすれば、周囲との信頼関係が破綻し、実際に経験したことに由来する記憶と想像や思考に由来する記憶との混同に苦しむことになるだろう。自分は罵られたという記憶はBさんに由来するものではないのに、Aさんに由来するものであると勘違いしてしまう場合にはAさんとの関係が危ういものになってしまうし、持病の薬をすでに服用したはずなのに未だ服用していないと勘違いしてしまう場合には薬を過剰摂取してしまったことによる健康への阻害や経済的損失に苦しむことになってしまうだろう。SMが正常になされることは、我々が周囲との信頼関係を保ちながら健康的で豊かな生活を送ることにとって不可欠なものであり、日常生活場面におけるSMエラーを低減するための知見を得ることは重要な研究課題であると考えられる。

本論文において得られた知見により、日常生活場面において発生するSMエラーを規定する要因は、記憶を構成する記録・保持・想起のそれぞれの段階において存在するということが示された。SMエラーを規定する要因のうち、記録時に自発的に情報が処理されてしまうことや出来事を経験してからの時間経過からの影響などのように、記憶の構成・再構成的性質に直接的な影響を及ぼす要因がある。こうした要因によって規定されるSMエラーを未然に防ぐことは可能であろうか。もし、それらの要因がSMを規定することに意識的に気づくことができたとしても、我々の記憶が構成・再構成的性質を有している以上、記録時の既存知識や記録からの保持期間といった要因からの影響を完全に避けることは困難である。したがって、人間がこうした認識のメカニズムを有する以上、構成・再構成的記憶に起因するSMエラーを完全に防止することは困難であるのかもしれない(Johnson, 2006)。しかし、いかなる要因によってSMエラーが規定されやすいのかを把握しておくことにより、SMエラーを低減させるために有益なのかもしれない。

本論文によって、自らのSMエラー経験に対する気づきやすさやSMエラー経験に対する評価もまたSMエラーを規定する要因の1つであるということが示された。ただし、主観的な自己評価に起因するSMエラー経験は、実験室的記憶研究法によって客観的に測定される実際のSMエラーとは異なるものであった。例えば、実際には頻繁にSMエラーを犯している者であっても、そのことに気づくことができない場合や、SMエラーを多く経験していると自己評価している者であっても、実際のSMエラーは低頻度である場合も考えられる。しかしながら、我々がどのような記憶行動を取るのかを決める際に、記憶に関する主観的な自己評価が強い影響力を持つ(Herrman, 1984)。SMエラーを多く犯している

と自己評価する者は、SM エラーを防止あるいは低減するために、様々な記憶行動をとるだろう。そのため、SM エラーに対する主観的な自己評価それ自体が、日常生活場面における我々の記憶行動や SM エラーを規定する重要な情報であると考えられる。

したがって、こうした SM エラーに対する主観的な自己評価や、それに基づいた記憶行動によって、返って SM エラーを増大させてしまう可能性もある。例えば、SM エラーを多く犯してしまっていると主観的に自己評価する者は、自宅を出た直後にガスのスイッチを切ったことや施錠したことについてふと思い出し、自宅へ戻って、ガスのスイッチや扉の施錠を確認してしまうことにより更なる混乱を招いてしまうのかもしれない。SM エラーを防ごうと、薬を飲んだということを覚えようとしてすることに注意を払っていたために、詳細情報の記録不全に起因する SM エラーを経験することになるかもしれない。

ただし、SM エラー経験に対する自己評価や、それに基づいた記憶行動によって SM エラーが増大してしまうのだろうか。もし、SM エラー経験に対する自己評価が実際のパフォーマンスを正確に反映したものであれば、記憶行動は SM エラーを防止するために機能するし、それゆえ、SM エラーが増大することも少なくなるだろう。例えば、これまでに玄関扉の施錠を忘れた経験は殆どないという自己評価が客観的に正確なものであれば、自宅の鍵を何度も確認することはないだろう。つまり、SM エラー経験に対する自己評価が客観的に正しいものであれば、SM エラーを増大させる原因にはなりえないし、自己評価が主観的で間違ったものであるがゆえに SM エラーを規定する要因になりうるのである。したがって、SM エラーに対する自己評価を正確なものとなれば、SM エラー経験を低減することができるのかもしれない。

SM エラー経験に対する自己評価が必ずしも実際の SM 成功や失敗に基づいたものではないとすれば、いかなる情報に基づいているのだろうか。その情報が明らかになれば、SM エラーに対する自己評価を正確なものとし、自己評価に起因するエラーについては、低減することができるのかもしれない。本論文では、RMEEQ を用いて過去に経験した SM エラーについて回想的に報告を求めるものであった。したがって、本論文におけるエラー経験に対する自己評価は、SM エラー経験に関する回想的記憶に基づいているものであると言えるだろう。しかし、SM エラー経験に関する回想的記憶は常に実際の SM の成功や失敗を正確に反映したものであるとは言い難い。

それでは、SM エラー経験に関する回想的記憶は必ずしも実際の SM の成功や失敗を反映したものではないのだろうか。我々が SM エラー経験を正確に把握することが困難なのは、エラー経験を捉える際に様々なバイアスが働いているからではないだろうか。もし、そうだとすれば、SM エラー経験に関する回想的記憶を正常なものとし、それに基づく SM エラー経験を正確に把握するためには、人間の認知メカニズムにおいて働くバイアスについて明らかにし、そして、そのバイアスを正常なものとする努力が求められると考えられる。

日常生活場面において、我々は多種多様な出来事を経験し、そうした個別の経験の集積から一般的な原理や規則を導き出している。例えば、家賃の支払を忘れてしまうといった

経験が繰り返されれば、私はし忘れが多いと考えるようになるだろう。このような推論の方法は帰納法と呼ばれている。帰納法は日常生活場面においてしばしば利用される推理方法ではあるが、確率を判断する際には過去経験や知識に基づいて判断されてしまうため、誤りも犯しやすいということが報告されている(Tversky & Kahneman, 1973)。例えば、男女の名前を1つ1つ聞かせる。そして、男女のどちらの名前が多かったかと判断するよう求める。その結果、実際には同数であるにも関わらず、有名な人物の名前が含まれている女性の名前の方が多いと回答される傾向が見出された(Tversky & Kahneman, 1973)。この結果は、有名な人物の名前は、無名な人物の名前よりも想起されやすいが、想起されやすいのは実際に呈示されたものだと判断されたからであると解釈された。このように、想起されやすい経験が実際に起こりやすいものであると判断されてしまう傾向は利用可能性ヒューリスティック(availability heuristic)と呼ばれている。

例えば、外出時に鍵を閉め忘れたことがあったか否かについて思い出してみたとしよう。鍵を閉めた場合よりも、鍵を閉め忘れてしまった事が思い出されたならば、私は鍵を閉め忘れることが多いのかもしれないと思い込んでしまうだろう。たとえ、実際には鍵を閉めていたことの方が確率的に多いとしても、利用可能性の高い情報である、私は鍵を閉め忘れたまま外出してしまうことが多いのではないか、私はSMエラーを犯しやすいという自らの記憶についての信念を有するようになってしまふのかもしれない。

また、こうした信念を否定するような出来事、例えば、戸締まりを忘れる事のない日々が続いたとしよう。そうすれば、信念を否定することは可能だろうか。自らの既存知識や信念を肯定するような事例による検証傾向は確証バイアス(confirmation bias)と呼ばれている。確証バイアスによって、自らの知識や信念が支持されるような出来事に注意を向けやすくなり、支持しないような出来事は無視されてしまう。そのため、形成されてしまった信念や先入観を否定することは実に困難なだけでなく、むしろ、知識や信念がさらに強められてしまうのである。例えば、外出時に私はガスの元栓を閉め忘れることが多いという信念を持っていたとしよう。そうすると、元栓を閉めて外出することができた場合よりも、閉め忘れて外出してしまった場合に注目しやすいため、ますます、私はいつもガスの元栓を閉め忘れてしまう、私はSMエラーを犯しやすいという信念が支持されてしまい、ガスの元栓を閉めていた事例には注意が払われなくなってしまうのである。こうしたバイアスによって、我々は自らの記憶に対する信念が形成されてしまい、SMエラー経験を正確に把握してゆくことが困難になると考えられる。

もし、こうした認知のバイアスからの影響を受けることがなければ、SMエラー経験に関する回想的記憶が歪められてしまうことも少なくなるため、SMエラー経験に対する自己評価も正確なものとすることができるのかもしれない。そうすることによって、SMエラー経験やSMエラーを低減させることができるのかもしれない。それでは、これらのバイアスによる影響を可能な限り避け、自らのSMエラー経験を正しく評価するためにはどのような方策が考えられるだろうか。

傍証ではあるが、本論文の第5章・第5節において、空間イメージスタイルとRMEEQ得点とに負の相関が認められたという結果から、自らのSMエラー経験を正しく評価するための方策を開発する手がかりが得られるのではないかと考えられる。空間イメージスタイルとは、見知らぬ土地で東西南北がわかるため道に迷うことが少ないといった際に使用されている視覚イメージのことである(川原・松岡, 2008)。個人内で、物体イメージスタイルよりも空間イメージスタイルが優勢である認知特性は空間イメージ特性と呼ばれており、“3次元的な立体図形を描くのが得意である”，“言葉で目的地までの生き方を教えてもらえば、目的地までの正しい道筋がわかる”などの項目によって測定することができる。つまり、空間イメージスタイル傾向が高い者ほど、客観的事実に基づいて視覚的な情報を正確に処理することができるということを示唆すると考えられる。したがって、第5章・第5節において得られた結果は、客観的事実に基づいて視覚的情報を正確に処理することができる者ほど、SMエラー経験が少ないと解釈することができる。SMは視覚においてのみ行われるものではない。視覚的情報に限らず、人の話を聞いたり、文章を読んだりするときにはたらき、さらには議論をしたり、自分の考えを述べるときにはたらく思考を批判的思考(critical thinking)(楠見, 1996)と呼ぶ。

批判的思考においては帰納的推理が中心的役割を果たしている。個々の経験を集め、それらにもとづいて推論し、その推論の確からしさの評価に基づいて、選択し、一貫した確かな解釈を構成してゆく(楠見, 1996)。そのため、推論の適切さ、推理によって導出された言明の真偽の度合い、推論を与えられている情報などで構成された解釈の確かさを評価することも含んでいる(久原・井上・波多野, 1983)。こうした批判的思考を訓練し、高めてゆくことによって、様々な思考のバイアスからの影響を逃れ、客観的事実に依存する程度の高い記憶を構成・再構成することにより、自らのSM能力やSMエラー経験について正確に判断し、ひいては、SMエラーを低減することができると考えられる。

## 第2節 今後の展望

本論文では、主に過去に経験された出来事についてのSMエラーを検討対象としてきた。例えば、自宅の扉を施錠したにも関わらず、施錠していないと思い込んでしまったり、持病の薬を服用していないにも関わらず服用したと思い込んでしまったために病気が悪化してしまった等である。こうしたSMエラーは未然に防止すべきものであり、エラーを犯してしまっているかもしれないという疑いは強い不安を喚起させ、エラーによる脅威的事態を回避するための行動へと我々を駆り立てるような、ネガティブな効果をもたらすものであった。こうした、現実とイメージの錯誤であるSMエラーやエラー経験がもたらす効果は、我々にとってネガティブなものでしかないのだろうか。

将来に実現されるべきイメージを抱き、意識的・無意識的にイメージに沿った行動を取ることも、イメージに由来する記憶を現実のものであると勘違いすることもSMエラーとするならば、こうしたSMエラーについて、認知心理学以外の他の心理学の分野においてどのように捉えられているのだろうか。例えば、自己成就予言(self-fulfilling prophecy)の1種であるピグマリオン効果(pygmalion effect)(Rosenthal & Jacobson, 1968)は、教師が自分に期待をかけてくれていると生徒が勘違いすることにより、教師の期待に応えようとした結果、実際に生徒の成績が向上するという現象である。また、理想自己

<sup>29</sup>(ideal self)が高い者と低い者の自己形成意識について調査的検討を行ったところ、理想自己の水準が低い者よりも、理想自己の水準が高い者は自己を低く評価する傾向もあるが、その一方で理想の自己を実現しようとする可能性追求得点が高いという知見が報告されている(水間, 1998)。また、処方されたものが偽薬であったとしても、効果のある薬であると信じ込むことによって病やそれに伴う苦痛が改善される現象は偽薬効果(placebo effect)(Beecher, 1955)と呼ばれている。このように、SMエラーは、我々にとってネガティブな効果のみだけでなく、将来への不安を低減し、目標達成のための行動へと我々を駆り立てるポジティブな効果もたらしてくれるのではないだろうか。もし、SMエラーがもたらすものがネガティブな効果のみで、ポジティブな効果が存在しなければ、我々は未来への広がりをなくし、過去経験によって既に安全性が確認された、特定の行動しか取ることができなくなってしまうだろう。自動車の運転をしている最中に交通事故に巻き込まれてしまうかもしれない、免許取得や車の購入を断念してしまったり、20年で完済予定のローンを組んで戸建てを購入したとしたら、地震によって全壊する可能性があるので、購入を諦めようと考えるようになるだろう。しかし、実際には交通ルールを守っていれば事故に遭遇することは確率的に低いものであるし、自動車で旅行すれば家族と楽しい思い出を作ることができるから、免許を取得しようと考えたり、土地や依頼する建設会社を吟味しておけば自宅が全壊することはないだろうから、ローンを組んで家族全員が快適に過ごせる自宅を建設しようと考えるように、将来についてのイメージを現実のものとするための行

---

<sup>29</sup>理想自己とは、個人が非常にそうありたいと望んでおり、それに最も高い価値をおいている自己概念で、Rogers(1959)によって初めて実証的に扱われた概念である(水間, 1998)。

動が駆動される。こうしたSMエラーは、未だ見ぬ将来への不安を低減し、将来を楽観的に捉えることを可能にし、過去に経験したことがない新しい行動へと駆り立ててくれるポジティブな効果を我々にもたらしてくれるだろう。

しかしながら、SMエラーがもたらすポジティブな効果やそのメカニズムについては、将来への行動を動機づける重要な役割があるにも関わらず、これまで殆ど検討対象となっていないと思われる。SMエラーがもたらすポジティブな効果やそのメカニズムが明らかになれば、将来への希望を抱くことができなくなってしまった精神疾患の者を理解し、病に伴う苦痛を緩和し、病気に打ち克つことができるという希望を与える一助となる可能性も考えられるだろう。したがって、SMエラーがもたらすポジティブな効果やそのメカニズムを解明してゆくことが求められるであろう。

### 第3節 本論文のまとめ

本論文では、日常生活場面において発生するSMエラーを規定する要因について検討を行った。第1章では、対象となる記憶の起源について区別する認知過程はSM(Johnson et al., 1993)、そして、SMにおける錯誤はSMエラーと呼ばれているということについて言及した。SMエラーは、精神疾患の主たる症状として経験されているという報告もあるため、日常生活場面において生起するSMエラーの規定因について検討を加えることにより、精神疾患に対する理解やその改善方策を開発する手がかりを得ることができるという本論文の目的とその意義について述べた。

SMエラーを生起させるメカニズムについて考察するためには実験手続きとSMを理解するための基本的な考えに負うところが大きい。第2章では、SM課題を用いた標準的な実験手続きやSMを理解するための基本的な考え、実験室的記憶研究法と日常記憶研究法によって測定されたSMエラーやSMエラー経験を検討対象とすることにより得られた知見について概観した。

第3章では、従来のSMエラー研究では、日常生活場面において経験されるSMエラーを防止するための知見を得たり、精神疾患の者が呈するSMエラー経験に伴う苦痛を理解することができないという限界点について述べた。その限界点を克服するためには、日常記憶研究法によりSMエラー経験とその原因について網羅的に把握し、SMエラー経験の個人差を規定する認知特性・性格特性について調査的検討を行うことと、その他の規定因については実験的研究法を用いて検討してゆくという研究法の提案を行った。

第4章では、日常生活場面において経験されるSMエラーとその原因について調査的に把握し、その結果に基づいてSMエラー経験を網羅的に測定することができる質問紙の開発を行い、さらに、その予備的検討を行った。その結果、RMEEQは多様な日常生活場面において経験される、独自の認知過程を含むSMエラーを測定することができる、一定の基準関連妥当性と時間的安定性を有する質問紙であるということが示されたと考えられた。

第5章では、RMEEQを用いて、SMエラー経験を規定する認知特性・性格特性について調査的検討を行った。その結果、抑うつ傾向が高い者が示すSMエラーは、記録時に出来事の詳細情報へ注目していたために起こる記録不全に起因するものであることが示された。

さらに、解離性障害の者が示す症状の1つに、知覚に由来する記憶に対して非現実感が伴い、想像や思考に由来する記憶には現実感が伴うというSMエラーが挙げられる。そこで、解離性傾向とSMエラーとの関連性について検討したところ、解離性傾向が高い者ほど外的情報を自己概念へと統合しやすく、SMを行う際に寛容な判断基準が採用されやすいために、SMエラーが経験されやすいということが示された。つまり、外的に獲得された情報は内的に獲得された情報であると勘違いされやすいのではないかと考えられた。

鮮明性の高い視覚イメージを体験することができる能力とSMエラー、物体イメージスタイル傾向とSMエラーとの関連性が認められたことから、解離性傾向の者は、想像に由

来する記憶であっても、鮮明な知覚的詳細情報が想起されてしまうために、外的に獲得されたものであると勘違いしてしまうということが示唆された。

また、強迫神経症の症状である確認行為や疑惑・強迫観念とSMエラーとの関連性について検討したところ、SMエラーを経験しているという自己評価が、SMエラーを犯しているのではないかという疑念を発生させてしまったり、SMエラーを未然に防止するために確認行為を繰り返すことによって、記憶痕跡の特徴が増大するため、SMエラーが経験されやすくなるということが示唆された。さらに、無意図的想起経験が高頻度である者ほどSMエラー経験が多いということが示されたことから、強迫神経症傾向が高い者ほど、無意図的想起によって疑惑・強迫観念、確認行為が駆動されることに起因するSMエラーが経験されるのではないかと考えられた。

第6章では、日常生活場面において生起するSMエラーを規定する要因のうち、調査的に検討困難なものについて実験室的記憶研究法を用いて検討を加えた。日常生活場面においては複数のソースに由来する記憶を対象としたSMも求められると考えられたため、そうした事態をシミュレートした実験を行った。その結果、記録時の聴覚呈示を契機に自発的に視覚イメージが処理されてしまうことや、時間経過に伴い記憶の特徴が減衰したことによって、複数の記憶が統合されてしまったために起こるSMエラーについて検討を行った。しかしながら、記録刺激と一致するテスト刺激を呈示することがSMに与える効果についての検討を行い、利用可能性の低減した記憶痕跡の特徴であっても想起可能であることを示した。

第7章では、剩余変数が統制されない日常生活場面における多様な情報を刺激としたSMエラー経験と、二次変数の統制された実験室内で実験者が呈示した単純な言葉や画像を刺激とした実験室的記憶研究法により計測された実際のSMエラーとの関連性について検討を加えた。その結果、RMEEQが日常生活場面において経験されるSMエラーを計測することができるものであるものの、RMEEQが計測しているSMエラー経験は実験室的記憶研究法によって計測された実際のSMエラーとは異なるものである可能性が示された。

第8章では、日常生活場面において発生するSMエラーのうち、SMエラー経験に対する主観的な自己評価に起因するものについてはSMエラー経験に対する自己評価や記憶行動の効果を正確に把握することが不可欠であるという考察を行い、今後SMエラー研究においてはSMエラーがもたらすポジティブな効果を解明してゆくことについて提案した後、本論文全体のまとめを行った。

## 引用文献

- Abramowitz, J. S., Moore, E. L., Braddock, A. E., & Harrington, D. L. (2009). Self-help cognitive-behavioral therapy with minimal therapist contact for social phobia: A controlled trial. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **40**, 98-105.
- Addis, D. R., Wong, A. T., & Schacter, D. L. (2007). Remembering the past and imagining the future: Common and distinct neural substrates during event construction and elaboration. *Neuropsychologia*, **45**, 1363-1377.
- Aleman, A., Böcker, K. B. E., & de Haan, E. H. F. (1999). Disposition towards hallucination and subjective versus objective vividness of imagery in normal subjects. *Personality and Individual Differences*, **27**, 707-714.
- Aleman, A., & de Haan, E. H. F. (2004). Fantasy proneness, mental imagery and reality monitoring. *Personality and Individual Differences*, **36**, 1747-1754.
- American Psychiatric Association. (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*(4th ed., text revision). Washington, DC: Author.
- Arbuthnott, K. D., Geelen, C. B., & Kealy, K. L. (2002). Phenomenal characteristics of guided imagery, natural imagery, and autobiographical memories. *Memory & Cognition*, **30**, 519-528.
- Atkinson, R. C., & Shiffrin, R. M. (1968). Human memory: A proposed system and its control processes. In K. W. Spence & J. T. Spence(Eds), *The psychology of learning and motivation*. Vol. 2. New York: Academic Press, pp.89-195.
- Ball, S. G., Baer, L., & Otto, M. W. (1996). Symptom subtypes of obsessive-compulsive disorder in behavioral treatment studies: A quantitative review. *Behaviour Research and Therapy*, **34**, 47-51.
- Banaji, M. R., & Crowder, R. G. (1989). The bankruptcy of everyday memory. *American Psychologist*, **44**, 1185-1193.
- Bartlett, F. C. (1932). *Remembering: A study in experimental and social psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bayen, U. J., Nakamura, G. V., Dupuis, S. E., & Yang, C. L. (2000). The use of schematic knowledge about sources in source monitoring. *Memory & Cognition*, **28**, 480-500.
- Beck, A. T., Kovacs, M., & Weissman, A. (1979). Assessment of suicidal intention: The Scale for Suicide Ideation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*

- Psychology*, **47**, 343-352.
- Beck, A. T., Ward, C., & Mendelson, M. (1961). Beck Depression Inventory (BDI). *Arch Gen Psychiatry*, **4**, 561-571.
- Beecher, H. K. (1955). The powerful placebo. *Journal of the American Medical Association*, **159**, 1602-1606.
- Bernstein, E. M., & Putnum, F. W. (1986). Development, reliability, and validity of a dissociation scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**, 727-735.
- Bexhill VI Form College (1980). *An investigation into the incidence and causes of absent-minded behaviour*. Report to the BBC Young Scientist of the Year Competition.
- Blajenkova, O., Kozhevnikov, M., & Motes, M. A. (2006). Object-spatial imagery: A new self-report imagery questionnaire. *Applied Cognitive Psychology*, **20**, 239-263.
- Boschen, M. J., & Vuksanovic, D. (2007). Deteriorating memory confidence, responsibility perceptions and repeated checking: Comparisons in OCD and control samples. *Behaviour Research and Therapy*, **45**, 2098-2109.
- Bransford, J. D., & Johnson, M. K. (1973). Considerations of problems of comprehension. In W. G. Chase(Ed.), *Visual information processing*. New York: Academic Press, pp.383-438.
- Broadbent, D. E., Cooper, P. F., FitzGerald, P., & Parkes, K. R. (1982). The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology*, **21**, 1-16.
- Brown, A. L. (1978). Knowing when, where, and how to remember : A problem of metacognition. In R. Gaser(Ed.), *Advances in instructional psychology*, Vol.1. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associate, pp.77-165.  
(ブラウン, A. L. 湯川良三・石田裕久(共訳) (1984). メタ認知—認知についての知識 サイエンス社)
- Brown, H. D., Kosslyn, S. M., Breiter, H. C., Baer, L., & Jenike, M. A. (1994). Can patients with obsessive-compulsive disorder discriminate between percepts and mental images? A signal detection analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, **103**, 445-454.
- Cohen, G. (1996). *Memory in the real world*. 2nd ed. Hove, East Sussex: Psychology Press.
- Cooper, E. A., & Shepard, R. N. (1973). Chronometric studies of the rotation of mental images. In Chase, W. G. (Ed.), *Visual information processing*,

- New York: Academic Press, pp.75-177.
- Craik, F. I., & Lockhart, R. S. (1972). Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **11**, 671-684.
- Crowne, D. P., & Marlowe, D. (1960). A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, **24**, 349-354.
- D'Argembeau, A., & Van der Linden, M. (2004). Phenomenal characteristics associated with projecting oneself back into the past and forward into the future: Influence of valence and temporal distance. *Consciousness and Cognition*, **13**, 844-858.
- Divilbiss, M., McCleery, A., Aakre, J. M., Seghers, J. P., Schumann, E. B., & Docherty, N. M. (2011). Reality monitoring and its association with social functioning in schizophrenia. *Psychiatry Research*, **186**, 1-4.
- Dobson, M., & Markham, R. (1993). Imagery ability and source monitoring: Implications for eyewitness memory. *British Journal of Psychology*, **84**, 111-118.
- Dodson, C. S., & Johnson, M. K. (1993). Rate of false source attributions depends on how questions are asked. *American Journal of Psychology*, **106**, 541-557.
- Dodson, C. S., & Shimamura, A. P. (2000). Differential effects of cue dependency on item and source memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **26**, 1023-1044.
- Durso, F. T., & Johnson, M. K. (1980). The effects of orienting tasks on recognition, recall, and modality confusion of pictures and words. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **19**, 416-429.
- Ebbinghaus, H. (1885/1964). *Memory: A contribution to experimental psychology*. New York: Dover Publications.
- Ecker, W., & Engelkamp, J. (1995). Memory for actions in obsessive-compulsive disorder. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, **23**, 349-371.
- Flavell, J. H. (1971). Stage-related properties of cognitive development. *Cognitive Psychology*, **2**, 421-453.
- Flavell, J. H. (1987). Speculations about the nature and development of metacognition. In F. E. Weinert & R. H. Kluwe(Eds.), *Metacognition, motivation, and understanding*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum

- Associates, pp.21-29.
- Ellis, H. C., & Ashbrook, P. W. (1988). Resource allocation model of the effects of depressed mood states on memory. In K. Fiedler & J. Forgas (Eds.), *Affect, cognition, and social behavior*. Toronto: Hogrefe, pp.25-43.
- Ellis, J. A., & Nimmo-Smith, I. (1993). Recollecting naturally-occurring intentions: A study of cognitive and affective factors. *Memory*, **1**, 107-126.
- Foa, E. B., Amir, N., Gershuny, B., Molnar, C., & Kozak, M. J. (1997). Implicit and explicit memory in obsessive-compulsive disorder. *Journal of Anxiety Disorders*, **11**, 119-129.
- 藤田哲也 (1999). 潜在記憶の測定法 心理学評論, **42**, 107-128.
- 藤田哲也・堀内孝 (2004). 独立 Remember/Know(IRK)手続きによる自己関連付け効果の検討 心理学研究, **74**, 547-551.
- Gardiner, J. M. (1988). Functional aspects of recollective experience. *Memory & Cognition*, **16**, 309-313.
- Garry, M., Manning, C. G., Loftus, E. F., & Sherman, S. J. (1996). Imagination inflation: Imagining a childhood event inflates confidence that it occurred. *Psychonomic Bulletin & Review*, **3**, 208-214.
- Gilewski, M. J., Zelinski, E. M., & Schaie, K. W. (1990). The Memory Functioning Questionnaire for assessment of memory complaints in adulthood and old age. *Psychology and Aging*, **5**, 482-490.
- Goff, L. M., & RoedigerIII, H. L. (1998). Imagination inflation for action events: Repeated imagination lead to illusory recollection. *Memory & Cognition*, **26**, 20-33.
- Harris, J. E., & Wilkins, A. J. (1981). Remembering to do things: A theoretical framework and an illustrative experiment. Submitted for publication.
- Hashtroodi, S., Johnson, M. K., & Chrosniak, L. D. (1989). Aging and qualitative characteristics of memories for perceived and imagined complex events. *Psychology and Aging*, **5**, 119-126.
- Hashtroodi, S., Johnson, M. K., Vnek, N., & Ferguson, S. A. (1994). Aging and the effects of affective and factual focus on source monitoring and recall. *Psychology and Aging*, **9**, 160-170.
- 畠中佳子・藤田哲也 (2004). ソースモニタリングと再認による文字表記形態の頗在記憶の検討 心理学研究, **74**, 496-503.
- 林潔 (1988). 学生の抑うつ傾向の検討 カウンセリング研究, **20**, 162-169.
- 林潔・瀧本孝雄 (1991). Beck Depression Inventory(1978年版)の検討と

- Depression と Self-efficacy との関連についての一考察（人文・社会科学篇） 白梅学園短期大学紀要, **27**, 43-52.
- Henkel, L. A., & Franklin, N. (1998). Reality monitoring of physically similar and conceptually related objects. *Memory & Cognition*, **26**, 659-673.
- Henkel, L. A., Franklin, N., & Johnson, M. K. (2000). Cross-modal source monitoring confusions between perceived and imagined events. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, **26**, 321-335.
- Hermans, D., Engelen, U., Grouwels, L., Joos, E., Lemmens, J., & Pieters, G. (2008). Cognitive confidence in obsessive-compulsive disorder: Distrusting perception, attention and memory. *Behaviour Research and Therapy*, **46**, 98-113.
- Hermans, D., Martens, K., De Cort, K., Pieters, G., & Eelen, P. (2003). Reality monitoring and metacognitive beliefs related to cognitive confidence in obsessive compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 383-401.
- Herrmann, D., Sheets, V., Gruneberg, M., & Torres, R. (2005). Are self reports of memory failure accurate? *Applied Cognitive Psychology*, **19**, 821-841.
- Herrmann, D. J. (1982). Know thy memory: The use of questionnaires to assess and study memory. *Psychological Bulletin*, **92**, 434-452.
- Herrmann, D. J. (1984). Questionnaires about memory. In J. E. Harris & P. E. Morris(Eds.), *Everyday memory, actions, and absent-mindedness*. London: Academic Press, pp. 133-151.
- Hertel, P. T. (1994). Depression and memory: Are impairments remediable through attentional control? *Current Directions in Psychological Research*, **3**, 190-193.
- Hertel, P. T. (1998). Relation between rumination and impaired memory in dysphoric moods. *Journal of Abnormal Psychology*, **107**, 166-172.
- 平井洋子 (2006). 測定の妥当性からみた尺度構成—得点の解釈を保証できますか— 心理学研究法の新しいかたち 吉田寿夫(編著) 誠信書房
- 久原恵子・井上尚美・波多野謙余夫 (1983). 批判的思考とその測定 読書科学, **27**, 131-124.
- 菱谷晋介 (2005). イメージ能力の測定 菱谷晋介・田山忠行(編著) 心を測る 八千代出版 pp.140-141.
- Hoffman, H. G. (1997). Role of memory strength in reality monitoring decisions: Evidence from source attribution biases. *Journal of Experimental*

- Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **23**, 371-383.
- 細羽竜也・内田信行・生和秀敏 (1992). 日本語版モーズレイ強迫神経症質問紙 (MOCI)の因子論的検討 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **18**, 53-61.
- van den Hout, M., & Kindt, M. (2003). Repeated checking causes memory distrust. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 301-316.
- van den Hout, M., Merckelbach, H., & Pool, K. (1996). Dissociation, reality monitoring, trauma, and thought suppression. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, **24**, 97-108.
- Hyman, I. E. Jr., & Billings, F. J. (1998). Individual differences and the creation of false childhood memories. *Memory*, **6**, 1-20.
- Hyman, I. E. Jr., Husband, T. H., & Billings, F. J. (1995). False memories of childhood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **9**, 181-197.
- Hyman, I. E. Jr., & Pentland, J. (1996). The role of mental imagery in the creation of false childhood memories. *Journal of Memory and Language*, **35**, 101-117.
- Intraub, H., & Hoffman, J. E. (1992). Reading and visual memory: Remembering scenes that were never seen. *The American Journal of Psychology*, **105**, 101-114.
- Jacoby, L. L., Woloshyn, V., & Kelley, C. (1989). Becoming famous without being recognized: Unconscious influences of memory produced by dividing attention. *Journal of Experimental Psychology: General*, **118**, 115-125.
- Jelinek, L., Moritz, S., Heeren, D., & Naber, D. (2006). Everyday memory functioning in obsessive-compulsive disorder. *Journal of the International Neuropsychological Society*, **12**, 746-749.
- Johnson, M. K. (1998). Individual and cultural reality monitoring. *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, **560**, 179-193.
- Johnson, M. K. (2006). Memory and reality. *American Psychologist*, **61**, 760- 771.
- Johnson, M. K., Foley, M. A., & Leach, K. (1988a). The consequences for memory of imagining in another person's voice. *Memory & Cognition*, **16**, 337-342.
- Johnson, M. K., Foley, M. A., Suengas, A. G., & Raye, C. L. (1988b). Phenomenal characteristics of memories for perceived and imagined autobiographical events. *Journal of Experimental Psychology: General*, **117**, 371-376.

- Johnson, M. K., Hashtroudi, S., & Lindsay, D. S. (1993). Source monitoring. *Psychological Bulletin*, **114**, 3-28.
- Johnson, M. K., Kahan, T. L., & Raye, C. L. (1984). Dreams and reality monitoring. *Journal of Experimental Psychology: General*, **113**, 329-344.
- Johnson, M. K., Nolde, S. F., & De Leonardis, D. M. (1996). Emotional focus and source monitoring. *Journal of Memory and Language*, **35**, 135-156.
- Johnson, M. K., & Raye, C. L. (1981). Reality monitoring. *Psychological Review*, **88**, 67-85.
- Johnson, M. K., Raye, C. L., Foley, H. J., & Foley, M. A. (1981). Cognitive operations and decision bias in reality monitoring. *The American Journal of Psychology*, **94**, 37-64.
- Johnson, M. K., Raye, C. L., Wang, A. Y., & Taylor, T. H. (1979). Fact and fantasy: The roles of accuracy and variability in confusing imaginations with perceptual experiences. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, **5**, 229-240.
- Johnson, M. K., Taylor, T. B., & Raye, C. L. (1977). Fact and fantasy: The effects of internally generated events on the apparent frequency of externally generated events. *Memory & Cognition*, **5**, 116-122.
- 川原正広・松岡和生 (2008). 視空間作業記憶の容量制約性と視空間的イメージ処理の関連 イメージ心理学研究, **6**, 45-56.
- 川原正広・松岡和生 (2009). 視覚的イメージスタイル質問紙作成の試み イメージ心理学研究, **7**, 19-31.
- Kelley, C. M., Jacoby, L. L., & Hollingshead, A. (1989). Direct versus indirect tests of memory for source: Judgments of modality. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **15**, 1101-1108.
- Kemp, S., Burt, C. D. B., & Sheen, M. (2003). Remembering dreamt and actual experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **17**, 577-591.
- 金城光 (2001). ソース・モニタリング課題を中心としたソース・メモリ研究の動向と展望 心理学研究, **72**, 134-150.
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, **9**, 173-180.
- 小谷津孝明・鈴木栄幸・大村賢吾 (1992). 無意図的想起と行為のし忘れ現象 安西祐一郎・石崎俊・大津由起雄・波多野謙余夫・溝口文雄(編) 認知科学ハンドブック 共立出版 pp.225-237.
- Kozhevnikov, M., Kosslyn, S., & Shephard, J. (2005). Spatial versus object visualizers: A new characterization of visual cognitive style. *Memory &*

- Cognition*, **33**, 710-726.
- Kunzendorf, R. G., & Karpen, J. (1997). Dissociative experiences and reality-testing deficits in college students. *Imagination, Cognition and Personality*, **16**, 227-238.
- 楠見孝 (1996). 帰納的推理と批判的思考 市川伸一(編) 認知心理学4 思考 東京大学出版会 pp.37-60.
- Lampinen, J. M., Odegard, T. N., & Bullington, J. L. (2003). Qualities of memories for performed and imagined actions. *Applied Cognitive Psychology*, **17**, 881-893.
- Leynes, P. A., Bink, M. L., Marsh, R. L., Allen, J. D., & May, J. C. (2003). Test modality affects source monitoring and event-related potentials. *American Journal of Psychology*, **116**, 389-414.
- Lindsay, D. S., & Johnson, M. K. (1989). The eyewitness suggestibility effect and memory for source. *Memory & Cognition*, **17**, 349-358.
- Lyle, K., & Johnson, M. K. (2006). Importing perceived features into false memories. *Memory*, **14**, 197-213.
- Mandler, G. (1967). Organization and memory. In K. W. Spence & J. A. Spence(Eds.) *The Psychology of Learning and Motivation*. Vol.1. New York: Academic Press, pp. 327-372.
- Marks, D. F. (1973). Visual imagery differences in the recall of pictures. *British Journal of Psychology*, **64**, 17-24.
- Marsh, R. L., & Hicks, J. L. (1998). Test formats change source-monitoring decision processes. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **24**, 1137-1151.
- Mather, M., Johnson, M. K., & De Leonardis, D. M. (1999). Stereotype reliance in source monitoring: Age differences and neuropsychological test correlates. *Cognitive Neuropsychology*, **16**, 437-458.
- Mather, M., Henkel, L. A., & Johnson, M. K. (1997). Evaluating characteristics of false memories: Remember/know judgments and memory characteristics questionnaire compared. *Memory & Cognition*, **25**, 826-837.
- Mather, M., Mitchell, K. J., Raye, C. L., Novak, D. L., Greene, E. J., & Johnson, M. K. (2006). Emotional arousal can impair feature binding in working memory. *Journal of Cognitive Neuroscience*, **18**, 614-625.
- McDonough, I. M., & Gallo, D. A. (2010). Separating past and future autobiographical events in memory: Evidence for a reality monitoring asymmetry. *Memory & Cognition*, **38**, 3-12.

- McGinnis, D., & Roberts, P. (1996). Qualitative characteristics of vivid memories attributed to real and imagined experiences. *The American Journal of Psychology*, **109**, 59-77.
- McNally, R. J., & Kohlbeck, P. A. (1993). Reality monitoring in obsessive-compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **31**, 249-253.
- Merckelbach, H., Horselenberg, R., & Muris, P. (2001). The Creative Experiences Questionnaire (CEQ): A brief self-report measure of fantasy proneness. *Personality and Individual Differences*, **31**, 987-995.
- Merckelbach, H., Muris, P., Horselenberg, R., & Stougie, S. (2000). Dissociative experiences, response bias, and fantasy proneness in college students. *Personality and Individual Differences*, **28**, 49-58.
- Merckelbach, H., & Wessel, I. (2000). Memory for actions and dissociation in obsessive-compulsive disorder. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **188**, 846-848.
- Mitchell, K. J., & Johnson, M. K. (2000). Source monitoring: Attributing mental experiences. In E. Tulving & F. I. M. Craik(Eds.), *The oxford handbook of memory*. New York: Oxford University Press, pp.179-195.
- 水間玲子 (1998). 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究, **46**, 131-141.
- 森田泰介 (2004). 日常場面における展望的記憶課題遂行の規定因 千里山文学論集, **71**, 67-78.
- Morita, T., & Kawaguchi, J. (2010). Involuntary memory experience questionnaire: Examining the relationship between prospective memory and involuntary memory. Poster presented at the 3rd International Conference on Prospective Memory, Vancouver, Canada.
- 森田泰介・中田英利子 (2014). 未来・過去に関する無意図的想起と強迫観念との関連 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 380.
- 森敏昭 (2001). 記憶研究のパースペクティブ 森敏昭(編著) 認知心理学を語る 第 1 卷 おもしろ記憶のラボラトリー 北大路書房 pp. 1-14.
- Multhaup, K. S. (1995). Aging, source, and decision criteria: When false fame errors do and do not occur. *Psychology and Aging*, **10**, 492-497.
- 中田英利子 (2002). 現実とイメージを混乱させる要因の検討—ソース・モニタリング・パラダイムを用いて— 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 662.
- 中田英利子 (2003). ソース・モニタリング課題における視覚的詳細の質に関する検討—視覚的特徴の共通する対象と概念カテゴリーの共通する対象の比較— 日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 870.

- 中田英利子 (2004). ソース・モニタリング課題における判断手がかりに関する検討 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 829.
- 中田英利子 (2005). 記録時に喚起された視覚イメージが現実とイメージ判断に及ぼす影響—ソース・モニタリング課題を用いて— 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 821.
- 中田英利子・森田泰介 (2005). ソース・モニタリング・パラダイムに関する批判的検討 教育科学セミナリー, 36, 57-69.
- 中田英利子 (2006a). 自発的なイメージが現実とイメージの判断に及ぼす影響 教育科学セミナリー, 37, 31-39.
- 中田英利子 (2006b). 記録時とテスト時の表記形態が現実とイメージの判断に及ぼす影響(1)—ソース・モニタリング課題を用いて— 基礎心理学研究, 24, 日本基礎心理学会第 24 回大会発表要旨, 201.
- 中田英利子 (2006c). 記録時とテスト時の表記形態が現実とイメージの判断に及ぼす影響(2)—ソース・モニタリング課題を用いて— 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 874.
- 中田英利子 (2007a). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵の効果(1) 日本認知心理学会第 5 回大会発表論文集, 201.
- 中田英利子 (2007b). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵の効果(2) 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 804.
- 中田英利子 (2008a). ソース・モニタリング課題における誤判断に関する検討 哲学論集, 54, 学会活動報告 大谷大学哲学会秋季研究会, 102.
- 中田英利子 (2008b). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵刺激の効果 文学部心理学論集, 2, 53-62.
- 中田英利子 (2008c). 記録時とソース・モニタリング課題時の処理の一致・不一致の効果 日本認知心理学会第 6 回大会発表論文集, 49.
- 中田英利子 (2008d). ソース・モニタリング課題における言語ラベルと絵刺激の効果(3) 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 861.
- 中田英利子 (2008e). ソース・モニタリング課題における誤判断に関する検討—知覚とイメージにより記録した事象間のクロスモーダルな誤判断について— 基礎心理学研究, 27, 21-25.
- 中田英利子・森田泰介 (2009). 日常場面におけるソース・モニタリング・エラーに関する日誌法による検討 日本認知心理学会第 7 回大会発表論文集, 128.
- 中田英利子・森田泰介 (2010). リアリティ・モニタリング・エラー傾向質問紙の作成および信頼性・妥当性の検討 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 834.
- 中田英利子・森田泰介 (2011). リアリティ・モニタリング・エラー傾向質問紙の

- 再検査信頼性の検討 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 793.
- 中田英利子・森田泰介 (2012). リアリティ・モニタリング・エラー傾向に関する認知的特性の検討 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 810.
- 中田英利子・森田泰介 (2013). リアリティ・モニタリング・エラーと強迫神経症傾向の関連 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 316.
- 中田英利子・森田泰介 (2014a). リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 85, 168-177.
- 中田英利子・森田泰介 (2014b). 質問紙法と日誌法によるリアリティ・モニタリング・エラー経験の測定 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 453.
- Neisser, U. (1982). *Memory observed: Remembering in natural contexts*. San Francisco: Freeman.
- (富田達彦(訳) (1989). 観察された記憶—自然文脈での想起 誠信書房)
- 西本武彦 (1996). 記憶実験用 Picture 刺激の標準化(第 2 次) 早稲田大学心理学年報, 28, 59-85.
- 西本武彦・安田幸弘 (1982). 記憶実験用 Picture 刺激の標準化 早稲田大学心理学年報, 14, 55-76.
- Paivio, A. (1969). Mental imagery in associative learning and memory. *Psychological Review*, 76, 241-263.
- Putnum, F. W., Helmers, K., & Trickett, P. K. (1993). Development, reliability, and validity of a child dissociation scale. *Child Abuse & Neglect*, 17, 731-741.
- Pyszczynski, T., & Greenberg, J. (1987). Self-regulatory perseveration and the depressive self-focusing style: A self-awareness theory of reactive depression. *Psychological Bulletin*, 102, 122-138.
- Qin, J., Raye, C. L., Johnson, M. K., & Mitchell, K. J. (2001). Source ROCs are(typically) curvilinear: Comment on Yonelinas (1999). *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 27, 1110-1115.
- Rabbitt, P., Maylor, E., McInnes, L., Bent, N., & Moore, B. (1995). What goods can self-assessment questionnaires deliver for cognitive gerontology? *Applied Cognitive Psychology*, 9, S127-S152.
- Rabinowitz, J. C. (1990). Effects of repetition of mental operations on memory for occurrence and origin. *Memory & Cognition*, 18, 72-82.
- Rachman, S. (1997). A cognitive theory of obsessions. *Behaviour Research and Therapy*, 35, 793-802.
- Rachman, S., & Hodgson, R. (1980). *Obsessions and compulsions*. Hillsdale,

- NJ: Prentice-Hall.
- Radomsky, A. S., & Alcolado, G. M. (2010). Don't even think about checking: Mental checking causes memory distrust. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **41**, 345-351.
- Radomsky, A. S., Gilchrist, P. T., & Dussault, D. (2006). Repeated checking really does cause memory distrust. *Behaviour Research and Therapy*, **44**, 305-316.
- Raye, C. L., Johnson, M. K., & Taylor, T. H. (1980). Is there something special about memory for internally generated information? *Memory & Cognition*, **8**, 141-148.
- Reese, H. E., McNally, R. J., & Wilhelm, S. (2011). Probabilistic reasoning in patients with body dysmorphic disorder. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **42**, 270-276.
- Robertson, I. T. (1985). Human information-processing strategies and style. *Behaviour and Information Technology*, **4**, 19-29.
- Rogers, C. R. (1959). A Theory of Therapy, Personality, and Interpersonal Relationships, as developed in the Client-Centered Framework. In S. Koch (Ed.), *Psychology: A Study of a Science, vol. 3. Formulation of the Social Context*. New York : McGraw-Hill, pp.184-256.  
(ロジャーズ, C. R. 伊藤博(編訳)(1967). ロジャーズ全集第8巻: パースナリティ理論 岩崎学術出版社)
- Rosenthal, R., & Jacobson, L. F. (1968). Teacher expectations for the disadvantaged. *Scientific American*, **218**, 19-23.
- Rubenstein, C. S., Peynircioglu, Z. F., Chambless, D. L., & Pigott, T. A. (1993). Memory in sub-clinical obsessive-compulsive checkers. *Behaviour Research and Therapy*, **31**, 759-765.
- 坂本真士 (1997). 自己注目と抑うつの社会心理学 東京大学出版会  
坂本真士 (2001). 没入尺度 堀洋道(監修)・山本眞理子(編) 心理測定尺度集 I 人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉 サイエンス社 pp.58-63.
- Senkfor, A. J., & Van Petten, C. (1998). Who said what? An event-related potential investigation of source and item memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **24**, 1005-1025.
- Shapiro, A. M., & Roberts, J. E. (2003). *Attentional disturbances in depression: Content and control*. Manuscript in preparation, Buffalo State College, State University of New York.
- Sher, K. J., Frost, R. O., & Otto, R. (1983). Cognitive deficits in compulsive

- checkers: An exploratory study. *Behaviour Research and Therapy*, **21**, 357-363.
- 清水寛之 (2009). メタ記憶研究の歴史的展開 清水寛之(編著) メタ記憶—記憶のモニタリングとコントロール— 北大路書房 pp.1-21.
- 清水寛之・高橋雅延・齊藤智 (2006). 日常記憶に関する自己評価の分析—メタ記憶質問紙による検討— 心理学研究, **77**, 366-371.
- Simpson, H. B., Rosen, W., Huppert, J. D., Lin, S. H., Foa, E. B., & Liebowitz, M. R. (2006). Are there reliable neuropsychological deficits in obsessive-compulsive disorder? *Journal of Psychiatric Research*, **40**, 247-257.
- Slamecka, N. J., & Graf, P. (1978). The generation effect: Delineation of a phenomenon. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, **4**, 592-604.
- Smeets, T., Jelicic, M., Merckelbach, H., Peters, M., Fett, A., Taverniers, J., Henquet, C., & Dautzenberg, J. (2006). Enhanced memory performance on an internal-internal source monitoring test following acute psychosocial stress. *Behavioral Neuroscience*, **120**, 1204-1210.
- Smith, G., Della Sala, S., Logie, R. H., & Maylor, E. A. (2000). Prospective and retrospective memory in normal ageing and dementia: A questionnaire study. *Memory*, **8**, 311-321.
- Spaniol, J., & Bayen, U. J. (2002). When is schematic knowledge used in source monitoring? *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **28**, 631-651.
- Suengas, A. G., & Johnson, M. K. (1988). Qualitative effects of rehearsal on memories for perceived and imagined complex events. *Journal of Experimental Psychology: General*, **117**, 377-389.
- Sunderland, A., Harris, J. E., & Baddeley, A. D. (1983). Do laboratory tests predict everyday memory? A neuropsychological study. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **22**, 341-357.
- Sunderland, A., Harris, J. E., & Baddeley, A. D. (1984). Assessing everyday memory after severe head injury. In J. E. Harris, & P. E. Morris(Eds.), *Everyday memory, actions, and absent-mindedness*. London: Academic Press, pp.193-212.
- Sunderland, A., Watts, K., Baddeley, A. D., & Harris, J. E. (1986). Subjective memory assessment and test performance in elderly adults. *Journal of Gerontology*, **41**, 376-384.
- 田辺肇 (1994). 解離性体験と心的外傷体験との関連—日本版 DES(Dissociative

- Experiences Scale)の構成概念妥当性の検討—催眠学研究, **39**, 1-10.
- 田辺肇・小川俊樹 (1992). 質問紙による解離性体験の測定—大学生を対象にしたDES(Dissociative Experiences Scale)の検討—筑波大学心理学研究, **14**, 171-178.
- 寺岡隆 (1959). アナグラムの解読に及ぼす配列および刺激語の影響 心理学研究, **30**, 253-263.
- Thomas, A. K., Bulevich, J. B., & Loftus, E. F. (2003). Exploring the role of repetition and sensory elaboration in the imagination inflation effect. *Memory & Cognition*, **31**, 630-640
- Tversky, A., & Kahneman, D. (1973). Availability: A heuristic for judging frequency and probability. *Cognitive Psychology*, **5**, 207-232.
- von Hecker, U., & Meiser, T. (2005). Defocused attention in depressed mood: Evidence from source monitoring. *Emotion*, **5**, 456-463.
- Wilding, E. L., Doyle, M. C., & Rugg, M. D. (1995). Recognition memory with and without retrieval of context: An event-related potential study. *Neuropsychologia*, **33**, 743-767.
- Wilkinson, C., & Hyman, I. E. (1998). Individual differences related to two types of memory errors: Word lists may not generalize to autobiographical memory. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, S29-S46.
- 山田尚子 (1999). 失敗傾向質問紙の作成及び信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, **47**, 501-510.
- 山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 (2009). 日本語版 Brief Core Schema Scales の信頼性・妥当性 心理学研究, **79**, 498-505.
- 山崎修道・丹野義彦 (2002). 健常者の妄想的観念と強迫観念の関係について パス解析を用いた分析 日本性格心理学会第11回大会発表論文集, **11**, 66-67.
- Zelinski, E. M., Gilewski, M. J., & Anthony-Bergstone, C. R. (1990). Memory Functioning Questionnaire: Concurrent validity with memory performance and self-reported memory failures. *Psychology and Aging*, **5**, 388-399.
- Zermatten, A., Van der Linden, M., Larøi, F., & Ceschi, G. (2006). Reality monitoring and motor memory in checking-prone individuals. *Journal of Anxiety Disorders*, **20**, 580-596.

## 謝　辞

本論文を遂行し、学位論文をまとめる際には、多くの方々からのご支援とご指導を賜りました。指導教官である関西大学文学部の田中俊也教授には、終始懇切かつ力強いお導きを賜り、実に多くのことを学ばせて頂きましたことを深く感謝しております。また、多くのご指導をして頂き、辛抱強く見守って下さいました同学部の野村幸正教授には深く感謝しております。また、法政大学の藤田哲也先生、静岡大学の田辺肇先生、畿央大学の金敷大之先生、東京理科大学の森田泰介先生をはじめとするたくさんの方々から、大変温かいご指導、ご支援を頂きました。本研究を完成することができたのは、これからの方々のお陰です。誠に有り難く、心より感謝申し上げます。

## 付録1 DES

これは、日常生活であなたに起こるかも知れないいくつかのことがらについてお答えいただくものです。

お酒に酔ったり薬の影響を受けたりしていないとき、それぞれの項目にあるようなことが、あなたにどれくらいあるかをお答え下さい。

0%を「そういうことはない」、100%を「いつもそうだ」として、回答欄の数字の適當なところを○で囲んで、それがあなたにどれくらいあてはまるかを直観的にお答えください。

No.	項目
1	自動車・バス・電車・自転車などに乗っていて、今までそこに来るまでのあいだのこと(全て、または、ある場所からある場所までにあったこと)を覚えていないことにふと気がつく、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2	人の話を聞いているとき、言われたことの一部、または全部が、まったく耳に入っていなかったことにふと気がつく、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
3	自分がある場所にいるのに、そこはどうやってたどりついたのかわからない、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
4	着た覚えのない服を着ていた、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
5	自分のもちものの中に、買った覚えのない新しいものがふえていることに気がついた、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
6	みずしらずの人がやってきて、その人から違う名前で呼ばれたり、前に会ったことがあると言われた、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
7	まるで自分が自分自身のすぐそばに立っているかのように感じたり、自分が何かしているのを見ているかのように感じる、あるいは、まるで他人を見ているみたいに、実際に自分自身を眺めているように感じる、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
8	良く知っている人(友達や家族)なのに、それが誰だかわからないときがある(あるいはそのことを人から指摘されたことがある)、というような人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
9	人生上のある重要な出来事(例えば卒業や結婚式など)の記憶がまったくないのに気がついたことがある、というような人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
10	自分が言った覚えのないことで、うそをついたと責められる、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
11	鏡を見ているのに、映っているのが自分だと気がつかない、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
12	周囲の人や物や世界が現実でないように感じられる、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
13	自分の体が自分のものではないように感じられる、あるいは自分に属したものではないように感じられる、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。

## 付録1 続き

1 4	過去の出来事がとても鮮明に思い出され、まるでその出来事をもう一度体験しているかのように感じられる、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
1 5	自分の覚えていることが、実際に起こったことなのか、それともただ夢に見ただけなのか、はっきりしない、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
1 6	見慣れた場所にいるのに、なじみのない見慣れないところにいるように感じる、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
1 7	テレビや映画を観ていて、周囲で起こっているできごとに気づかないほど物語りに没頭していることがある、というような人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
1 8	まるでそれが現実に起こっていることに思えるほど、空想や白昼夢に引き込まれることがある、というような人がいます。 <sup>はくちゅうむ</sup> あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
1 9	痛みを無視できる(感じない)ことがある、というような人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 0	じっと空を見つめて、何も考えず、ただ座っていて、時間が経つのに気がつかないでいる、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 1	一人でいるとき、大きな声でひとりごとを言っていることがある、というような人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 2	状況によって全く違ったふうに自分が振舞うので、自分がまるで2人の別の人間のように感じられることがある、というような人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 3	ある状況の下では、普段なら困難なこと(例えばスポーツや仕事や対人関係など)をとても容易に、思うままになしとげられることがある、というような人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 4	あることを実際にしたのか、それともしようと思っただけなのかよく思い出せない(たとえば手紙を出してきたのか、それとも出そうと思っただけのはっきりしない)というような人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 5	したという記憶はないのに、何かをしていた(自分がそれをしたという形跡があった)、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 6	確かに自分が書いたと思われるメモや絵や文章があるのだが、それを自分で書いたということが思い出せない、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 7	何かをするよう促したり、自分のしていることに意見を言ったりする声が頭の中に聞こえる、というようなことのある人がいます。 <sup>うなが</sup> あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。
2 8	まるで世界を霧を通して見ているように感じられ、人や物が遠くに見える、または、ぼんやりと見える、というようなことのある人がいます。あなたにはこのようなことがどれくらいありますか。

## 付録2 日本語版 SDS

あなたの生活態度について教えて下さい。

以下のそれぞれの項目について、「はい」か「いいえ」のどちらかに○を付けて答えて下さい。

No.	項目
1	選挙の時は、すべての立候補者について十分に研究します。
2	たとえでしゃばってでも、困っている人を助けるのにちゅうちょしたことはありません。
3	励みがないと仕事を続けるのが大変なこともあります。
4	他人をひどく嫌ったことがありません。
5	自分が人生で成功できるだけの能力があるか心配になることもあります。
6	自分がうまくいかないと人を恨むこともあります。
7	服の着方にはいつも注意しています。
8	レストランで食べる時も自宅で食べる時も、等しく食事のマナーはちゃんとしています。
9	料金を払わずに映画館に入って、それを誰にも見られないのなら、たぶんそうすると思う。
10	何かをしていても自分に能力がないために、途中で中止することも時々あります。
11	時々人の噂話をするのが好きです。
12	たとえ目上の人（上司・先生・親など）の方が正しいと分かっていても、反感を感じることも時々あります。
13	誰の言うことでもちゃんと聞く方です。
14	仮病を使ったことがあります。
15	自分の利益のために、他人を利用したこともあります。
16	失敗をした時はいつも潔く認めます。
17	他人の言うことは、いつも自ら実行するようにしています。
18	たとえおしゃべりで不愉快な人とも付き合っていくのが特に難しいとは感じません。
19	他人のしたことを許して忘れることがあります、時には借りを返す（復しゅうする）ことを考えたりもします。
20	自分が知らないことを知らないと認めるることは気になりません。
21	たとえ自分の気にくわない人にも、いつも礼儀正しく振る舞っています。
22	自分の思い通りに事をしようと我を張ることも時にあります。
23	物をぶち壊したこともあります。
24	自分がしたことについて責任転嫁をしようと考へたことなど全くありません。
25	人に恩をさせられて、腹を立てたことなど全くありません。
26	人が自分と全く違う考え方をしても、困ったことなど全くありません。
27	ガスの元栓と戸締まりを確認せずに長期の旅行に出ることなど決してありません。
28	人の幸福にしつとを感じこともあります。

## 付録2 続き

2 9	人をガミガミ叱りつけたいと思ったことなどほとんどありません。
3 0	自分の好意をあてにした他人からの依頼に、イライラすることもあります。
3 1	自分が悪くないのに叱られたと感じたことは全くありません。
3 2	人の不幸を見て、ざまみろと感じたことも時にはあります。
3 3	人の気持ちを害することを、意識的に言ったことなど全くありません。

### 付録3 失敗傾向質問紙

以下の25の質問項目について、ふだんの自分にどのくらいよく起こるかを4=非常によくある、3=かなりある、2=時々ある、1=あまりない、0=まったくない、で回答してください。

No.	質問項目
1	本や新聞を読みながらぼんやりしてしまい、内容を理解するためにもう一度読み直す。
2	スーパー・マーケットに行って、ほしい品物が目の前にあるのにしばらく見つけられない。
3	決心するまでに、あれこれ迷ってしまう。
4	手に持っていたものをなげなくそこに置き、後になってどこに置いたか思い出せなくなる。
5	何かを聞いていなければならない時にぼんやり他のことを空想してしまう。
6	何か用事があってその部屋に行ったのに、何をするためだったのか思い出せない。
7	人の名前を思い出せない。
8	何か1つのことをしている時に、つい他のことがしたくなってしまう。
9	何かを思い出そうとしていて、喉まで出かかっているのに、どうしても出てこない。
10	何を買いにその店に来たかが、とっさに思い出せない。
11	物をなくしてしまう。
12	早く決めるように急がされると、かえって迷って決められなくなってしまう。
13	テストや面接の時にあがってしまい、落ち着いていたらもつとうまくできたのにと思う。
14	コンピュータやワープロが突然動かなくなり、原因を確かめる前に慌てて電源を切る。
15	駅のホームに駆け上がり、行き先を確かめずにちょうど来た電車に飛び乗ってしまう。
16	買い物に行ってどれを買おうか迷ってしまい、結局いいかげんに決めてしまう。
17	責任の重い仕事を任されると、緊張してふだんの力が出せない。
18	早く決めるように急がされると、よく考えずに決めてしまい後悔する。
19	もう少し待てば増えるとわかっていても、つい目先の利益を選んで損をする。
20	細かいことにこだわりすぎて、物事の全体的な局面を見過ごしてしまう。
21	ある考えが頭に浮かぶと、それ以外の可能性について考えられなくなる。
22	その日の予定が空いているかどうか、確かめないで約束してしまう。
23	残りのお金のことはよく考えないで、買い物する。
24	状況が変わっているのに、自分の考え方や態度を柔軟に変えられない。
25	ささいなことが気になって、かんじんなことを考えるのに集中できない。

#### 付録4 BDI

この質問紙のそれぞれの質問文をよく読んでください。  
 そして最近の気持ちを最もよく表している質問文を、各質問の中からそれぞれ1つ選択して、  
 その番号に○をつけてください。  
 それぞれの質問に同じ程度の質問文（選択肢）が複数あれば、複数の番号に○をつけてください。  
 ○をつける前に、各質問の質問文を全部読んでください。

No.	質問文
第1問	0 私は落ち込んでいない。 1 私は落ち込んでいる。 2 私はいつも落ち込んでいるから急に元気にはなれない。 3 私はとてもがまんができないほど落ち込んでいるし不幸だ。
第2問	0 私の将来について特に失望していない。 1 私の将来について失望している。 2 私の将来に期待するものはない。 3 私の将来には希望がもてないし、物事はよくならないと思う。
第3問	0 私は自分が失敗するとは思わない。 1 私は他人よりは失敗してきたと思う。 2 今までのことを考えると失敗をくり返してきたと思う。 3 私は人間として全くダメだと思う。
第4問	0 日常生活では大変満足している。 1 日常生活の出来事を楽しんではいない。 2 私は何にも本当に満足できない。 3 私はどんなことにも満足できないし退屈だ。
第5問	0 私は特に罪悪感をもっていない。 1 時々罪悪感を感じている。 2 私は多くの時間罪悪感を感じている。 3 私はいつも罪悪感を感じている。
第6問	0 私は罰を受けている（いわば罰が当たっている）とは思わない。 1 私は罰せられるかも知れないと思う。 2 私は罰せられるだろうと思う。 3 私は罰せられていると思う。
第7問	0 私は自分自身に失望していない。 1 私は自分自身に失望している。 2 私は自分自身にいやけがさしている。 3 私は自分自身が嫌いだ。
第8問	0 私は自分は他の人よりは良くないとは思わない。 1 私は自分の弱さや失敗について自分自身を責めている。 2 私は自分の欠点をいつも自分のせいにする。 3 嫌なことが起こるとそれを自分自身のせいにする。
第9問	0 自殺について考えたことはない。 1 自殺について考えたことはあるが実行したことではない。 2 自殺したいと思う。 3 もし機会があつたら自殺するだろう。
第10問	0 私はいつもより悲しい気持ちではない。 1 私はいつもより悲しい気持ちでいる。 2 私は今はいつも悲しい気持ちでいる。 3 私はいつも泣いていたが、今では泣きたいとおもっても泣けない。

#### 付録4 続き

第11問	0 私はこれまでのようないらいらしない。 1 私は今までより簡単に悩んでしまうし、いらいらする。 2 私はいつでもいらいらを感じる。 3 私はいらいらすらも感じなくなった。
第12問	0 私は他の人に対する興味を失っていない。 1 私は以前より他の人に興味を持たなくなった。 2 私は他の人への興味を大部分失った。 3 私は他の人への興味を失った。
第13問	0 私は自分なりの判断力がある。 1 私は今までのような判断力に乏しい。 2 私は以前よりも物事の判断に困難を感じる。 3 私は何も判断することができない。
第14問	0 私は自分の現実よりも悪くは見えない。 1 私は年をとり魅力を失って見えるのではないか気になる。 2 私はだんだん魅力がなくなったように思う。 3 私は自分の見かけが見苦しくなって来たと信じている。
第15問	0 私は以前と同様に仕事ができる。 1 何かをしようとするとき前よりも余分な努力をしなければならない。 2 何かを始めるときうんと頑張らなくてはならない。 3 私は何もしたくはない。
第16問	0 私はいつものように良く眠れる。 1 私はいつものように良く眠れない。 2 私は以前よりは1~2時間早く目がさめるしそれからはなかなか眠れない。 3 私は以前より数時間早く目がさめるし再び眠れない。
第17問	0 私はいつもより特に疲れたりはしない。 1 私は以前よりも簡単に疲れる。 2 私は何をやっても疲れる。 3 私は余り疲れるので何もできない。
第18問	0 食欲は普通だ。 1 食欲は以前よりは良くない。 2 今は食欲がない。 3 食欲は全くない。
第19問	0 最近大きな体重の減少はない。 1 最近2キロ以上体重が減った。 2 最近5キロ以上体重が減った。 3 最近7キロ以上体重が減った。 (食事制限の減量をしていますか。 1. はい 2. いいえ)
第20問	0 私は健康について特に気にしない。 1 私は体の問題について気にしている。 2 私は体の事が大変気になるので他の事を考えるゆとりがない。 3 体の問題について大変悩んでいるので他の事は何も考えられない。
第21問	0 性についての興味は特に変わっていない。 1 以前より性に対する興味が減少した。 2 今では性に対する興味が大変減少した。 3 性に対する興味が全くなくなった。

## 付録5 没入尺度

以下の項目を読んで、それが自分の性質に当てはまる程度を考えて下さい。  
 そして、最もよく当てはまるものを1つだけ選んで、選んだ番号を○で囲んで下さい。  
 あまり考え込まずに、思うとおりに回答して下さい。

No.	文章
1	長い間、自分についてのことで思いをめぐらせていることがよくある。
2	自分のことについて考え始めたら、なかなかそれを止めることができない。
3	他の人との比較で、自分自身についていつまでも考え続けることがよくある。
4	過ぎ去ったことについて、あれこれ考え続けることが多い。
5	自分はどんな人間なのか、長い間考え続けることがよくある。
6	自分がこういう人間であればなあと、いつまでも長い間空想することがある。
7	自分のことを考えるのに没頭していることが多い。
8	自分の能力について、長い間考えることが多い。
9	自分のことを考え出すと、それ以外のことに集中できなくなる。
10	つらかった思い出をいつまでもかみしめていることがある。
11	何らかの感情が湧いてきたとき(例:落ち込んだ時、うれしかった時)、なんでそんな気持ちになるのか、長いこと考えてしまう。
12	何かやりだしたら最後までやりとげなければ気がすまない方だ。
13	物事は、やりだしたら徹底的にしたい。
14	興味をもつたら、結構、のめり込んでしまう方である。
15	凝り性でものごとに熱中しやすいたちである。
16	大事な課題や仕事を始めたら、それが終わるまで別のことには手を出さない方だ。
17	ひとつのことが気になり出すと、それが片付くまで何かにつけて気になってしまう。
18	ひとつのことに興味をもつと、他のことには目を向けないとちである。
19	ひとつのことをやりだすと、つい他のことを犠牲にしてしまう。

付録6 WIQ

今ここにはいない、あなたがよく会っている親類とか友人とかのことを考え、あなたの心の眼に浮かぶ、その人のイメージを注意して見てください。そして、下の各項目によって呼び起こされるイメージの鮮やかさ、明瞭さを、判断の基準に従って分類し、それを記入欄に書いて下さい。

イ 顔や頭、肩、身体の正確な輪郭は

ロ いかにもその人らしい、頭の姿勢とかからだつきなどは

ハ 歩く時の正確な歩きぶりと歩幅などは

ニ その人がよく着ている衣服の色は

日の出を思い浮かべてください。そして、あなたの心の眼に浮かぶ、そのイメージを注意して見てください。それから、下の各項目によって呼び起こされるイメージの鮮やかさ、明瞭さを、判断の基準に従って分類し、それを記入欄に書いて下さい。

ホ 太陽が水平線からモヤのかかった空へ昇っています

ヘ 空は晴れていて、太陽のまわりの空はまっ青です

ト くもっています。嵐が吹き、稲妻も光っています

チ 虹が出ています

あなたがよく行く店の事を考え、あなたの心の眼に浮かぶそのイメージを注意して見てください。そして、下の各項目によって呼び起こされるイメージの鮮やかさ、明瞭さを、判断の基準に従って分類し、それを記入欄に書いて下さい。

リ 道路の反対側から見た店の全体の様子は

ヌ ひとつひとつの商品の色や形、細かな部分など、ウィンドウ・ディスプレイのようすは

ル あなたは店の入り口の近くにいます。ドアの色や形、細かいところは

ヲ あなたは店に入って売場に行きます。売場の店員は、あなたに色々とサービスします。  
お金が手から手へと渡ります。

木や山や、湖のある田舎の風景を考え、あなたの心の眼に浮かぶそのイメージを注意して見てください。そして、下の各項目によって呼び起こされるイメージの鮮やかさ、明瞭さを、判断の基準に従って分類し、それを記入欄に書いて下さい。

ワ 風景の輪郭は

カ 木の色や形は

ヨ 湖の色や形は

タ 木や湖に強い風が吹き、湖には波が起ります

【判断基準】

- 1=完全にハッキリしていて、実物を見ているようである。  
2=かなりハッキリしているが、実物を見ているほどではない。  
3=ハッキリした程度は、中位である。  
4=ボンヤリしていて、かすかである。  
5=全くイメージが浮かばないで、ただ言われたことについて自分が考えているということが、「わかっている」だけである。

イ 口 ハ ニ ホ ヘ ト チ リ ヌ ル ヲ ワ カ ヨ タ

## 付録7 VISQ

それぞれに文章の内容が普段の自分にどの程度当てはまるか、  
当てはまる程度を【5：よく当てはまる～1：全くあてはまらない】に置き換えて1つ〇をつけて回答して下さい。  
各質問、あまり深く考えず当てはまると思ったところを〇で囲んでください。

No.	文章
1	3次元的な立体図形を描くのが得意である。
2	一度目にした絵画や写真、テレビや映画などのイメージがいつまでも頭の中に残っている。
3	私のイメージは非常にカラフルで、鮮やかである。
4	カラフルな絵や写真の多い本よりも、グラフや表・モデル図の多い本のほうが好きである。
5	ホテルや旅館の部屋に入るとその部屋がどちら向きの部屋になっているのかわからなくなる。
6	道を曲がるところでいちいち目印を確認しなくても目的地に行ける。
7	写真のように鮮明な記憶を持っている。
8	頭の中で立体の図形を簡単にイメージしたり、回転させたりすることができる。
9	車で右折左折を繰り返して目的地に着いたとき、帰り道はどこでどう曲がったらよいかわからなくなる。
10	建物の見取り図や平面図を描くことが得意である。
11	地理や歴史を学ぶ際には、情景のイメージをよく思い浮かべる。
12	ルービックキューブのような空間的なゲームが得意である。
13	人の体験談を聞いているとき、私はときどきその状況を生き生きと想像している自分に気づくことがある。
14	私が思い浮かべる視覚的イメージは、実際に見たことのある物の大きさ、形、色とほとんど同じである。
15	立体の2次元平面図や建物の設計図を描くのが得意である。
16	考え事をするとき、絵や映像的なイメージを使うことが多い。
17	知らないところに行つても東西南北をあまり間違えない。
18	想起したイメージがあまりに鮮明なためにそれを無視することが難しいときがある。
19	ラジオのアナウンサーやDJが話すのを聞いているとき、いつもその情景や様子を具体的に思い描いている自分に気づく。
20	言葉で目的地までの行き方を教えてもらえば、目的地までの正しい道筋がわかる。
21	映像的なイメージを思い浮かべながら本を読むことが多い。
22	目を閉じると過去に経験した光景を容易に思い出すことができる。
23	感覚的に北がどちらかわかる。
24	日常生活のなかで、いつも映像的なイメージが浮かんでいる。

## 付録8 IMEQ

普段どう感じているかについて、各項目の右欄の最もよくあてはまる数字に○印をつけて下さい。

No.	質問
1	特にきっかけがないのに、数分前に自分が言ったことをふと思い出すことがありますか。
2	何かを見たり聞いたりして、近日中に何かを買わなければならないをふと思い出すことがありますか。
3	特にきっかけがないのに、数分前に自分が見ていたものなどをふと思い出すことがありますか。
4	何かを見たり聞いたりして、すぐに出さなければならぬ郵便物があるのをふと思い出すことがありますか。
5	特にきっかけがないのに、食事をしたことをふと思い出すことがありますか。
6	何かを見たり聞いたりして、すぐに仕上げなければならない課題があるのをふと思い出すことがありますか。
7	何かを見たり聞いたりして、旅行にいったことをふと思い出すことがありますか。
8	特にきっかけがないのに、すぐに連絡しなければならないことがあるのをふと思い出すことがありますか。
9	何かを見たり聞いたりして、数分前に自分がしていたことをふと思い出すことがありますか。
10	何かを見たり聞いたりして、近日中に持って行かなくてはならないものがあるのをふと思い出すことがありますか。
11	何かを見たり聞いたりして、数分前に自分が聴いていたものなどをふと思い出すことがありますか。
12	特にきっかけがないのに、近日中に誰かと会う約束をしているのをふと思い出すことがありますか。
13	何かを見たり聞いたりして、文化祭・体育祭などのイベントに参加したことをふと思い出すことがありますか。
14	特にきっかけがないのに、すぐに渡さなければならぬものがあるのをふと思い出すことがありますか。
15	特にきっかけがないのに、遊びにいったことをふと思い出すことがありますか。
16	特にきっかけがないのに、近日中に準備しておかなくてはならないことがあるのをふと思い出すことがありますか。

## 付録9 MOCI

以下の項目の文章について、あなたの日頃の考え方や気持ちに最も近いと思うところにひとつだけ○印をつけてください。  
あまり深く考えないで、気軽に思った通りに答えてください。

例. やりかけたことを途中でやめてしまうことが多い。

No.	項目
1	公衆電話を使うとき、不潔な感じがしてあまり良い気はしない。
2	嫌な考えが浮かぶと、そのことが頭から離れないことがある。
3	自分はできるだけ正直でありたいと思う。
4	時間どおりにできなくて、遅れたりすることが多い。
5	動物をさわった後、汚い感じがして気になる。
6	ガスや水道栓、ドアの鍵などがちゃんとしまっているか2回はチェックするようにしている
7	自分の良心が痛むことはしたくない。
8	自分で否定したくても、不愉快な考えが頭に浮かぶことがある。
9	電車などで人と接触したとき、汚い感じがして気になる。
10	普段何気なくやっていることが、ふと気になることがある。
11	子どもの頃、両親のしつけがとてもきびしかったと思う。
12	仕事を2度も3度も繰り返してやるので仕事が遅れがちである。
13	せっけんを使う量が人よりは多いと思う。
14	4, 13など気になる数字がある。
15	手紙を出す前に1回はチェックする。
16	朝、服を着替えるのに時間はそれほどかかりない。
17	それほどきれい好きというわけではない。
18	自分は細かいことにこだわりすぎていると思うことがある。
19	きれいなトイレなら、どんなトイレでも気にせず使える。
20	何回かチェックしないと気がすまない時がある。
21	病気にならないように必要以上に気をつける。
22	物事を2度も3度もチェックする。
23	少々予定に遅れそうになっても、毎日の日課をきちんと守る。
24	お金をさわっても汚いとは思わない。
25	単調で決まりきった仕事をしている時には、頭の中で「1, 2, 3, 4...」等、数を数えたりしている。
26	朝はたっぷり時間をかけて洗顔する。

## 付録9 続き

2 7	入れなくとも腐らないものまで、冷蔵庫に入れてしまう。
2 8	いろいろなことを2度も3度もチェックするので、かなりの時間を使ってしまう。
2 9	夜、服を片づけたりするのに、それほど多く時間がかかるない。
3 0	注意深く慎重に物事を行っても、「もう、大丈夫だ」という気になれない。

## 付録10 正立文字と鏡映文字

	正立文字	鏡映文字
0°	2	2
60°	2	2
120°	2	2
180°	2	5
240°	2	2
300°	2	2

## 付録 10 続き

5

எ

ஏ

ஒ

ஓ

ஔ

ஏ

ஒ

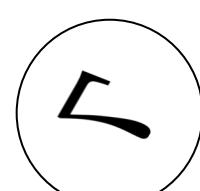
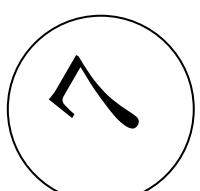
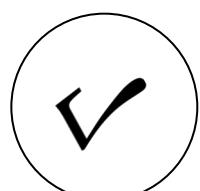
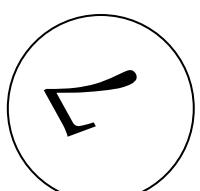
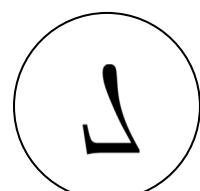
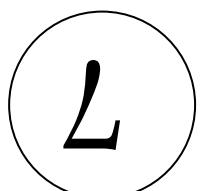
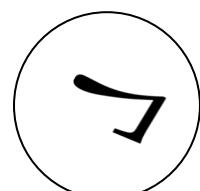
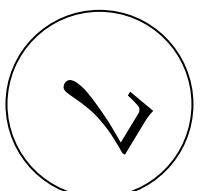
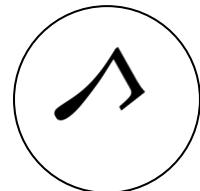
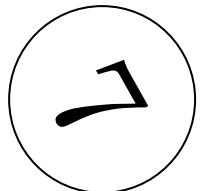
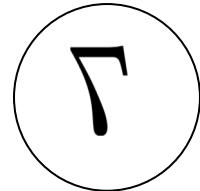
ஏ

ஒ

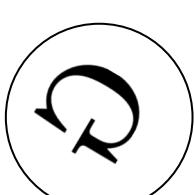
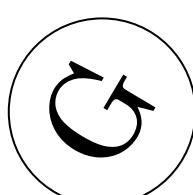
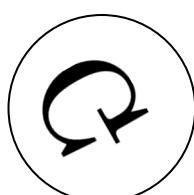
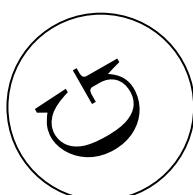
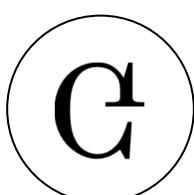
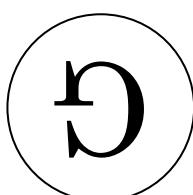
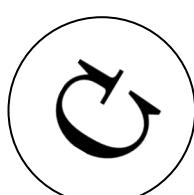
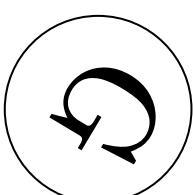
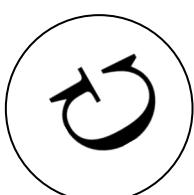
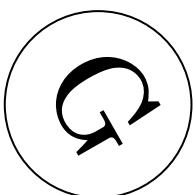
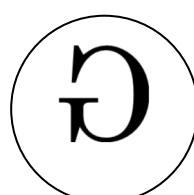
5

ஏ

## 付録 10 続き



## 付録 10 続き



## 付録 10 続き

J

ſ

j

ſ

f

ſ

f

ſ

ſ

ſ

J

ſ

## 付録 10 続き

R

Я

Р

Ь

Р

Ь

Р

Ь

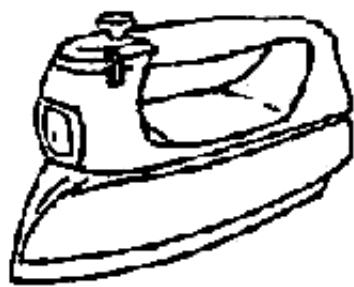
Р

Ь

Р

Ь

## 付録11 線画と言語ラベル



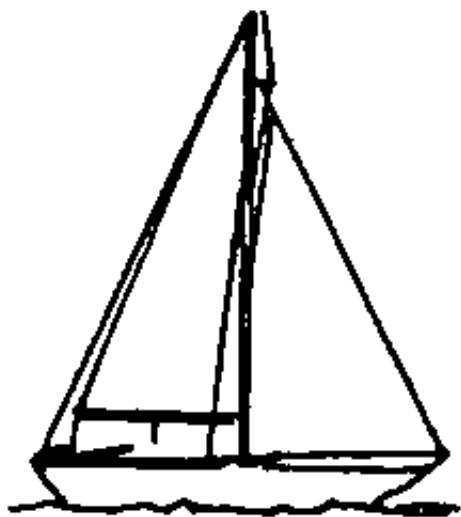
アイロン



ウサギ



ミミ



ヨット

## 付録11 続き

1 アイロン	41 ホウキ	81 ホン
2 イルカ	42 ホネ	82 ミミ
3 ウサギ	43 ミシン	83 オルガン
4 エントツ	44 メガネ	84 クジラ
5 カイダン	45 ユキダルマ	85 コト
6 カガミ	46 ヨーヨー	86 サイロ
7 カニ	47 ヨット	87 スズメ
8 カブトムシ	48 ライオン	88 ニンジン
9 カボチャ	49 レイゾウコ	89 マツ
10 カメ	50 ロウソク	90 マンネンヒツ
11 キツツキ	51 アリ	91 ユリ
12 コウモリ	52 イド	92 カサ
13 サイ	53 エンピツ	93 クモ
14 サンリンシャ	54 キンギョ	94 セーター
15 ジテンシャ	55 コマ	95 タイヨウ
16 センカン	56 スカート	96 ハーモニカ
17 ダイコン	57 スプーン	97 イカリ
18 タケウマ	58 センスイカン	98 オヤユビ
19 タバコ	59 タケ	99 サンドイッチ
20 タル	60 ダンロ	100 タツノオトシゴ
21 チュリーッップ	61 テレビ	101 デンキュウ
22 ツバメ	62 テントウムシ	102 ペン
23 テント	63 ドア	103 キ
24 トマト	64 ノコギリ	104 タイホウ
25 トロッコ	65 ハシゴ	105 タマネギ
26 トンボ	66 ヤカン	106 トウモロコシ
27 ネクタイ	67 サメ	107 カタナ
28 ハサミ	68 サンカクジョウギ	108 タキ
29 ハリ	69 シタ	109 ヤマ
30 ヒマワリ	70 バラ	110 ジンジャ
31 ピラミッド	71 マド	111 スイッチ
32 プール	72 ギター	112 ピエロ
33 フォーク	73 クギ	113 キノコ
34 ブタ	74 ケーキ	114 スケートグツ
35 ブランコ	75 コップ	115 フウトウ
36 ベッド	76 ハーブ	116 エビ
37 ヘリコプター	77 バス	117 カギ
38 ヘルメット	78 ハタ	118 カタツムリ
39 ペンギン	79 ヘビ	119 キョウカイ
40 ペンチ	80 ボタン	120 ピストル

## 付録12 アナグラム課題の刺激

1	にわとり	38	はちまき	75	さけのみ
2	ゆうやけ	39	そこぬけ	76	なまいき
3	ふるさと	40	ふくろう	77	ためいき
4	ふろしき	41	めいわく	78	まつたけ
5	ひまわり	42	くらやみ	79	かみさま
6	みそしる	43	ろうそく	80	おしろい
7	そらまめ	44	ほうせき	81	のりまき
8	はきもの	45	くるしみ	82	あかおに
9	むらさき	46	いもうと	83	いきもの
10	あみもの	47	とらねこ	84	かなしみ
11	ちえのわ	48	かきとり	85	かまきり
12	あめふり	49	さいころ	86	のうみそ
13	せともの	50	むしとり	87	あまもり
14	しりもち	51	しもやけ	88	わかもの
15	ゆうれい	52	やけあと	89	くものす
16	としより	53	よそゆき	90	まつむし
17	にせもの	54	ほらふき	91	しきもの
18	のらいぬ	55	しらゆり	92	さかもり
19	かみなり	56	ふろおけ	93	いしけり
20	ひこうき	57	ものしり	94	おうさま
21	さかなや	58	こしかけ	95	たねまき
22	とのさま	59	くつした	96	なめらか
23	はねつき	60	はらまき	97	まよなか
24	もちつき	61	おちつき	98	ひのまる
25	こうもり	62	しいたけ	99	はらわた
26	わるもの	63	はちみつ	100	まえかけ
27	かみそり	64	やすもの	101	おくさま
28	ふみきり	65	あいさつ	102	くさむら
29	うそつき	66	まきもの	103	ぬかるみ
30	いねむり	67	あきらめ	104	てにもつ
31	かねもち	68	あさめし	105	はつめい
32	たけのこ	69	まないた	106	めすねこ
33	ひるめし	70	のりかえ	107	ゆかいた
34	つけもの	71	はるさめ	108	すなはま
35	くすりや	72	あおのり	109	ついたて
36	ほねおり	73	はやおき		
37	へたくそ	74	はこにわ		